

24 X 24

78-98

近世泰西英傑傳

第49卷

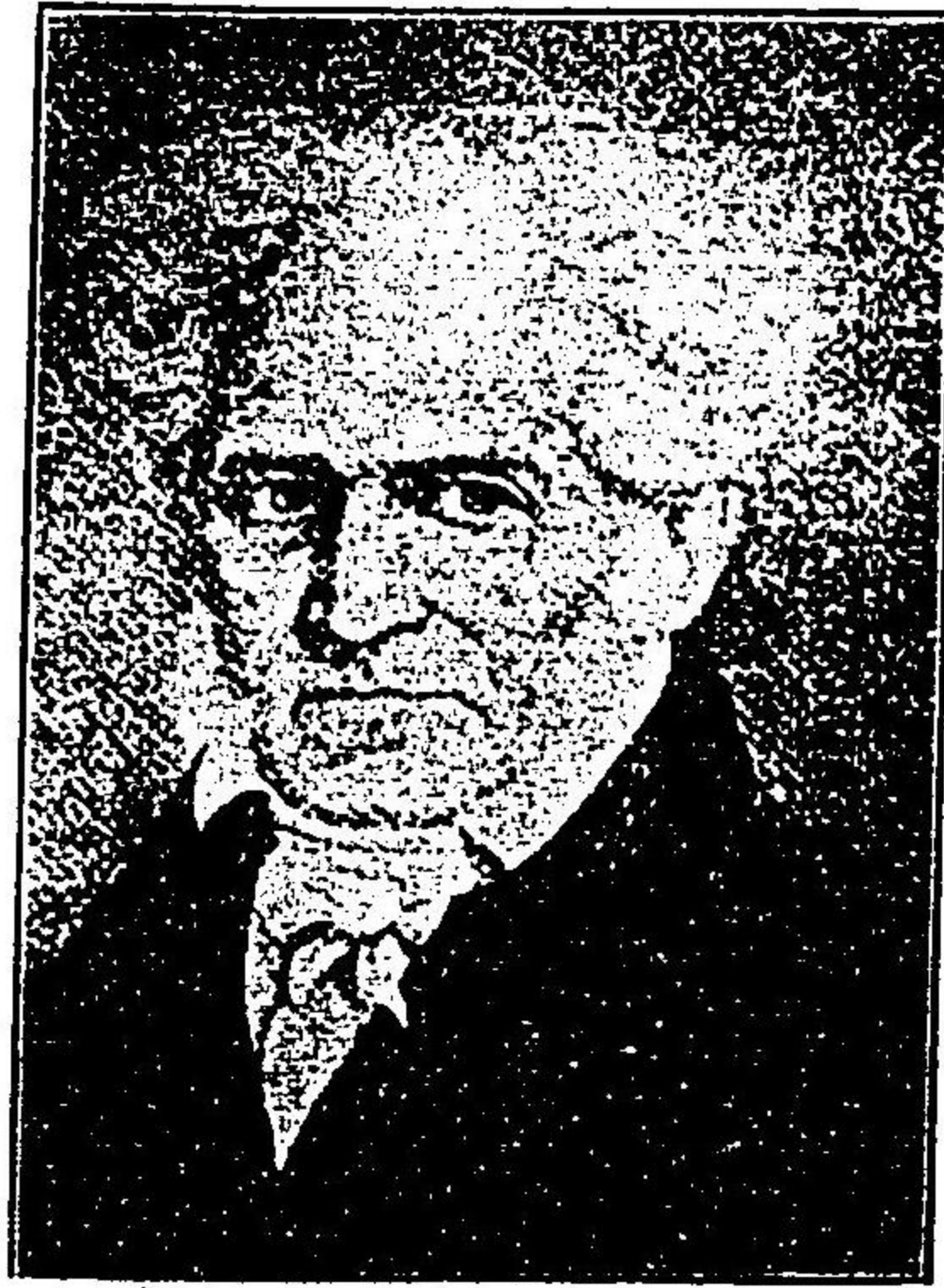
大日本文明會刊行

協

49

第五卷

明治 45. 4. 19 東京



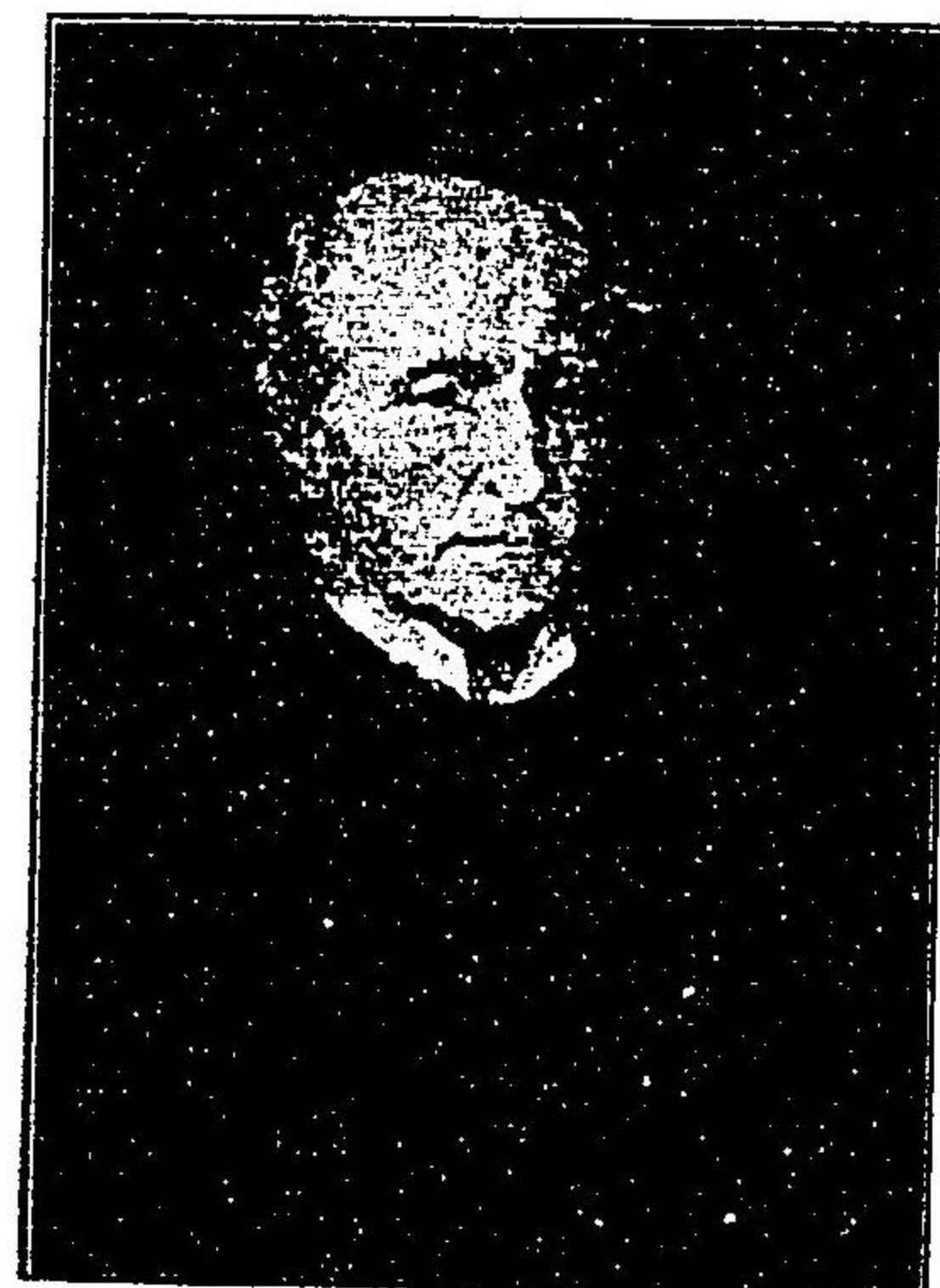
ルエウハンペーヨシ
(逸 獨)



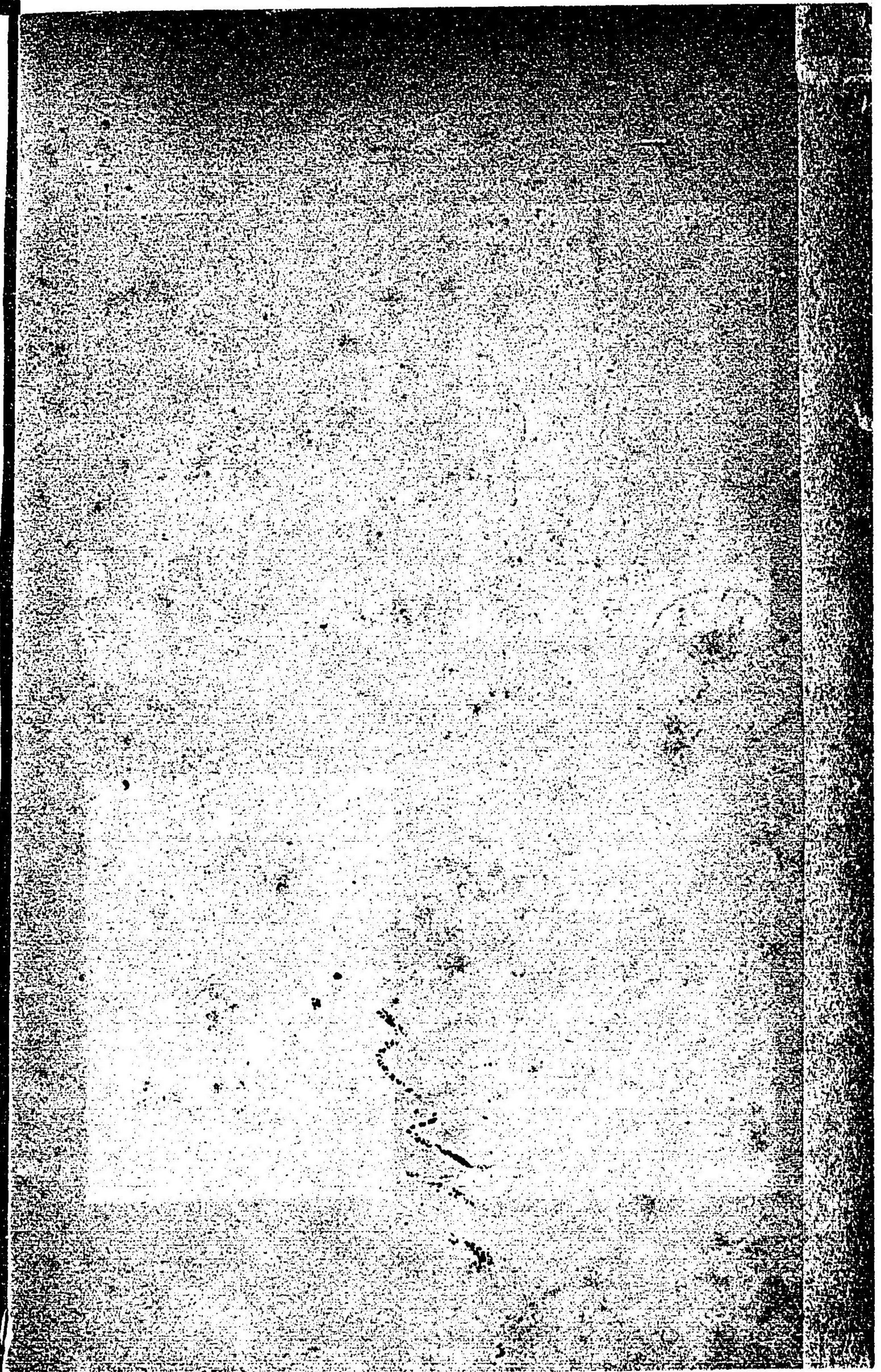
ト ム コ
(國 佛)



ン ー リ グ
(國 英)



ル
(國 英)





ク ッ ナ ル ハ
(逸 獨)



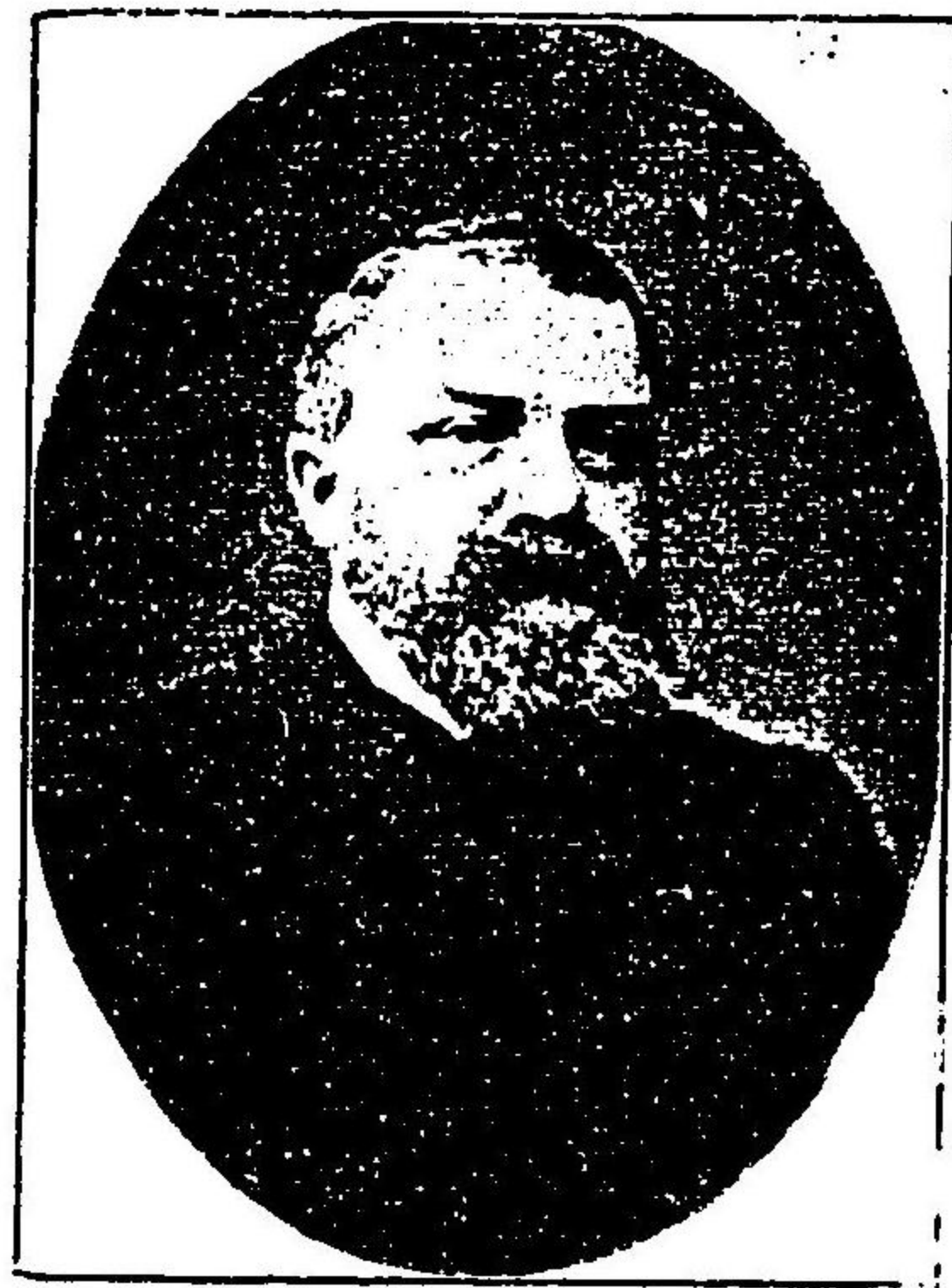
ドルノーア・アシュマ
(家育教)



ル ベ ー レ フ
(家育教)



世三十オレ
(家教宗)



ーイデーム
(家教宗)



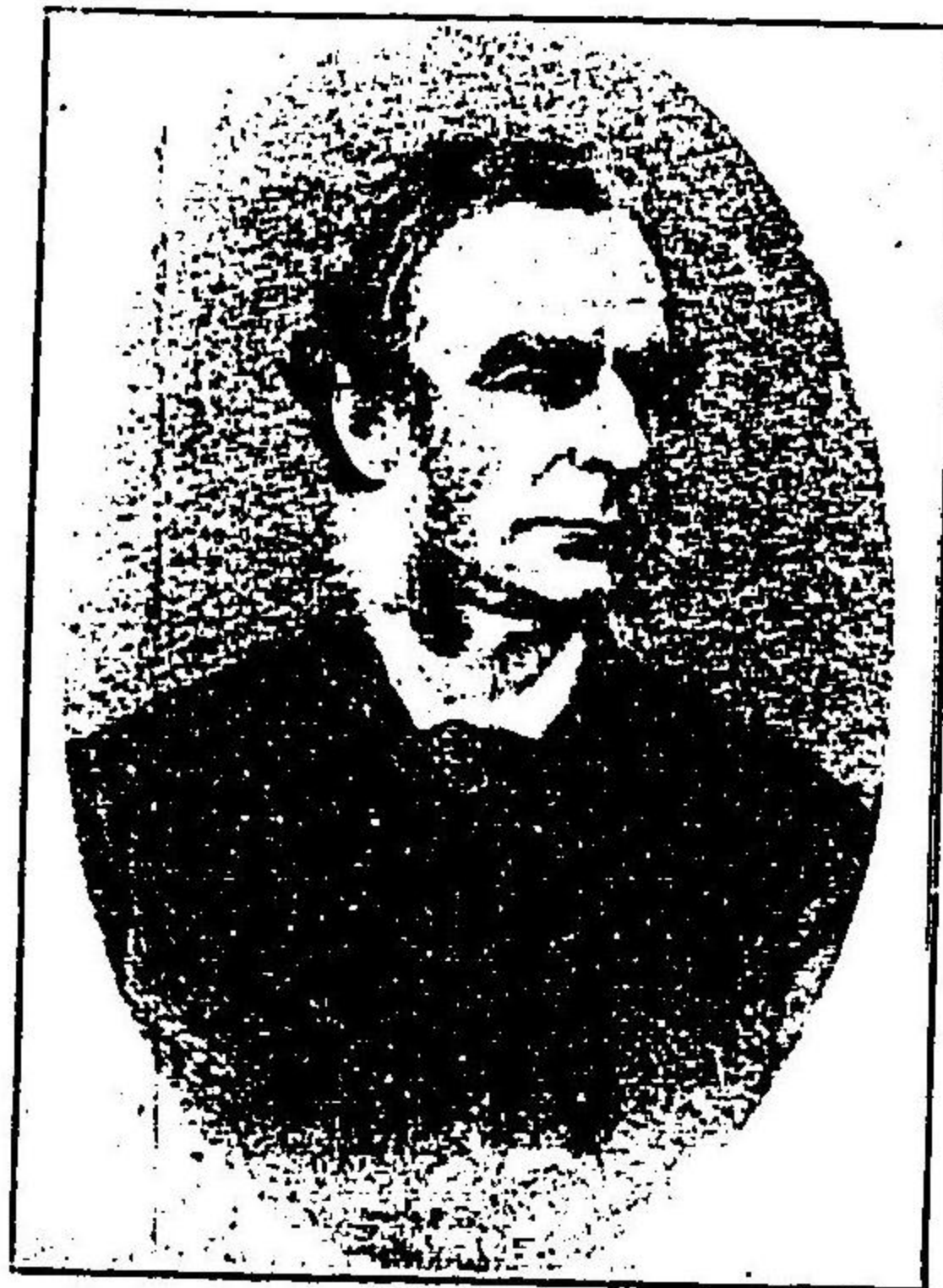
ンマーユニ
(家教宗)



ス ク ル マ
(者義主會社逸獨)



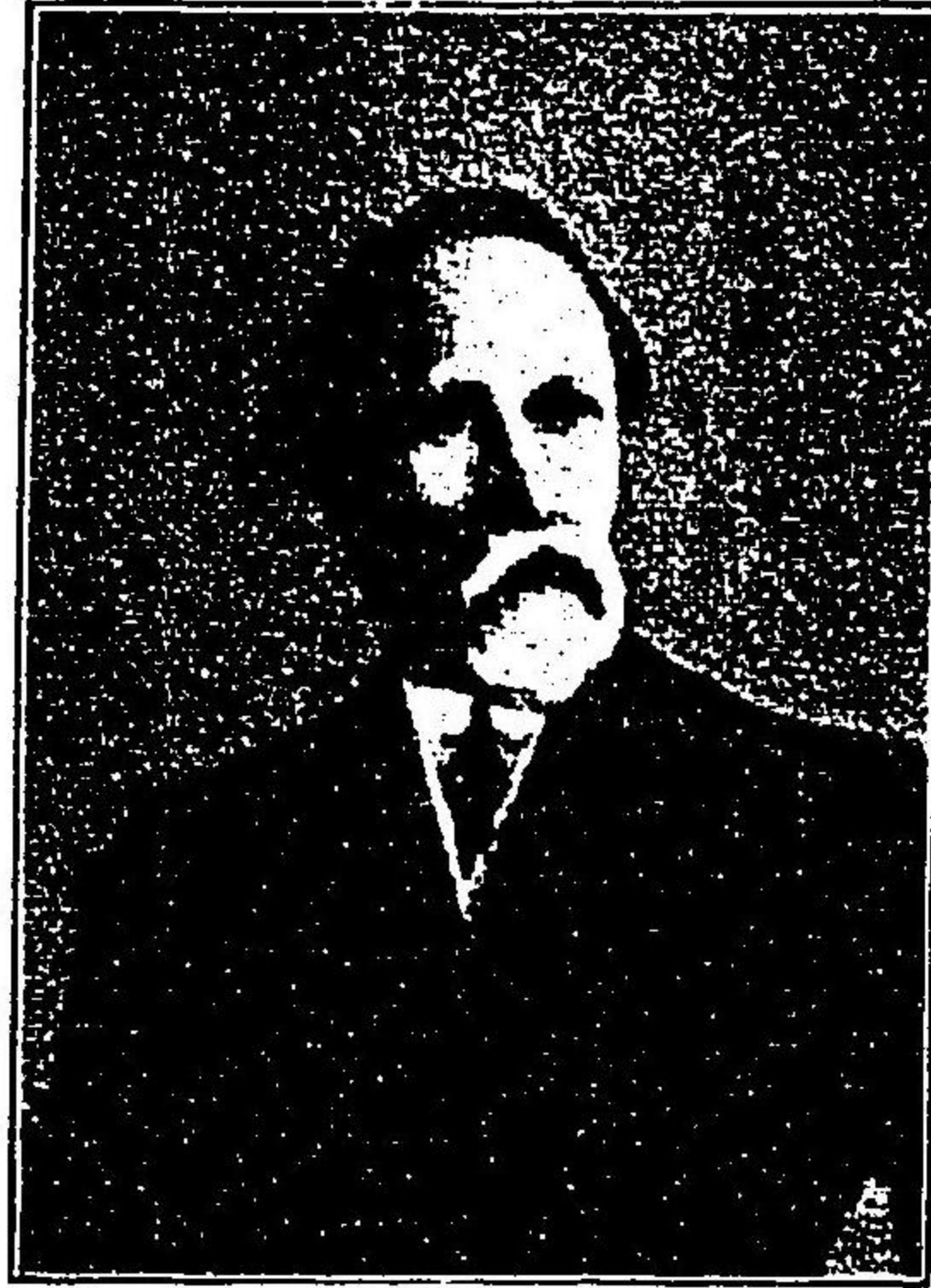
ー レ ー ロ ジ
(者義主會社國佛)



ー レ ス グ ン キ
(者義主會社國英)



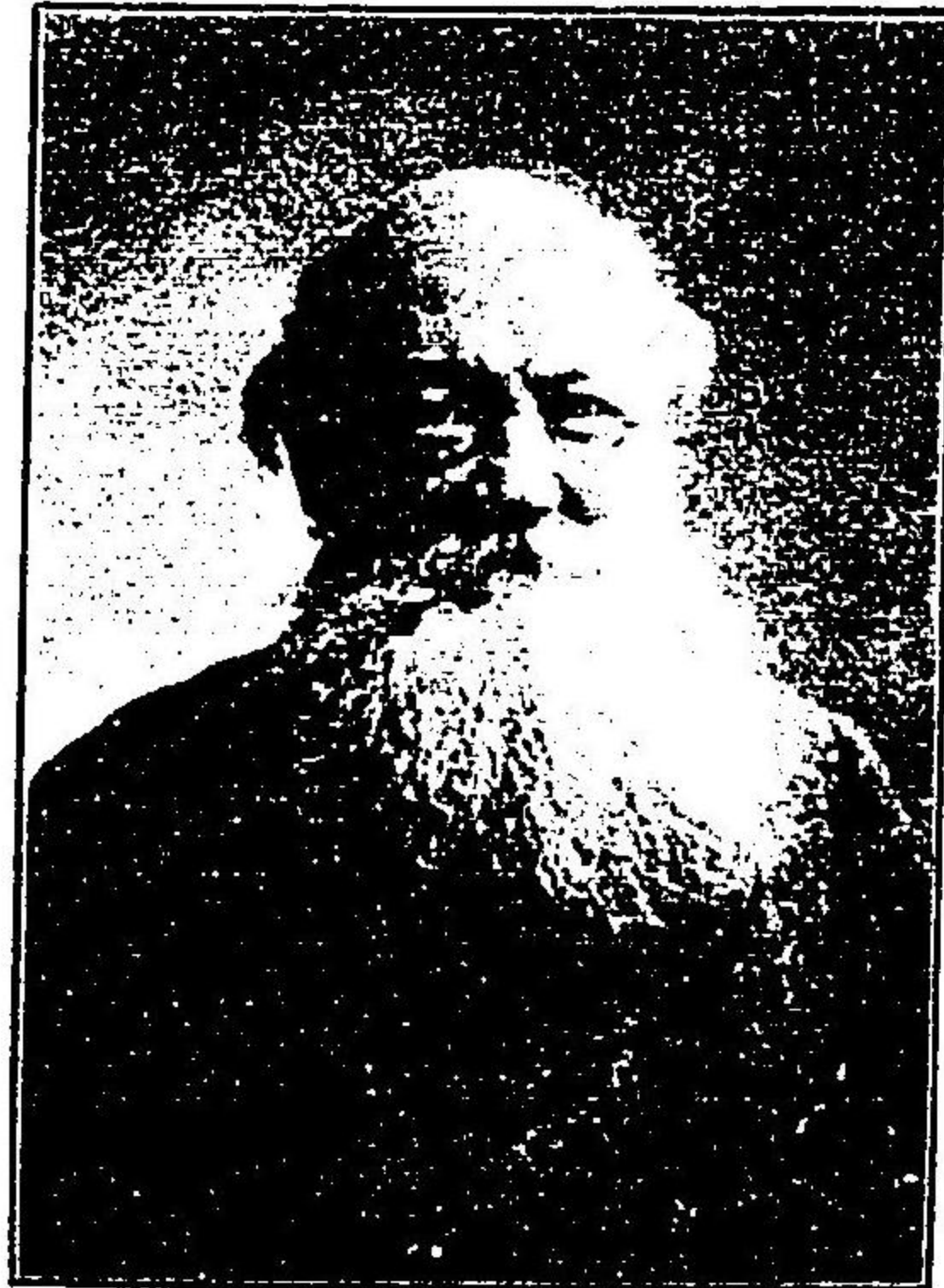
ル ベ ー ベ
(者義主會社逸獨)



ーイデーハ
(者義主會社國英)



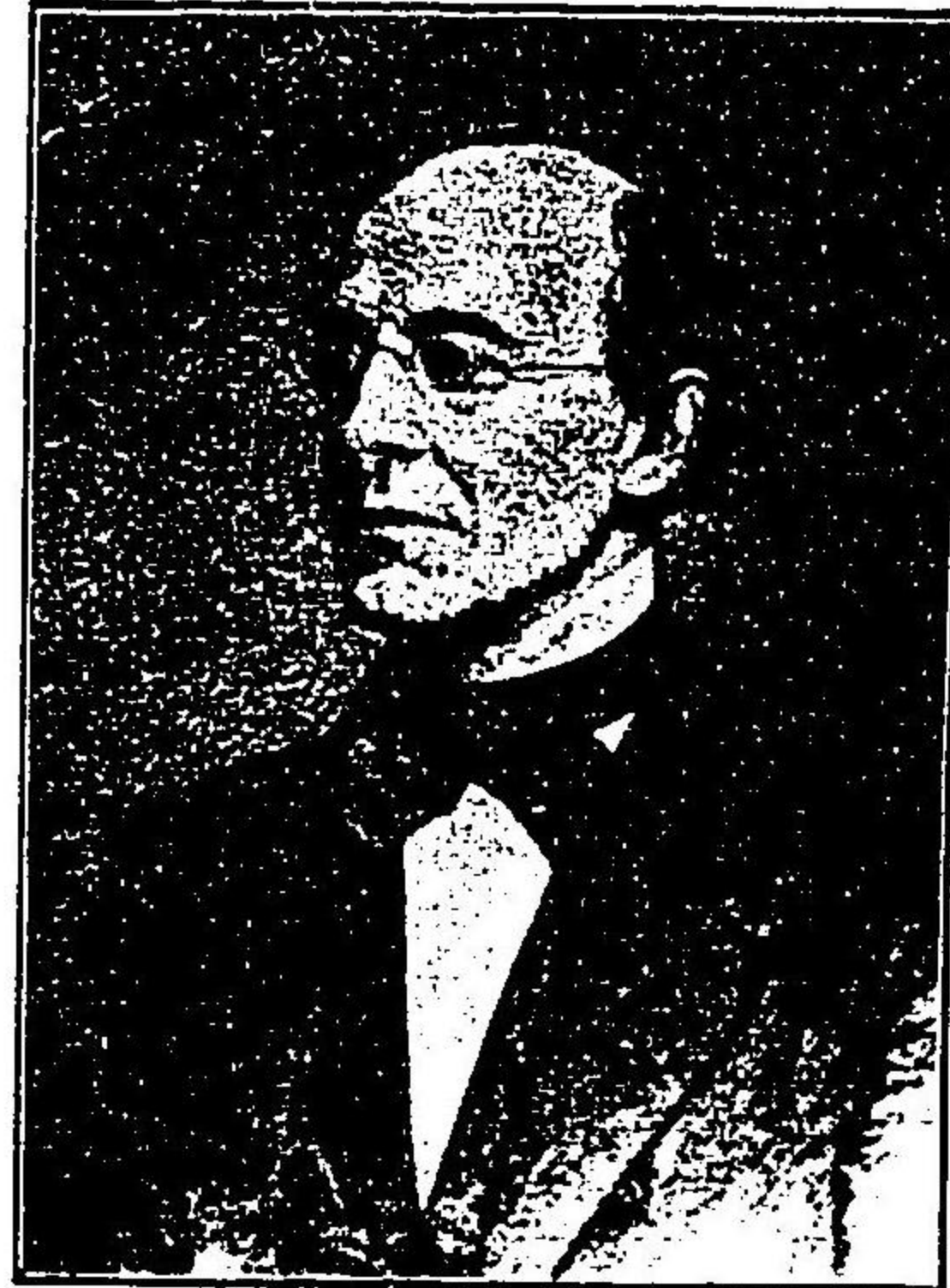
ス ン ー パ
(者義主會社國英)



ン キ ト パ ロ ク
(者義主命草)



ントシヨウ
(家育教人黒)



ンソリガ
(者動運放解人黒)



リベツファシ
(者済救者協勞)



人夫ンソーダンア
(者論放解人婦)



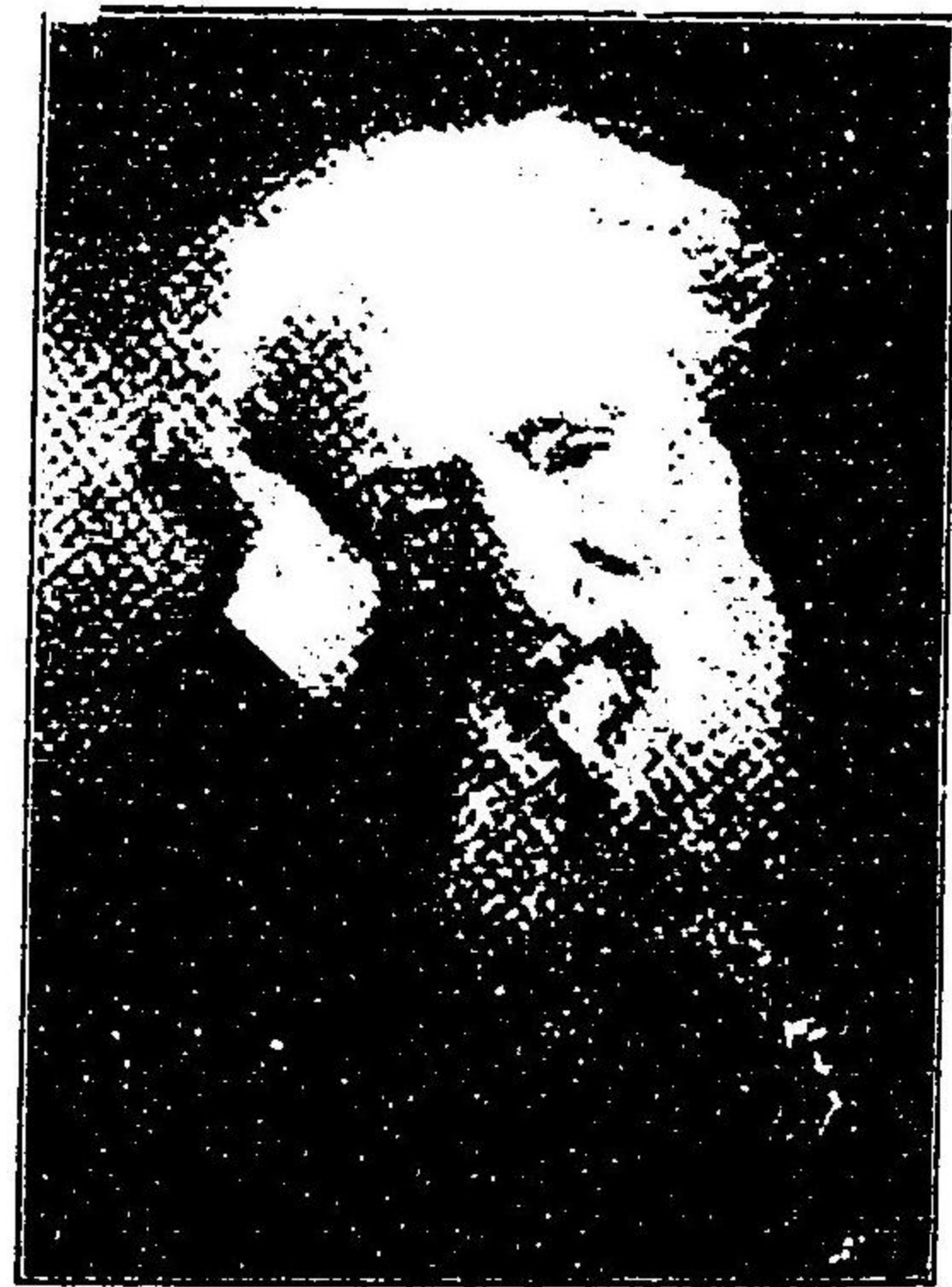
イ ラ フ
(者助運良改獄蓋)



ト ル ー ソ
(者濟救者働勞)



ス ム ガ ッ プ
(者濟救者働勞)



ス ー プ
(者始創軍世救)

序

本卷は近世泰西英傑傳の末尾にして收むる所は最近代に於ける哲學家、宗教家、社會改革家、慈善救濟家の傳記なり。凡ての學問、凡ての藝術畢竟社會の改善、人類の救濟を目的となさざるはなし。近世文化の發展と共に凡百の科學各專門に分れて窮極する所を知らず、萬有の知識を綜合し、宇宙の眞理を組織するものなくば、人間思想界の混亂收拾す可からざるに至らんとす。而して思想界の混亂はやがて社會上に影響を及ぼさんこと知る可きなり。哲學者の任務も亦た大なりと言はざる可からず。如何に科學は發達し、知識は進歩すと云ふとも、宇宙の不可思議は解く可からず、人間終極の運命は脱す可からず。斯かる無常の世界に在りて安心立命の地に導く者、是實に宗教家の天職に非ずして何ぞや。政治、經濟、法律、工藝、兼ね備りて社會の富は激増し、文化燦然として光を發する現代に猶消滅し難きは貧富の軋轢、人種の衝突なり。政治家は有力なる階級の輿論及び過去の習慣に制せられて眞理を語らず、又た眞理を行ふの勇なし、而して人類學者は事實

の叙述説明を事として人種問題を解決す可き關鍵あるを知らざるなり此の時
に當り社會改革家、民族救済家、婦人解放論者、勞動救済者、赤十字創始者、監獄改良
家、禁酒運動者、救世軍設立者、産業組合創始者等輩出して造化の功を賛翼し、文明
の弊を匡正しつゝある事實は方今西洋に見る可くして東洋に無き所の偉觀な
り。假令泰西の現状に何程墮落衰亡の兆候ありとするも斯かる博愛慈善の義俠
家世に出づる間は社會の改良、人類の向上更に疑を容る可からず。本卷に掲ぐる
所の傳記は實に天地の心を流露せる人間の活動その絶頂に達し、所謂正氣の磅礴
する所、凜烈萬古に存するものと言ふ可し。而して本傳爰に其終りを告ぐるを
得たるは實に前卷に表彰せる文學士煙山專太郎君の努力に外ならず。本會は本
傳の完成を祝すると同時に、重ねて此事を記載し、同君に鳴謝す。

明治四十四年十二月

大日本文明協會編輯局識

目次

第一編 哲學家

第一章 佛國哲學者

| | |
|--------------------|-----|
| 第一章 コムト | 一—五 |
| 一 その幼時 | 一—三 |
| 二 サン・シモンの感化 | 三—五 |
| 三 結婚 | 五—七 |
| 四 公職に就く | 七—九 |
| 五 「實驗哲學」の完成 | 九—二 |
| 六 ミルとの交際及びコムトの生計問題 | 二—四 |
| 七 彼の晩年 | 四—六 |
| 八 彼の哲學 | 六—八 |

第二章 英國哲學者

| | |
|-----------------------------|-----|
| 第二章 ミル | 一—六 |
| 一 英國の思想界、ミルの幼少時代(一八〇六年—二〇年) | 一—六 |

二 自己修養期(一八二一年—二五年)……………三〇七

三 反ヘンサム主義時代(一八二六年—四〇年)……………三〇七

四 コムトの影響(一八四一年—四四年)……………三〇七

五 收穫時代(一八四三年—七三年)……………三〇七

六 結論……………三〇七

第三章 グリーン……………三〇七

一 小傳……………三〇七

二 彼の人物性行……………三〇七

三 「靈驗論」の批評……………三〇七

第四章 シジウイグ……………三〇七

一 ケムブリジの教授生活……………三〇七

二 女子教育に關する彼の努力……………三〇七

三 彼の心象研究及び其著述……………三〇七

四 彼の學風……………三〇七

五 彼の立脚地……………三〇七

六 其人物……………三〇七

第三 丁抹哲學者

第五章 キールキガールド……………三〇七

一 小傳……………三〇七

二 彼の哲學……………三〇七

第四 獨逸哲學者

第六章 ショーベンハウエル……………三〇七

一 近世文明とショーベンハウエル……………三〇七

二 略傳……………三〇七

三 ショーベンハウエルの學說……………三〇七

四 小傳……………三〇七

第七章 ニーチエ……………三〇七

一 其生涯及び著作……………三〇七

二 彼の人格……………三〇七

三 彼の思想發達の三大區分……………三〇七

四 七非主義と七主張……………三〇七

五 超人及び永劫輪廻說……………三〇七

六 結論……………三〇七

第八章 ハルナック……………一八一—一九一

一 學歴……………一八一—一九一

二 彼の傑作……………一八一—一九一

三 「論文集」……………一八一—一九一

第九章 オイケン……………一八二—一九二

一 小傳……………一八二—一九二

二 オイケンの人生觀……………一八二—一九二

三 彼の靈魂不滅論……………一八二—一九二

第五 米國哲學者

第十章 ジェームズ……………一九三—一九三

一 學歴……………一九三—一九三

二 著書及び其學說の特點……………一九三—一九三

三 「實際主義」……………一九三—一九三

第二編 教育家

第十一章 フレーベ……………一九四—一九四

一 多端の幼年時代……………一九四—一九四

二 教育事業に其身を投ず……………一九四—一九四

三 學校の創始……………一九四—一九四

四 晩年……………一九四—一九四

五 彼の教育論……………一九四—一九四

第十二章 メリ・ライオン……………一九五—一九五

一 貧しき農女……………一九五—一九五

二 女教師となる……………一九五—一九五

三 高等女學校を創始す……………一九五—一九五

四 女子學院長……………一九五—一九五

五 女子の教育主義と外國傳道事業……………一九五—一九五

第十三章 アーノルド父子……………一九六—一九六

第一 トーマス・アーノルド……………一九六—一九六

一 學校生活……………一九六—一九六

二 其教育事業……………一九六—一九六

三 晩生……………一九六—一九六

第二 マシュー・アーノルド……………一九七—一九七

第三編 宗教家

第十六章 レオ十三世……………二七—三三

- 一 緒言……………二七—三三
- 二 其出生……………二七—三三

- 一 小言……………一四—一五
- 二 文人としてのアーノルド……………一五—一六
- 三 教育家としてのアーノルド……………一六—一七

第十四章 ラマバイ……………一七—二二

- 一 印度に於ける女子の地位……………一七—二二
- 二 女史が流浪の生活……………二二—二三
- 三 教育事業……………二三—二四

第十五章 ハリス……………二四—三〇

- 一 経歴……………二四—三〇
- 二 ヘーゲル教育學の使徒……………三〇—三一
- 三 彼の知育論……………三一—三二
- 四 著作……………三二—三三

- 三 其教育……………二七—三三
- 四 其職務……………二七—三三
- 五 其即位……………二七—三三
- 六 各國との折衝……………二七—三三
- 七 法皇として公にしたる勅勅……………二七—三三
- 八 個人としてのレオ法皇……………二七—三三
- 九 臨終の前後と崩御……………二七—三三

第十七章 ビオ十世……………三三—三六

- 一 貧兒の出世……………三三—三六
- 二 羅馬法皇となる……………三三—三六

第十八章 メリー・デル・ワル……………三六—四〇

第十九章 ニューマン……………四〇—四六

- 一 彼の家族……………四〇—四六
- 二 初學……………四〇—四六
- 三 僧侶となる……………四〇—四六
- 四 外遊……………四〇—四六
- 五 オクスフォード運動……………四〇—四六

六 羅馬加特力教に投ず……………三六〇—三六六

七 カイデナルに任せらる……………三六一—三六〇

八 宗教家としてのニーマン……………三六〇—三六四

第二十章

ムーディー……………三六四—三六七

一 多兒の貧窮婦……………三六四—三六八

二 ホストンに出づ……………三六八—三七〇

三 宣教師となる……………三七〇—三七三

四 南北戦争時代の彼の運動……………三七三—三七〇

五 青年會館長に推さる……………三七〇—三七一

六 英國の傳道……………三七一—三七三

七 功成り名遂ぐ……………三七三—三七五

第四編 社會改革家

第一 社會主義者

其一 佛國社會主義者

第二十一章 プラン……………三六九—三七九

一 小傳……………三六九—三七〇

二 彼の勞働論……………三七〇—三七三

三 彼の著書……………三七三—三七九

第二十二章

ジョーレー……………三七九—三八九

一 小傳……………三八九—三九二

二 佛國社會黨中に於けるジョーレーの位置……………三九二—三九五

三 ジョーレーの排總同盟罷工論……………三九五—三九七

四 所謂ジョーレー事件……………三九七—三九九

第二十三章

ジョーレル……………三九九—四〇〇

一 新人物の出現……………四〇〇—四〇三

二 ソーレルの無政府主義及び議院社會主義評……………四〇三—四〇七

三 非軍國主義……………四〇七—四〇九

四 彼の一般的全盟罷工論……………四〇九—四一〇

其二 獨逸社會主義者

第二十四章

カール・マルクス……………四一〇—四二七

一 其教育 彼が經歷の轉機……………四二七—四三〇

二 彼の奮闘的生活の開始……………四三〇—四三二

三 二月革命とマルクス……………二一—二二七

四 彼の大著「資本論」其死……………二二七—二四三

五 學界に於ける彼の地位 其他……………二四三—二四九

六 彼の人と爲り……………二四九—二五三

七 彼の家庭生活……………二五三—二五七

八 彼の學說……………二五七—二六七

第二十五章 ベーベル……………二六八—二七九

一 小傳……………二六八—二七二

二 彼が議會に於ける辯舌……………二七二—二七六

三 近世社會主義とユトピア的社會主義との差違……………二七六—二八九

第二十六章 ベルンスタイン……………二九〇—二九一

一 「理論社會主義と實際的社會民主主義」……………二九〇—二九六

二 富の集中既及び生産事業の必減税を訴す……………二九六—三〇五

三 科學的社會主義を排す……………三〇五—三〇七

其三 英國社會主義者

第二十七章 キングスレー……………三〇七—三〇九

一 其略傳……………三〇七—三〇九

ニ 社會主義者としてのキングスレー……………三〇九—三二〇

三 文人説教師としてのキングスレー……………三二〇—三二八

第二十八章 パーンス……………三二〇—三二二

一 緒言……………三二〇—三二二

ニ パーンスの素性……………三二二—三二五

三 彼をして社會主義者たらしめし動因……………三二五—三二七

四 政治運動に従事す……………三二七—三二八

五 倫敦府會議員……………三二八—三三〇

六 英國々會議員……………三三〇—三三三

七 南阿戰爭に對する彼の態度……………三三三—三三九

第二十九章 ハーデー……………三三九—三四三

一 坑夫出身の代議士……………三四三—三四六

二 獨立労働黨の地位を説明す……………三四六—三四八

三 英國政界に於ける新要素としての労働黨聯合……………三四八—三四九

第三十章 ウェブ夫妻……………三四九—三五九

一 シドニー……………三四九—三五七

二 ビアトリス……………三五七—三五九

(一) 猶太人救済者

第三十五章 モンテフィオル……………三三—三五

- 一 家系……………三三—三五
- 二 ロスチャイルド家との関係……………三三—三五
- 三 パレスティナ巡禮……………三三—三五
- 四 猶太人救済の事業に従事す……………三三—三五
- 五 第二回の外行……………三三—三五

(三) 婦人解放論者

第三十六章 フォーセット夫人姉妹……………三六—三九

- 一 十九世紀に於ける婦人解放運動……………三六—三九
- 二 フォーセット未亡人……………三六—三九
- 三 アンダーソン夫人……………三六—三九

其二 労働者救済者

第三十七章 シャフツベリ……………四一—四三

- 一 彼の家……………四一—四三
- 二 工場法改正の事業……………四一—四三

- 三 貧民學校設立の努力……………四一—四三
- 四 彼が其他の貧民救助事業……………四一—四三
- 五 晩年の努力……………四一—四三

第三十八章 ソールト……………四三—四五

- 一 華々しき榮達……………四三—四五
- 二 工場及び労働者住宅設備……………四三—四五
- 三 浴場、倶楽部の設備……………四三—四五
- 四 公園及び日曜學校……………四三—四五

第三十九章 アッペー……………四五—四七

- 一 紡績職工の子……………四五—四七
- 二 ツァイス工場……………四五—四七
- 三 アッペーの人と爲り……………四五—四七

第四十章 アッダムス……………四七—四九

- 一 老孀の幼時……………四七—四九
- 二 貧民救済に志す……………四七—四九
- 三 ハル・ハウス……………四七—四九

其三 赤十字事業創始者

第四十一章 デュナン……………六九—七〇〇

- 一 「ソルフォールの記念」……………六九—七〇
- 二 国際救済事業の創始……………六九—七〇
- 三 赤十字社起る……………六九—七〇
- 四 デュナンの結婚……………六九—七〇

其四 監獄改良運動者

第四十二章 フライ……………七〇—七〇

- 一 前半生……………七〇—七〇
- 二 監獄改良事業……………七〇—七〇

其五 禁酒運動者

第四十三章 ウィリアード……………七〇—七二

- 一 寒村の生活……………七〇—七二
- 二 女教師時代……………七〇—七二
- 三 禁酒運動に従事す……………七〇—七二

其六 救世軍創始者

第四十四章 ブロス……………七二—七三

- 一 世界的偉人……………七二—七三
- 二 青年時代……………七二—七三
- 三 理想の妻……………七二—七三
- 四 彼と教會……………七二—七三
- 五 基督教傳道會……………七二—七三
- 六 救世軍……………七二—七三
- 七 迫害の時代……………七二—七三
- 八 貧民の使徒……………七二—七三
- 九 世界の大軍隊……………七二—七三
- 一〇 極東の出陣……………七二—七三
- 一一 彼の人物……………七二—七三

其七 産業組合創始者

第四十五章 シュルツェデリッチ……………七三—七五

- 一 地方に於ける修業……………七三—七五
- 二 政治生活に入る……………七三—七五
- 三 小民の救済に志す……………七三—七五
- 四 産業組合の發展……………七三—七五

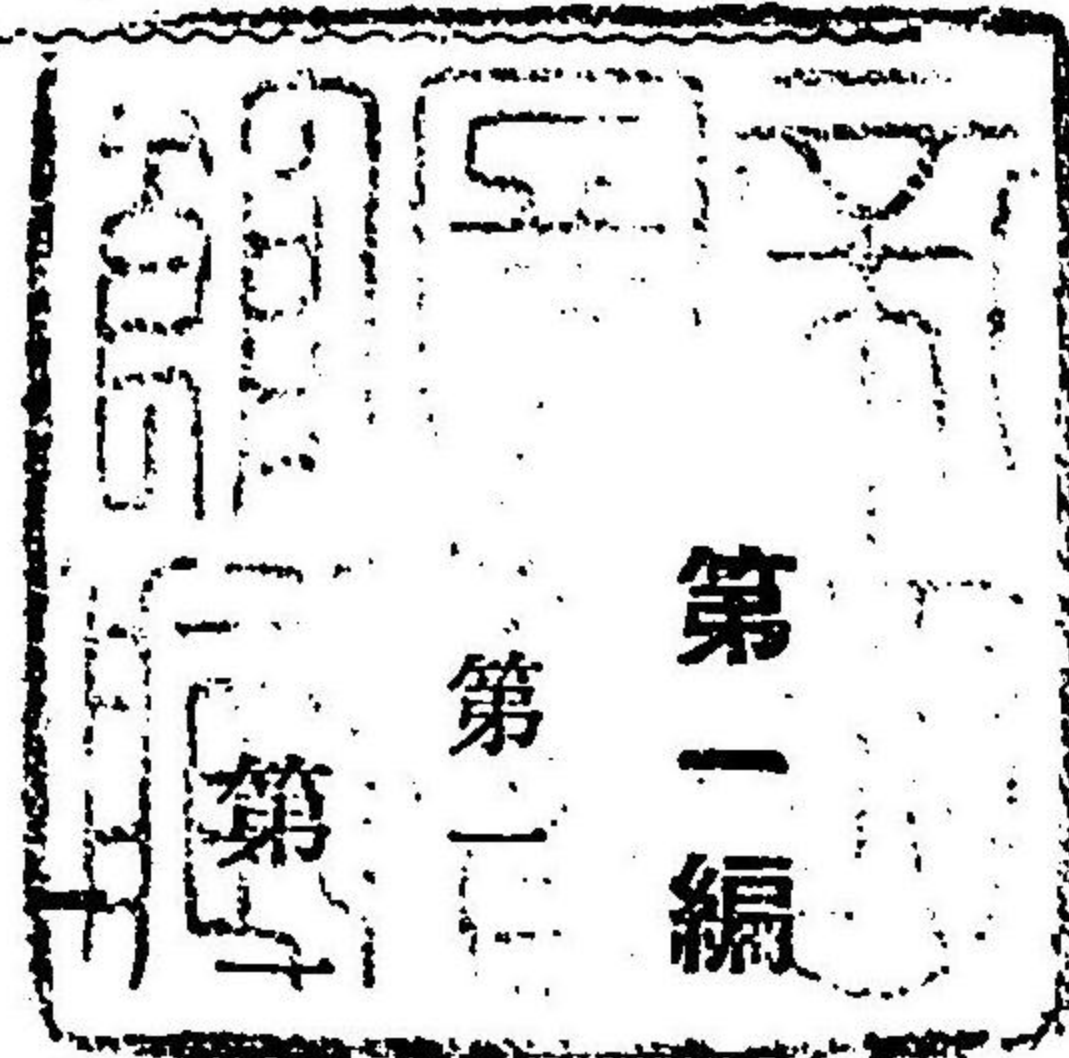
五

ラッサルとシュルツェ

七六七

目次終

近世泰西英傑傳 第五卷



第一編

哲學家

第一

佛國哲學者

第一章

コムト

その幼時

近世泰西英傑傳

(1)

オーギュスト・コムト (Auguste Comte) は佛國に於ける舊制度の破壊運動が促せし社會上の要求の生み出したる大思想家なり。彼は其學問上の修養に於ても將た其心的天資に於ても、一方に於てはド・マイストル (De Maistre) に他の一方に於てはサン・シモンやフーリエーに優るものなれども其思想の一般傾向は亦是等の學士の範圍を逸せずして社會の狀態を改善せんとするにありき。但し研究の方法に

よりて之を見る時はコムトは大に同代の學者と異なる所あり。其説は自然に彼を間接にはモンテスキュー、直接にはチャールギー及びコンドルセー(Condorcet)等の十八世紀思想家と關連せしむ。

イシドール・オーギュスト・マリイ・フランソワ・サヴィエー・コムト (Isidore-Auguste-Marie Francois-Xavier Comte) は一七九八年一月を以て佛國モンペリエー(Montpellier)に生れたり。父は村の收税長たり。コムトは幼にして郷里の小學校に入り、卒業の後、一八一四年には諸藝學校(Ecole Polytechnique)に入れり。彼は幼時性頗る不羈にして、常に好んで上長に反抗しけるが、諸藝學校にて在學二年の後、其一人の師に向つて暴行を加へたる爲めに、コムトは其家に歸らざるを得ざるに至りたりしが、歸り來れば、兩親は甚しく其子の狂暴を怒りければ、彼は意を決して單身巴里に赴き(一八一六年)、其平生得意とせる數學の教授を以て僅に口を糊せり。ベンジャミン・フランクリンは實に當時に於ける彼の崇拜する所なりき。勿論コムトの性格はフランクリンの性格と相去ること甚だ大なれども、萬難に向つて聊も挫折せざるの剛健は、二人者に於て共通の性なり。

コムトは又米國行を企てたりしも、米にありし彼の友は其の不策なるを彼に忠告し、新國に住せんものは純乎實際的の人物ならざるべからず。若しラグランジ(Lagrange)にして米國に移住したりしとする彼は、必ずや一測量師として其生計を企てざるべからざりしならんと云ひければ、コムトは思ひ直して巴里に留まり、一年八百圓以下の質素なる生活に満足し、學校の數學教師となるの希望を有しければ、一友は彼をカシミール・ペリエー(Casimir Périer)の家庭教師として紹介したり。約束の俸給はかなり好き方なりしも、其仕事は餘りに繁多なりければ、コムトは之に平ならずして、僅に三週日にして辭して、又もや放浪生活に歸りぬ。

二 サン・シモンの感化

一八一八年の頃、コムトは彼が後の哲學思想の上に最も重大なる感化を及ぼしたる一人の志士と其友人として將た師として交を結ぶに至りたり。これサン・シモンなり。サン・シモン伯アンリは攝政の友たる有名なるサン・シモン公の從弟にして、種々の計畫を立て多くの書を著出したるを以て知らる。彼今や年六十、一生

の健闘に意氣稍衰へたれども、其驚くべき想像力は猶以て人を動かすに足る。二十歳の少年コムトは、此詩人的老哲學者の説を聞き痛く之に傾倒したり。後年彼はサン・シモンと交りしを以て、甚しく己れに有害なりしを説き、頻りに昔の記憶を抹消せんと努むれども、二人の間に交際の圓滿に繼續せし間に在りてはコムトのシモンを見ること甚だ重く、哲學者の最も大なるものなりとせられたりき。當時彼が其友に寄せし述懐に曰く、余は確かにサン・シモンの個人的勢力に負ふものなり。彼は余が今進みつゝある哲學の方向に余を導きたるものなりと。勿論嚴格なる意氣にては、コムトは決してサン・シモンの門下にあらず。然れども、コムト自らの語を借りて之を云へば、彼が強き思索の力は後に所謂コムトの系統の骨髓となりたりし二大因子を供給したるは疑なくサン・シモン其人たるなり。二大因子の一は政治上の現象は他の現象と同様に理法を以て之を結束するを得べきもなりと云ふことにして、今一は哲學の眞使命は社會的ならざるべからず、思想家の眞目的は道德上宗教上及び政治上の組織の編改に存せざるべからずと云ふこと是なり。コムトの如き天才の事なれば縦令サン・シモンの此世にあら

ざりしとも、智力の上に於て一世に大業を演じ得べかりしは明かなれども、彼の實際になし遂げたりし大業のさきにサン・シモンが語りし所なりしも亦疑ふべからず。

六年の交遊の後、二人の間の乖離は漸く顯然たるに至れり。コムトはシモンが己れを以て萬事弟子視するを片腹痛く思ひ、シモンは又其門人の却つて己れに優るを見て之を嫉みしが、一八二四年、サン・シモンが己れの持論たる社會改良案と關係あるものゝ如くにして、コムトが作を印刷に付せんとするに及びて交際は終に斷絶したり。

三 結婚

一八二五年、コムトは結婚したり。此結婚はコムトに取りては餘り慶すべきものにあらざりき。元來コムトの一家は眞面目なる加特力信者にして、勤王家なりければ、コムトが結婚を嚴肅なる宗教的儀式に於てせるを敢てせざりし爲めに不平なりしに、新夫婦のモンペリエーに歸るや新婦はコムトが一家の家風を見て

甚だ之に満足せず、紛紜は已に此時に萌じたり。結婚の年コムトは既に不快を其友人に洩らして曰く、余は余の智力的事業に余の全力を傾注するの外なきに至れり。余は是に依りて余が幸福の最も樂しき部分を投棄せざるべからずと。コムトは斯かる家庭の不幸の傍に尙貧の難澁を味へり。彼は己れの宅に書生を寄宿せしめんと欲せしに、來りて投せるは唯一人なりければ、其業を持続すると能はざりき。彼は述懐して云へり、余は門生を求めて愚なる富豪を訪ひ廻らんよりも、寧ろ難問題の解決に苦心するとを好むと。彼は雜誌、プロデグテール (Le Producteur) に折々哲學上の考察を投書して、幾分の原稿料を得、又一八二六年には收入と名譽とを並び兩得するの犬々の希望を以て講演を始めたり。これ彼が實驗哲學を叙述せしものにして、其講筵に侍せしものの中には、地理學者のフムボルトや、地質學者のポアンソイ (Poisson) や、生理學者のブラインヴィーユ (Brainville) 等もありき。然るに不幸にして、其第三回の講義の後に、コムトは餘りに勉強し思考したる結果、激症の腦病に罹り、一年以上も恢復するに至らず、講義も其儘に放棄せらるるに至り、志望全く蹉跎したれば、病癒えて後も、彼は身世の憾軻に此度は憂鬱症

となりて、セーヌ河に投じ、自殺を謀るに至りき。幸にも救はれて溺死を免れたれども、精神の錯亂は之が爲に容易に靜まらずして、コムトは暫く狂人同様なりき。

四 公職に就く

一八二八年に至りて、コムトは又もや曩の講演を始め、一八三〇年には其、實驗哲學 (Cours de Philosophie Positive) の第一卷を公にせり。此大著の綱要及び計畫は已に一八二六年を以て發表せられたりしも、其愈々未卷を刊行して之を完成せしは、漸く一八四二年に在り。十二年の努力によりて彼が物質的に得たる所は幾何もなきなり。一八三三年、彼は巴里なる諸藝學校への入學志願者を檢定する爲めの試験委員に任せられ、外に二校に數學の教師となりて一年に總計四千圓の收入を得ることゝなれり。彼、此時ルイ・フィリップ王の大臣ギゾーに建言するに、科學一般史の新講座を大學に設くるの案を以てし、四講座あつて何れも哲學史を講じ、哲學に關する巨細は沿革的に爰に取扱はるゝとせば、吾人の眞の智識の進歩を明かにすべき科學史の一講座なきは完璧と云ふべきにあらずと説き、ギゾーも初め

は其道理ある建言に耳を傾けたりしも、既にして故障ありて之を容るゝに至らざりき。

コムトは眞面目に其公職に勵精せり。其間に七月の革命ありて、新王國建立せられたるが、彼は素と共和主義を奉ずるものにてありしかども、別段に新政府に反抗することなかりき。彼が當時に於ける慰めは、オペラを見物することにてありき。彼は元來其若き時に觀劇道樂の者なりしが、既にして悲劇に飽き、又喜劇にも飽きて、オペラは今は其眞の愛好物となれり。コムトの學生たりし某は此時代のコムトの風采をば左の如くに描けり。曰く、ルクセンブルの時計が八時を告ぐるや、毎朝時を違へず、我等の室の戸は開きて背低しと雖、強壯なる鬚髯も頬髯も皆能く剃られたる一人の男入り來れり。彼は常に恰も晚餐會などに行かんとするものゝ如くに、汚なき黒の裝束をなし、其襟飾なども美しく帽子も光りたり。彼は彼の爲めに設けられし腕椅子の所に進みより帽子を卓子の左方の隅に置けり。同じ場所に鼻煙盒あり、紙の一帖あり、彼は此に於てやをらペンを墨汁の中に投ずること二度、之を鼻端一吋の近くまで齧らして、果して墨汁の十分なるやを

認めたる後、靜寂を破りて講義を始めたり。彼は四十五分の間、其數字の式を記し、時々之に短き説明を加へ、九時まで證明正誤等をなせり。斯くて時到れば、左手の小指にて煙草の外衣やチヨッキの上に落ち散りたるを彈き落して、鼻煙盒をば衣囊に藏め、帽子を取り前に室内に入りし時の如くに辭に去れり云々。

五 實驗哲學の完成

一八四二年、コムトが大著「實驗哲學」の最後の卷が世に公にせられたり。彼は十二年の刻苦を以て今や其結果たる報酬を樂まんとす。然るに何事ぞ、飽くまで薄運なる彼には此時に當りて却つて色々の不幸蟬集し、第一に彼と夫人との關係次第に疎遠になりて二人は終に一八四二年を以て相離別することゝなれり。但しコムトは毎年の手當を妻に贈り二人の間には離別の後と雖、文書の交換ありき。第二には、コムトは其書の出版者と法廷に相争ふことゝなれり、これコムトが其著書の脚註に於てアラゴ(Arago)を攻撃したるに對して出版者が恣に第六卷に之を非とするの文を掲げたりしに原因せるものにして、濫に人に屈するを好

まざるのコムトは大に之を怒りて非常の勇氣を以て、嘗つてヴアルテールが法廷に曲直を争ひたりし如くに之を訴へ出で、終に勝利を得たり。第三に、彼の一身に取って最も不都合なりしは、彼が認めし第六卷の序文にあり。彼は此序文の中に載せし記事の爲めに、彼をば諸藝學校の入學試験委員に推選し得べき歴々の人を激昂せしめ、其爲め次回の期には試験委員の選に洩るゝに至りたり。これ元來収入の少き彼に取りて非常の大打撃なりき。彼は忽ちにして収入の半を失へり。

著述に際してのコムトの態度は天才的一氣呵成的なりき。彼は其筆にせんと欲せしことをば全部豫め胸中に構成したる上ならでは決して一字一句をも書き下さざりき。臆て胸裏の作文成れば、彼は卓によりて一擱千里の勢を以て之を認め、殆ど何等の勞力をも須ひざるものゝ如かりき。其間一のノートを有するにあらず、一の備忘録を手にするにあらず、將た一瞬と雖筆を擱くことなかりき。例へば、實驗哲學第五卷五十五章は之を大英百科全書の頁に組み立てたらんには優に其四十を埋むべき長文なるにコムトは僅々六週日にして之を書き終りたり。

記事が單に記載的説話的のものに止まりしとするも、これ實に尋常の速度と云ふべきにあらず。況や此一章は決して説話的のものにあらずして、數世紀の長き時代の運動の主たる動力を抽象的に記述せるものにして、又其間を縦横貫縫する思想の頗る複雑なるものあるに於てをや。而も亦況や之を行ふ文の驚くべく巧妙なるものあるに於てをや。彼は之をヒームやアドローやパークレーやの哲理的文章に之を比したらんには、少しく重くるしく單調に、光彩を缺く。所々に力ある句を見ざるにはあらず。然れども全體としては彼の用ふる語句は沒趣味なり。然れども之を讀みて讀者の受くる印象感動の大なる所以は全く其文體の作用に由るにあらずして、其所説の卓抜にして重要なる其明々瞭々たるにあるなり。彼の力は全く其思想による。

六 ミルとの交際及びコムトの生計問題

コムトが英のジョン・ステュアート・ミルと其交誼を結びしは一八四二年より前にあり。ミルはコムトが哲學思想によりて大に動かされ自ら白狀してその論理學體

系の中の多くの重要な思想がコムトの賜なること、殊に同書中道德學の論理を論ずる節の如きは全く、實驗哲學に負ふものなることを云へり。二人の間に往復せし書簡の中の主なる論題は男女の同等に關すること、僧侶階級の組織及び其實用に關すること等にあり、コムトはミルを親友として随分と打ちあけて之に譲りしこともあり、ミルは俠氣を有する人なりければ、方を傾けて之が爲めに盡瘁したり、彼はコムトの生計の困難なるを聞きてはグロートやモーレスワース(Molesworth)やレーグスカーリー(Raikes Currie)等の友人を説きて二千四百圓を贈金して之に贈りしが、一八四五年の暮、コムトは例に依りて収入なくして困みければ、ミルは又もや贈金のことを前記諸友に諮りしに、真中グロートが少許の出資をなしたるのみにて、他の人々はコムトにして財を得んと欲せば、自ら何等かの勞に服する所なかるべからずとて此度は義捐を拒絶し、ミルも亦論文を英國の雜誌に投書せばミル自ら之が英譯に任じ、其原稿料を彼に送るべしとコムトに要求し、コムトは一旦は之に應せん心算なりしかど、是に就いて彼のミルに送りし手紙の中にて端なくも大にミルの感情を害し、是より二人の交も此に杜

絶するの有様となりぬ。

英國の志士との絶交の結果、コムトの生活は一層に難澁となれり。一八四五年より一八四八年に涉りて、コムトは一方には其妻に送金しながら能ふ限り節儉して、一年漸く二千圓の收入にて其生計を立てたり。當時の彼の克己は實に非常なるものありき。彼が吾人に傳へられたる其日誌には其死の數時間前までの收支凡ての費用が掲げられあるが、之を見れば以て當時を追想するに餘あるなり。一八四八年、コムトは何等の失敗をなせしにはあらざりしかど、突然其俸給を八百圓に減せられたれば、リットレ(Littre)其他の同志はコムトの同意を経て彼の爲めに義捐金を募り、斯くして得たる資に依りて彼は辛くも此後九箇年の彼の生計費に充つるを得たり。一八五二年には義捐金は一年二千圓の額に達したり。注意すべきは此際の義捐者の中にはコムトと絶交したるミルや、コムトの理由なき逆鱗に觸れて其仲間より放逐せられたるリットレの名のありしことなりき。一方が斯くの如くにコムトに對して好意友情を冥々の裡に有したるに、一方のコムトは此點に於て聊も寛恕の大量を有することなかりしは吾人の返す、いも痛

恨に堪へざる所なり。コムトの性格たる其確心、其猛強、其不屈の意志、其一度人類の爲めにと思ひ詰めたる事物に執着する恐るべき情の、頗る吾人をして嘆美せしむるものあるにも拘らず、優に柔しき心根に於ては全然缺焉せり。

七 彼の晩年

コムトは晩年、新聞雜誌其他の定期不定期の刊行物をは一切排除し、時々ダンテ外二三の詩書と、イミタテ、オクリステイ (Imitatio Christi) を繕く外には無用の讀書に時日を浪費することなく、全力を著書に傾注したり。此際の出來事にて記すべきもの一つあり。それは彼が一八四五年前、クロティルド・ド・ヴァー (Clotilde de Vaux) 夫人なるものと懇親を結びしことなり。夫人の夫は終身懲役に處せられたれば、夫人は事實上の寡婦なりき。夫人の如何なる人物なりしやは知られざれども彼の書き物はコムトの推稱して措かざる所にてありき。二人の交際は唯一年の間續きしのみにて、夫人は一八四六年に死したり。されど其時日の甚だ短少なりしにも拘らず、夫人のコムトに及ぼしたる一種の感化の大なりしこと猶コンディヤック (Condillac) やジョーゼット (Joubert) やミルの各女性より受けし感化の次なりしに似たり。コムトは夫人に別れて身世の寂寥を感じたること、かのダラムベール (D'Alembert) がレピナス (L'Espirasse) の嬢の長逝に遭逢して鬱悵に沈みたりしが如し。彼は是に於て毎水曜日の午後必ず夫人の墓に詣で、亡き人を追憶し、毎日三度必ず夫人を記憶より喚起して遣る瀬なき痛恨を僅に慰めたり。

コムトは其實驗哲學を完成するや直ちに之を基礎として更に "Système de Politique Positive" の著述に着手し、一八五一年に其初巻を、一八五四年を以て其末巻を刊行せり。一八四八年、佛國に革命の動亂のありしや、彼は一七八九年の著にジャコビンクラブが革命の中心となりたりし如くに、之を以て此度の革命に於て有力なる動作を演ずるものたらしめん目的を以て、實驗學會 (Positive Society) なるものを創立したるが、この當の目的は遂げられざりしかと、哲學生の若干のものは、彼を圍繞して茲に集まり來りて、コムトが後平生の新思想の下に宛然一の教會を組織するに至れり。一八四九年、一八五〇年及び一八五一年、コムトはパレ・ロワイヤール (Palais Royal) に於て三回の講演を試み、此度の講義は頗る評判好かりき。

一八五二年、コムトは“Catechisme Positiviste”を著し、其序言に於て十二月二日のルイ・ナポレオンがクーデターを承認して曰く、これ實に仕合せよき危機なり。議院制度は倒れて號令者的共和政之に代れり」と。此斷定の當を得たるものなりしや否やは姑らく之を措き、兎に角コムトは當時にありては共和政府の一變して帝政となるに至るべきを想像せず、十二月の巨人なるナポレオンが出版及び集會の自由を許すに至るべきを誤信しつゝありしものなりき。これ恰も彼が此後に至りて更に露帝ニコラスを以て基督教國の代表的英雄なりと推揚せしと同一轍の迷妄のみ。彼が實際政治に對する識見の河に惘然たるものありしを見るに足るべきなり。

一八五七年、コムトは瘧を病みて同年の九月五日を以て死せり。時に齡未だ耳順を越えざりき。彼が英佛各國に於ける追従者は此後師の爲めに時々紀念會を催して故人の事業を追慕せり。

八 彼の哲學

コムトの第一著(實驗哲學)と第二著(ポリテイク)との間にはミルの指摘したるが如くに廣き溝隙の存するにも拘らず、吾人は之を綜合して一の全體と見做すを得べし。彼が尙二十一歳の少年代の手紙によりて見るも二つのものは決して分別されざりき。一八二二年、彼は「社會改革に必要な科學的事業案」(Plan of the Scientific Works Necessary to Reorganize Society)を著述して、近代の社會は一方には舊制度舊信仰を破る破壊的運動の行はるゝあり、又他方には人類をしてその完全なる發展を遂げしめん爲めの社會を形成せんとする運動あり。是等二個の相反對せる運動の衝突の爲めに、大危機に臨みつゝあり、之に處するの道如何、社會をして此混沌の中より脱却して首尾能く之を有機的の國家に開展するに至らしむべき手段方法は如何と問ひ、之に對する解答として二つの事業を指示せり。一は理論的なり。社會的關係を進むべき新原理を發展し、社會を動かすなる一般觀念の形成を目的とするの事業にして、一は實際的なり。前記の理論に能く適合すべき制度を定むるの事業なり。實際は理論の結果として胚胎するものなれば、實行の順序としては後者が第一に取扱はるべきものたるは勿論なり。然るに一八二六年

に於ては彼が「靈力觀」(Considerations on the Spiritual Power)なる作をもつて尙此論を追窮し以て俗的勢力と異れる而して之と關係なき一の靈力を立するの必要なるを唱道したり。而して此所謂靈力なるもの、何物たるかに關しては彼は其「實驗哲學」の第五卷に於て加特力社會の之に外ならざるを示し、加特力教會をば新なる智的基礎の上に築き直して之をして終に近代社會の靈的組織の首腦たるに至らしむべしと論せり。

コムトの「實驗哲學」は其劈頭第一に彼の發明せる法則を掲出せり。これ三状態の法則なるものにして、彼の派の人々が金科玉條として奉ずる所なり。吾人の考、吾人の智識は必ずや三つの異なる状態を経由す。言を換へて之を云はゞ、吾人の宇宙の森羅萬象に對するや、之を説明するに必ずや三様の方法の存するを見る。此三階段とは神學的形而上學的、及び實驗的なり。現象が何等か超自然の實在の意志と直接の關係を有するものなりと解釋するは、これ其智識が猶神學的状态の下にあるを示せり。神意に代ふるに對象其物の中にある。而も之と離れて存在すとせらるゝなる抽象的の力を以てしたる場合には形而上學的なり。然るに實驗

的の狀態にありては是等内在外在の意志も抽象の力も皆人心より消失して凡ての現象は必ずや他の現象に關連して説明せられんとす。

「實驗哲學」の第一の而も最大の目的は社會の研究を以上三状態の第三の時代に進むるにあり。社會現象をば神學哲學の思想より脱離して、其中に物理學、化學、生理學と同様の諸法則を輸入するにあり。社會物理學は社會の事實の狀態及び其關係を其對象とす。是に二部あり、一は靜的にして秩序の法則を究め、一は動的にして進歩の法則を究む。人心が科學思想の時代には、政治上の出來事も皆神意に依りて解釋せられ、政權は神權を其基礎となす。人心が哲學思想の時代にある時は政治上の權力は人民全權を其基礎とすべく、又實驗時代にある時には社會的事實は一々其關係を明かにせられ、社會存在の條件が推究せらるべし。此時代に達したらんには、吾人の智識の全體は實驗性を帶ぶるに至るべく、此種の變化に因りて吾人の享受すべき知得は巨大なるべし。

「實驗哲學」は社會科學の必須を證明することの外に、尙他の目的をも有せり。此目的とは凡ての科學をば一大根幹の派生として説明することにある。これ科學に

從來哲學の專有するもの、如くに思はれし一般性を付し、哲學には又科學に特性たる嚴肅精確を付するものなり。コムトが特に其目的とする所は社會物理の研究にあり。第二には從來の實驗科學の研究法の研究にあり。此に於てかコムトは科學的研究法及び實驗的智識の順序を定むる事に取掛れり。彼の哲學體系の第二の重要素たる科學の分類は是に於てかあり。

彼は智識に思索的と實際的との二つを分ち、思索的即ち理論的智識をば更に抽象的及び具體的とにせり。抽象的の方は凡ての考へらるべき場合にて現象を規する所以の理法を取扱ひ、具體的の方は是等の理法の適用方を取扱ふ。即ち前者は一般的にて、後者は特殊のなり、記載的なり。是に由りて之を觀れば、生理學は抽象的科學なるも、動物學は具體的科學なり。化學は抽象的なるも、鑛物學は具體的なり。實驗哲學が一大系統として編制せんと試みしは、實に抽象的科學の研究法及び智識にありき。

コムトの科學系統は粗より細に一般より特殊に進む。左の如し、一、數學、二、星學、三、物理學、四、化學、五、生物學、六、社會學。是等の各々は其前のものよりは一つづゝ特殊

に進み、凡ての前のものに智識を藉らざるを得ず。従つて前の諸科學の智識なくしては十分に之を理解するを得ず。

「實驗哲學」の初三卷は、社會學以前の五科學に就いて論ず。此方面に於ては、専門の各科學者は記事の粗漏なるを尤むれど、専門家ならぬコムトに精緻を求むるは酷なり。彼の學の偉大なるは社會の新科學の構成に關する最後の三卷及びボリテグの三卷に於て之を見るべし。是等の五卷は縱令新科學をば正しく立するに至らざりしとすとも、彼等が從來何人も手を染めたることなき大問題を第一に解決せんと努めたるは蔽ふべからざるの事實なり。吾人は以下少しく彼が社會學に對する意見を探らんと欲す。彼は勿論第一に人間及び社會の現象をば宇宙の他の現象同様に一般理法を是より抽出し得べき底のものとして取扱ひ、社會及び歴史の集合的事實をば生物學の個々の現象より隔離し、次に是等の集合的事實を尙も外在の意志より引き離し、之を理法の支配の下に歸したり。歴史的事實は攝理なるものゝ干涉を以て之を説明すべきにあらざりして、社會的存在の各時代に潜在せる色々の事情境遇によりて之を明かにせざるべからざるものな

りとは、彼の考なり。此思想より出發したらんには、社會の科學は當然成立し得ざるべからず。

コムトは理性を以て社會進歩の最重の素因なりとせり。彼は知力發展の歴史を以て社會の進運を解くの管鍵なりとし、又進んで此知力の發展を解明するの管鍵が三状態の法則なりとす。彼の歴史觀の中には尙下の如きものあり。曰く、實驗思想の神學思想に代るや、軍事制度よりして自然に産業制度が發展し來るものなり。人種の進歩によりて人的分子が獸的分子を超越するに至るべし。社會觀の絶對的傾向は熄みて、比較的傾向が勢力を占むるに至るべし。斯くして社會的國家は全體として之を觀れば次第に完全なるものとなるべしと。人類中同化したるもの、文明史に關連して此思想を擴進せるものは、コムトが「實驗哲學」中の二冊なり。而して其觀察は博と深とを以て學者の今尙猶揚するに吝ならざる所なり。思ふに尙後コムトの此思想を訂正するものあるべく、亦之に附加するものあるべしと雖、彼が社會の進化をば人智の大なる産物として分解したる此説は、永く眞理として認承せられん。見よ、彼が第一著の需要は驚くべく増加せにあらざるや。

一八四二年に完成せられたる此書の第二版は、一八六四年を以て印行され、數年にして第三版を發賣するの盛況に達し、一八七六年には更に第四版が刊行せられたり。十二年の間に理窟つばき抽象的の哲學書の六冊物が三版を重ねるに至りたりと云ふは寧ろ異例の沙汰と云ふべし。之を要するにコムトの書の中にて最も成功したるは、彼が歴史進歩に關する見にあるは疑ふべくもあらざるなり。コムトは第二著ポリテイクの第三卷に於ても社會動學に就いて敘し、歴史進化の事を記しつつあるも、其敘述は到底第一著の精到なるには及ばざるなり。

コムトの思想中にて大に傳へざるべからざるもの尙多々あり。彼は大革命前の理想論者例へばアベサン・ピエール(Abbe Saint Pierre)の如き將た大革命後の凡ての理想家の説を熟知し、其長短を明かにし得たれば、社會機關の改良てふものは單に其政治機關を變じたるのみにても、亦富の分配に就いて人工的に強制する所ありたりとて、決して之を庶幾し得べきに非ずして、一に道德の進歩に依るの外なきものなりて、根本的事實を承知し居りき。何よりも道德を進めざるべからず。此目的の爲めには、公私の生活に於て社會的感情をして利己愛己に打勝

つに至らしめざるべからず。社會改良の大本は之を措きて他に求むべからず。如何にして博愛主義をして利己主義を制せしむべきか。曰く、此場合に機關となるべきものは感情なり。加特力教にて感情をして第一の地位を保つに至らしめしは好しと雖、知力は此際全く感情の奴隸となり終れり、これ反動の起りて知力が終に感情に向つて反旗を翻すに至りし所以なり。コムトの理想に依れば知力は感情の奴隸たるべきにあらずして、好意を以て之に仕ふるものならざるべからず。而も斯かる服従の關係を作らんが爲めには、宗教の力の之を扶くるなかるべからず。宗教の基礎は吾人の裏に一の力の存在するにあり。實理の時代に在りては人道なるものこそ、これ所謂宗教の基礎なれ。さればコムトの説は功利主義なり。以爲らく社會改良の爲めには政治を道德に服従せしめ、資本を道德化し、家族を改新し、結婚の概念を高むる等の道に依らざるべからず。而して此等の目的を達すること同情の本能を進むるに依るより外はあらず。而して又同情の本能は人道の宗教によりてのみ進めらるべきなりと。コムトはよりて此人道教の爲めに色々の儀式を作りたり。彼に依れば、人道教の僧侶連は富をも權力をも有す

べからず。彼等は命令すべからずして勸言すべきのみ。宗教が實理的となり、社會が産業的とならば、教會の國家に對する勢力は實際に於て自由獨立となるべし。これ中古の事實と全異る所なり。僧侶は其人及び自然に就いて特殊の智識を有するに於て權力あり、然れども彼等は斯くの如き智力の秀卓を以て甘んずるを得ずして、尙之に道德の力、品性の偉大を以てせざるべからず。斯かる徳の存するなかりせば、僧侶と到底民衆の上に信用を得ること能はざるなり。

第二 英國哲學者

第二章 ミル

一 英國の思想界 ミルの幼少時代(一八〇六—二〇年)

唯物論と唯心論との消長たる已に久しく十九世紀に入りても未だ孰れに依るべきか定まる所なく、或者は前者を奉じ、他は後者を主張せり。然れども十九世紀の大勢は次第に自然科学的、唯物論的、客觀的となり、経験てふ事を箴言として奉ずるに至れり。此思想を明かに代表せしものは佛人コムト(Comte)なり。然るに之と共に獨逸思想の大潮流をなせる唯心論はヘーゲルに至りて其極に達したりしが、幽遠を期し深遠を計りたる結果、其思想は遂に實人生と没交渉なりとの難を蒙るに至り、流石に盛なりし唯心論的思想も一時其勢を挫くに至れり。茲に於てか或者はガントを奉じ、或者はフヒテを奉じて、一度衰へたる唯心論的思想を何等かの形にて挽回せんとし、新カント派、新ヘーゲル派等を生ずるに至れり。さ

れば大陸大體の潮流は猶唯心論的なりしと云ふ事を得べし。

英國の思潮は恰も獨佛の思潮を合せたるものと見るべし。已にヘーコン、ロック、ヒューム以來經驗論的思想を存したる英國に、コムトの實證論(Positivism)の歡迎せられたるは當然にして、ベンザム、ジームスミル等の代表者を出せり。然れども經驗を重んずるの弊は往々にして淺薄皮相に陥るにあり。此弊を補はんが爲めに獨逸の唯心論はカーライル等に依りて信奉せられ、亦少々ならざる勢力を振ひぬ。茲に於てか殆ど相反する潮流は英國思想の海原に相戦ひ、遂に孰れに依るべきか定め難きに至れり。時勢は今や偉人の出現し、此二潮流を調和して、大潮流たらしめ、以て時人の進路を明かにせん事を要求するに至れり。此要求に應じて立ちたる者こそジョン・ステュアート・ミルなれ。既に二流の調和統一を任命として立つ、一を捨て他に依るべきにあらず。さればミルは經驗論の根柢に立脚して唯心論を吸収せんことを力めたり。吾人をして暫く彼の自叙傳に依り其思想經歷の大要を述べしめよ。

ミルは一八〇六年五月二十日倫敦に生る。父ジームスはミルを教育するに苦心

し、ミルも亦天資好學の念深く、父子の心事は自ら合して茲に一大碩學を出すの縁とはなりぬ。襁褓時代の事は知るに由なけれども、彼の教育は三歳にして始まりたる如し。初め希臘語を學び、八歳にして羅典語を修めたりしが、其効果は十二歳にして已に其妹に羅典語を教へ得たるを見ても推す事を得ん。而して彼の讀む所極めて宏博、他日多方面に興味を感じたりし因は已に此時に存したるを見る。就中彼の最も好みたりしは歴史及び詩歌なりき。詩歌は詩歌其物に興味を感じたるにあらずして、唯詩歌に於て最も能く道德的情念の昂揚するを覺えたるが故なり。詩歌は人格を偉大ならしむる藝術にして哲學の勇士なり。されば詩歌は唯吾人の人格構成の手段に外ならずと考へたるものゝ如し、之と共に彼は又深く數學をも修められたるも、彼の如く歸納を重んじたる人にして、果して數學の如き演譯的科學に力を注ぎたるや否やは、後人の間に疑の存する所なり。要するに十二歳までの彼の教育は唯宏博なりしを記せば足りなん。

然れどもミルは未だ自ら思考する事なく、唯先人の思想を再考するに止まりき。彼の大成せし歸納論理にアリストテレス、中世期の學者、ホッブス等の論理說の影

響の大なるは之が爲めなり。然れども當時彼は論理學に多大の興味を感じたりしが、それは錯雜難解なる辭句名題も首尾貫徹明かに其意を通せしむるの快は獨り論理に依りて得べければなり。されば彼は論理學者としてのプラトーンと、獨斷家としてのプラトーンとを分ち、前者を上天の高きに比したるに反し、後者を捨て、顧みざりしにはあらざるか。然れども徒に論理を弄するの結果は往々にして詭辯に陥り、好事に終る事あり。彼の功利說が「綜合の謬論」(Fallacy of Synthesis)に陥れりとの難を蒙るは又故ありと云はざるべからず。

十三歳にして散策の度毎に父より國家行政に關する知識を授けられ、諸學者の說を涉獵せり。一八二〇年、十四才にして佛國に渡ると共に、父よりの直接教育は終を告げられたるも、當時已に彼は博學稀世の神童として衆目を引けり。此の如く彼の早成せしは父ジェームスの嚴格なる薫陶に俟つ事の多大なるは言を俟たざる所にして、自ら父が然かく幼少なりし彼を能く教育し得たるを驚嘆せり。然れども其教育は知育に偏し、嚴格に失し、情意を顧みざりし爲めに一大缺點を伴ふを免れざりき。多讀して知識の修得に力めたりと雖、其智識を實用するの道を教

へざりしを如何にせん。其結果徒に智識を貪り全く隠士となるの弊に陥れり。即ち可能(能)の教育にあらずして知(知)の教育なりき。加ふるに其教授法を全く抽象的にして自己の経験に訴ふる事なかりき。然るに彼一度故國を去りて佛國に在るや、其教育の不備面を大に補ふを得たり。汝の情を現はす勿れとの箴言の下に感情を輕視せし英人に反して、南方佛人の性向は全く其反對を示し、厚き愛情、朗なる心情、輕信を其特色として北方の國民性に相對せり。父の嚴格は吾等父子の愛情を生せしめし事なく、寧ろ之を減却せりと嘆じたるミルも、佛國に於て大に情意方面の缺を補ふを得たり。父ジエームスもミルを愛して、幸福ならしめんが爲めに教育したるものにして、其知育に於ては缺くる所なかりき。然るに不幸にもジエームスはミルの子供なる事を解せざりしのみ、余は未だ子供たりし事あらず。何となれば一度もクリケットをなして遊びたる事なしとの概は當時のミルの面影を察すべく、自然をして其本來の道を進ましめよとは父の教育法の不備に對する最も大膽なる批評と云ふべし。此くの如きは十四歳に至るまでのミルの教育の主要なり。

二 自己修養期(一八二一年—二五年)

一八二一年、ミル佛國より歸りてより彼の自己修養の第一歩は始まりぬ。父よりの直接教育は已に其前年に於て終りたれども、尙間接に諸方面に薰陶を受けたり。一八二一年、二二年の兩年に於て多くの哲學者、倫理學者、法律學者等の著述を涉獵したれども、父の忠言に従ひ、ベンザムの學説を研究せしに比すれば是等幾多の研究も亦物の數ならざりき。ベンザム著、デーモントの民法、刑法論はミルの生涯に一時期を劃し、彼の精神生活に一轉化を與へたり。嘗ては自然法、道德感情、自然的平等等は規範として權威を有したりしが、今やベンザムの最大多數の最大幸福なる原理は是等に代りぬ。實にや此原理こそ彼の行爲の規範となり、行く方を照す光明となりたるものにして、彼の所謂功利(Utilitarian)なる原理と酷似せるものなれ。

ベンザムに依れば、徳其もの爲めに徳を行ひ、自己の快樂を犠牲に供するが如きは寧ろ不徳の甚しきものにして、道德には伴ふに苦痛を以てする事多し等と

考ふるは大なる誤見なり。苦痛最も少なく快樂最も多き事こそ眞に價值あるなれ。されば自己の快樂を犠牲にする事なければ少なき程其幸福は大なり。これ自然が吾人に教へたる眞の經濟なり。されば吾人は自然の要求として自己の快苦に最も留意せざるべからず。何となれば快苦は臚て自己の生命の一部なればなり。吾人にして若し此利己的原理に忠順ならざらんか、それは臚て吾生命の破滅なり。然るに往々にして徳の爲めの徳義務の爲めの義務と呼ばる者あり。縱令其説を眞なりとすとも其説に従ふ者は一人もある事なかるべし。何となれば人として先づ自己の利害得失を考慮せざる者なければなり。此利己的原理は萬人共通遍通にして之れ臚て功利主義の根柢をなせるものなりと。然らば問はん。然かく利己的なる人間が如何にして必然的に他人の利害得失を顧慮するに至れるや、何故に顧慮せざるべからざるや。最大多數の最大幸福の原理は如何にして出で來りたるや。ベンザム思へらく、それは人間の本來具有する社會性に由るものにして、此事實は殆ど問題とするに足らざるほど明なる事に屬すと。然らば最大多數の最大幸福を來す行爲を善なりとせば、それは行爲の結果如何によりて其行

爲の善惡を定むるものに外ならず。然れども吾人が行爲するに當りて其結果を豫定するものなくんば如何なる行爲を選ぶ可きや。ベンザムに依ればそれは唯個人の自ら經驗する自然道德、國家宗教の四制裁によりて行爲を決定するの外なし。されば決意の根據は一部個人以外に存する社會的制裁により、一部人間本具の社會性によるものにして、これ如何なる利己主義者の行爲にも社會的色彩の存する所以なりと。

以上はベンザムの倫理説の大要にして當時ミルの繼承せし所なり。さればミルも人間行爲の標準をベンザムに従つて社會的評價に求めたり。ミルが吾ベンザムの著民法刑法論を讀み終りて全く人を異にせるやの感あり。ベンザムの功利なる原理はわが從來の斷片的信仰錯雜せる智識を統一する基石となれり。今や吾は定見、哲學、宗教を有すと云ひて可なり。これ余が宗教の宣傳布教は臚てわが生涯の能事にして、依りて以て社會の現状を改善せんことを望むや切なりと云へるは、如何にベンザムの影響の大なりしかを察するに足らん。而して當時ミルは齡漸く十六の一少年のみ。然も見よ。此時已に彼はベンザムの最大多數の最

大幸福なる原理の上に立脚して、以て社會の改善に努力すること彼が生を享けたる所以にして、生涯を通じての唯一の天職なれと自信せし事の如何に強かりしかを。唯ベンザムは此原理を法政面に主として適用したるに反し、ミルは更に廣くに精神的・道徳的領域にまで及ぼしぬ。

更に又彼はベンザムの宗教論に動かされたる事も尠からず。ベンザムに依れば宗教の要は唯、古代の懷疑時代に在りての社會的・道徳的・目的の爲めに存するのみなりと。然れども其説たるや全く消極的にして唯社會的制裁を與ふるの外それ自らの生命なきものとなれり。され共ベンザムも宗教的制裁には束縛・狂信・幻妄等の弊害の伴ふものなれば、宜しく此點に注意せざるべからずと論述せり。ミルの宗教論も亦之を宣傳したるものなり。

ミルはベンザムの根本原理を明かにせんが爲めに一八二二年—二三年の冬季に「功利主義協會」を組織し、倫理、法律、政治等の問題を明かにせん事を務めたり。此協會員は當時の最も識見ある學者、及び有爲の青年より成り、後年諸方面改革の事業は多く此會員の手に成れり。而して其精神とせし所はベンザムの學說にし

て其主張する所稍急激なりしかば此團體を呼ぶに急進哲學の名を以てせり。ミルは其團體の代表者として敏腕を振ひ滔々たる辯舌を以て時人を風靡せり。然れども惜むらくは其雄辯は大河の激流にあらずして谷川の清流なり、微音又大事をなすに適せざりき。而して功利主義者 (Utilitarians) なる名はミルが其標榜する功利なる原理に基づきて自ら名けたる所なれども、後には一般此派に屬する人々を呼ぶの名稱となるに至れり。

一八二六年、この協會の解散せし前年、ミルは新に「思辯論争會」(Speculative Debating Society) なる一討論俱樂部を組織したり。蓋し彼思へらく、言論の練習は單に自己の思想を明かに通ずる爲めのみならず、平易明晰なる文體、韻律ある美文を草するにも大なる効果ありと。而して此協會の論題は主として、十八世紀に對する十九世紀の反動たる事なりしが、是又ミル自身の二十歳乃至三十歳の十年間に於ける中心問題たりき。然れども此協會に於ても、後には諸方面の問題に就き廣く討論するに至れり。一八二九年、此協會も終に解散したれども、その永年論争の結果は一八三一年、ミルの編したる「國家經濟の不決定なる問題に就きて」(Essays on

Some Unsettled Questions of Political Economy)なる論文集となり、一八四四年初めて公にせられたり。而して此協會の影響は實に大なるものにして、當時の英國一般の大勢をして靡然として功利主義の運動に向はしめ、其運動の中心機關としてミル一派の徒は遂にウエストミニスター・リヴュー(Westminster Review)なる雑誌を刊行するに至れり。當時に於てミルの主として論じたる所は宗教、政治、法律、經濟の問題なりしが、傍ら彼は好みて論理學を修め、後日判断の客觀的妥當性を有する事を證し、經驗より普遍的法則を構成すべきものとして歸納論理學を打ち立てたる案因は已に茲に養はれたるなり。此歸納論理は學術研究に一轉化を與へたるものにして、其中心思想はジェームス・ミル一派の聯想心理説に基づきて、觀念は必然に聯合すとの根本原理より諸種の經驗を歸納して、確實なる知識を得んとしたるものなり。

され共ミルが斯かる急進的事業及び文學的方面に盡したるは、唯彼の主業務の餘暇になしたるに外ならず。然らば彼の主業務とは何なりしぞ。そは一八二三年、ジェームス・ミルの統率せる、印度會社の社員となりしが、一八三六年父の歿後其職

を繼ぎて社長となり、一八五八年、印度の行政權全く政府に歸したるまで其職に執掌したる事なり。政府は彼の多年の勞を多とし、年金五百磅を送るに至れり。此職責たるや殆ど彼は餘暇なからしめしにも拘はらず、彼は僅かなる餘暇を利用して學術研究に従ひ、社會改良に盡し、繁忙中に在りながら、有名なる二大著述、論理學(System of Logic)及び經濟學(Political Economy)を草したりしなり。ペンザミストたりし時代のミルは實務に忙殺され思索に耽るの暇なかりしかとも何等悔ゆる所なく、時人は彼を「急進自由思索家」と呼びたる程なりき。

三 反ペンザム主義時代(一八二六年—四〇年)

青年の勇に驅られ熱烈なる言論と文筆とに依り、ペンザム主義の下に社會改良に従事したりし時代は過ぎて、今や壯年の成熟期に入らんとするに際して、ミルの精神生活には著しき動搖を來しぬ。從來彼は好みて人道を説き、社會改善に努力したれども、其爲めに往々にして自己を全く犠牲に供したりし事少なからざりき。眠れる者は一度は醒めざるべからず。ミル今や覺醒して自己を現はさん事

に努力するに至れり。ミル思へらく、人道と云ひ社會改善と云ふは、自己に取りては間接的關係を有するに過ぎず。吾人自らに最も近きもの、最も價值あるもの、又あらざるべからざるものは、自己の經驗、自己のライフにはあらざるか。若し然らば何の暇有つてか自己の經驗を味はず、自己のライフに意義あらしむべき事を忘れて人道、社會改善等に努力すべきぞ。汝自身を知れとは千古の金言なりと。時恰も一八二六年、ミル廿才の時なりき。斯くの如き内心の煩悶には往々にして生理的異狀の伴ふを常とするものなるが、ミルも亦其例に洩れず、多年の過度の努力は遂に彼をして神經衰弱に陥らしめしなり。茲には唯煩を避けて彼の自叙傳に依り當時を窺はんとす。

已述の如く、ミルは其教育の大部、實際上の補助を父ジェームスに俟ちし事少なからざりき。然るに父ジェームスは全く其教育法を誤り、ミルを子供として取扱はず、教材は質量共に度を失し、加ふるに全く情意の教育を缺き、唯知育にのみ偏して知識作用の分析、其習慣をば唯一の研究對象とせり。これ蓋しジェームス・ミルの心理説よりの當然の歸結なり。ジェームス・ミルに依れば、内的生活とは精神作用の分

析、其習慣に外ならず、快苦の情は所詮斯かる知的動機觀念の結合より生ずる必然の結果のみ。されば意志の自發力等は全く許す事能はず。唯吾人は社會一般の幸福を來す行爲は快感と、之に反する行爲は不快感と連想するに至らん事を求むるものにして、人生とは要するに心理的に斯くの如く機械的なるものにして、吾人の眼前に必然に横はれるものなり。而して此事實を解し得るものは唯知識あるのみ。されば吾人の努力すべきは唯行爲によりて快苦の感を必然に連想し來らん事のみなりと。これジェームス・ミルの有名なる連想心理説にして、少年ミルを教育するに當りても、彼は此主義に基づきたりしなり。然れども力の人、創造の人、ミルは已に此父の説を承認する事能はざるに至れり。所以は如何となれば、單なる知的分析は因果の必然的關係の圈内に於ては知見を啓くを得んも、其得たる知見は連想より生ずる欲望、歡喜を枯死せしむる害蟲に外ならず。欲望、歡喜なくして何の生活かあらん。ミルが、今や余は人生の大海原を渡る可き船と舵とを有すれども、多年思ひ惱みて達せんとせし目的地に到る可き帆を有せずと嘆せしは、蓋し知ありて情意なき生活の空虚なるを慨嘆せし言なるべし。噫、嘗てはべ

ンザム及びジョームス・ミル等の説きたる公共の幸福てふ原理は一の軌範となりてミルをも動かしたりしが、今や全く其力を失ひぬ斯くの如く人生の航路に船出せんとして西せんか東せんかに迷へる時に當りては、人生を厭ふは當然のみ。ミルが斯かる内心の苦悶に悩める時に際し、一八三六年、彼の慈父ジョームス・ミルは永眠したりしかば、ミルは自ら家政を處理せざるべからざるに至り、其厭世の念は更に其力を増し、徹宵孤坐して思ひに沈み、身を果なみて流涕せし事幾度なりしか。

さあれ、此くの如き情意の缺乏よりする悲は久しく持續し得るものにあらず。必ずや何等かの方面に於て生きんとする努力を生ずるを常とす。さればミルも、有價値の品性となり幸福を感じるに至るは自己主観内に之を求むる外あらず。余も爾後外的物的の希望を捨て、自己主観内に此感を求むる希望もて生活せんと叫ぶに至りぬ。斯くの如く自己を尊重せざるべからざるを自覺するに至りしは父ジョームスの教育法の不備面を補へるものと云はざるべからず。即ち父の教育は全く個性を没却し、主観を蔑視し、感情生活を捨て、只管社會客觀界にのみ

意を注ぎたるものなりき。然れども吾人が自己に最も近き現實として味ひ得る所は社會的客觀的の事物にあらざるなり。されば少壯哲人ミルは、ベンザム及び父ジョームス等の眼には醜なる非現實的のものとして映じたる詩歌に寧ろ慰安を見出し、バイロンの詩を讀みては人生の悲惨に泣き、ワーズワースの詩を讀みては自然美の壮大なるを感じ、ゲーテの詩を讀みては廣く人生の消長浮沈を味ひ、以て大に感情を養ひ得たりき。

彼は獨り自ら此くの如く感情生活を味ひたるのみならず、其知己をも動かして、又詩情を解せしめんと努めたり。然るに或る者は彼の切なる勸告に應せざりしかば、ミルは自らそれ等の人口と遠かり、嘗ては急進家なりと云はれし彼は、今や轉じて保守黨の人々、コールリッジ、カーライル等を親近し、古代の思想と雖無下に捨て難きものなるを悟るに至れり。其結果彼は大陸思想に近接し、ゲーテを讀み、諸哲學者殊にコムトを愛讀するに至れり。其動機たるや、蓋し一八二八年、コールリッジの詩を讀みたるに始まる。爾來彼はコムトの流を汲みて、ベンザムの思想を捨つるに至りぬ。されば十九世紀思想の一大特質たる全ての認識は相對的にし

て絶對的にあらず、政治法律と雖も決して絶對不變にあらず、人知の進歩如何、人間の經驗如何に依つて決定せらるべきものなれば、凡てを科學的經驗的の立脚地より考察せざるべからずとの實證論の思想は、コムトを経てミルに於て最も明かに代表せられたるなり。

更に又彼は幸福を量にのみ依りて測り、全く客觀的に規定せんとしたるベンザム一派の思想をも捨て、幸福は全く主觀的なるものにして、唯量にのみ依りて測るべきにあらず、吾人の道德意識は幸福に性質の差ある事を認むるにあらずやとの思想を抱くに至れり、蓋し後年公にしたる功利説の思想は、已に此時に萌したるなり。されどは臆て彼が純快樂論者にあらざる事を示すものにして、快樂論の主張する所は、人は本來快を求め苦を厭ふとの心理上の事實に立脚せるものなれば、快樂を欲する其事實に質の善惡あるべからざるなり。されど暫し彼の説の大要を説かしめよ。

功利説の箴言とする所は、幸福は望ましきもの、他の一切のものは唯幸福を得るの手段としてのみ價值ありと云ふにあり。而して倫理究極の目的は社會一般の

幸福てふ事なり。然るにベンザム等の如き幸福を量にのみ依りて測らんとするは、吾人の道德意識に反する所なり。豚となりて満足せんよりは人となりて不満ならんには如かず。凡俗となりて満足せんよりはソクラテースとなりて不満ならんには如かずとなすは吾人が内心に感ずる所なり。然るに各個人は自己の得らるべき限りの最大量の幸福を欲求すてふ事實は、直に吾人が社會一般の幸福を求めざるべからざる理由なり。何となれば甲は甲の快樂を、乙は乙の快樂を求む。故に萬人は萬人の快樂を求めざるべからずと。これ有名なる彼の功利説の論證にして、ベンザムの未だ企てざりし所なれども、吾人より見れば、徒に形式論理を弄したる綜合の謬論に外ならざるなり。

彼の説は往々にしてベンザムの思想に反したる節もあれど、依然として彼はベンザムの門下たるを失はず。ベンザムは吾人の行爲を決定するものは外的社會的の制裁なりとしたるが、ミルも亦其思想を繼承せり。唯ミルはベンザムと異なりて、制裁に内外の二面ある事を唱へたるのみ。何をか外的制裁となす、社會國家及び神の制裁是なり。其説明に至りてはベンザムと異なる所なし。然らば内的制

裁とは如何、良心の制裁ミルの所謂内心の制裁是なり。此内的制裁こそ眞に道德的制裁と呼ぶべきものにして、最も尊きものたれ。吾人の行爲如何に依りて良心は之を賞罰す。此良心の賞罰諾否は吾人の行爲を決すべき最強の動機なり。現實不完全なる世相にありては自己の利害と他人のそれとは矛盾するを常とす。吾人をして自己の利害を犠牲に供し、他人一般の幸福の爲めに努力せしむるものは此良心の制裁なり。吾人は其命に従つて云爲せざるべからざるなりと。此良心制裁論は彼の功利説中最も光輝ありとせらるゝ所なり。されど彼は飽くまで功利説の立場を離れず、良心は直覺論者の主張するが如く、決して先天的に人間の具有するものにあらず、年と共に経験を重ねて次第に發達し來りたるものなりとの經驗論を取りたり。

彼は又人間の精神生活を尊び國家と雖干渉すべからざる自由の生活なりと主張し、之と並びて社會の改善は個人の改造に待たざるべからずと考へたりき。彼が理想とせし所は改善せられたる個人の樹立せる純共和政治なりしが、其理想實現の爲めに自由主義に替し、社會主義を助けたり。されば彼は父ジュームス及び

ベンサム等が善政は社會と政府との利害の一致にのみ懸れりと假定したる思想に反し又選舉法をも排して善政を施さんには、先づ其方法より考究せざるべからずとして、論理學を深く修むるに至りぬ。されば一八三一年以來彼は三段論法と其原理を専ら修得するに力めたりき。従つて又彼の歴史に對する見解も大に卓越せるものあり。歴史を見るにも主觀的思想史的方面に重きを置き、客觀的機械的方面を見る事輕かりき。彼の見に従へば、歴史を考察するにも有機的と批評的又は否定的との二面よりするを要す。有機的とは何等かの信仰ありて漸次進歩發達に向ふ時代、批評的とは舊信仰に飽きたらず之を否定し積極的に新人生觀の建設に努力する時代なり。思ふに彼が斯くの如く歴史を尊びたるは、一は大陸の歴史哲學の影響により、他は人間の主觀を尊び、自由と努力とを許さん事を求めたるによるものにして、ベンサム一派の國家機械觀に全く反對せるものなり。

一八二八年、彼れ病を得てよりは詩歌音樂に大なる興味を有するに至り、生來の詩情は湧然として再燃するに至れり。一八二九年に至つては從來徒に討論を駁

はし辯舌を練り、他人の思想を喋々せし事の愚を悟りて討論會を去りたれども、而も生來の哲學的、政治的急進思想は全く其跡を斷たざりき。然るに一八三六年以來屢、神經過敏に侵され身心共に鬱々として樂しまざりしが、同年慈父ジエームス死したれば彼は強ひて家長の位置に立たざるべからざるに至りぬ。生來眞面目なる彼に加ふるに心身の憂悶を以てせり。益々暗黒の雲その身邊を掩ひたるは蓋し當然のみ。其結果彼の思想は極めて消極的となり、吾人が努力せざるべからざる所は與へられたる幸福を保持するにあらず、寧ろ來るべき苦痛を防止するにあり」と主張するに至りぬ。『Happiness no life of rapture』

斯くの如きは一八四〇年に至るまでのミルの思想経過の跡なり。一八三〇年—四〇年の十年間に於てミルは己に彼の大著論理學を完成しぬ。即ち一八三八年『歸納論』(Theory of Induction)を、一八四〇年『精神科學の論理』(The Logic of the Spiritual Sciences)を完成せり。其間又諸種の文明に批評を加へしが、就中有名なるものは一八三六年の『文明論』、三八年の『ベンザム論』、四〇年の『コールリッジ論』及び『亞米利加の共和政治論』等なり。更に又後年の作にして氏の思想を窺ふ可きものは、五八年

の『自由論』(Treatise on Liberty)、六一一年の『代議政體論』(The Representative Government)、四八年の『經濟學』(System of the Political Economy)及び七八年の『社會主義に就きて』(On Socialism)等あり。

四 コムトの影響 (一八四一年—四四年)

ミルは一八三七年初めてコムトの著書『實證哲學』(Positivism)を購讀したり。一八四〇年、ミルは稀世の名著たる『論理學』第六卷『精神科學の論理』を完成せり。一八四一年以來彼はコムトと交通し互に思想の交換を樂しめり。而して一八四三年に至りてはコムトの思想系統の科學的なるを推獎して、自ら余が向後の事業に對する最大有功の規範なりと稱讚せり。されば彼はコムトの方法を承認してコムトの判斷を規範となしぬ。後コムトの方法の權威多少減少せるを見れども、而も其根本精神たりし社會的科學的方法は依然としてミルを動かしぬ。ミルはコムトの歴史的方法に加ふるに哲學的根據を以てし、社會現象を科學的に研究せん事を力めたり。然れどもコムトの實證論は一面極めて經驗的なれども、他面又獨斷

的にして實證哲學の名の下に一の軌となり、自由思想を拘束するの弊ありき例へばコムトに依れば、人間の精神的乃至品質上の特性は全く變ずる事能はず。教育も根本性には何等の力をも有せずと獨斷の思想を有せしが、ミルは斯くの如き思想には服する能はず、飽くまで教育の効果を認めたり。コムトの如き思想は寧ろ事實に反するものにして、正當なる科學の精神を混亂せしむるものなり、教育はよく人性を改善する事を得るものなりと主張せり。此くの如くミルとコムトとは其思想を異にしたる結果、コムトの婦人論の如きは、女子は唯家政を處理すれば足れりとし、ミルは婦人開放は社會的の一大事業なりとせり。ミルがコムトに反したるは其論理學にも現はるれども、最も明かなるものは一八六四年の著「オーグスト・コムト及び其實證論」(August Comte and the Positivism)なり。

コムトは狂暴なる民主政體に反し、寧ろ溫健なる政治を理想とし、婦人開放の如きは一時の流行熱に外ならずとせしに反して、ミルは有機的民主政體を理想とせしかば、此點に於て太くコムトを反駁せり。加之、コムトは天性溫健正實の君子、何等の過急を好まざりしに反し、新代の哲人ミルは寧ろ急進の性、されば此兩思

想家の平和は永續すべくもあらず、必ずや發火せん事は免るべからざる所なり。然りと雖ミルはコムトの實證論の精神を承認し、科學の確實なる事を主張し、合理なる知識の確立は現象界理の事に限るとせしは最も注意を要す。ミル此點に於ては何等の獨創なく、是等の思想は遠くガリレオ、ニュートン等の自然科學者の、近くはヒューム、ベンサム、ジエームスミル及コムト等の經驗的思想を繼承したるに外ならず。更に又彼はコムトに従ひ、歴史を分ちて宗教的、哲學的、現象論的の三段とせり。コムトの意とせし所は社會の物質文明が必ずしも此三段の順序にて進歩すとせしにはあらずして、吾人の認識の發達は右三段の進歩をなす事を現はしたるなり。蓋しコムトと雖決して社會の發達は物質的條件に依る事を無視したるにあらず、唯歴史的經過の説明に際してミルに増して主觀的方面に重きを置きたるのみ。されば彼に依れば人間の經濟的活動の如きも精神過程に外ならずとせり。而してミルはコムトの此進歩なる概念の説明を繼ぎぬ。

ミルの最も力を致したるは經濟的方面なりき。然れども果して彼が經濟的歴史の理解に如何ばかりの興味を有したりしやは明かならず。彼が人間發達の最高

理想とせし所は精神的教化にして、人間には本來功利的の情熱あり、由りて以て互に協力和合する事を得るものなり。若し之に反して人間にして若し個人的存在をなすに過ぎざらんか、殆ど無力なるべし。吾人は如何なる明知を有するとも其明知は先づ吾人の情意の柏車に蹴られざるべからず。シーベンハウエルも云へる如く明知も動物的意欲に對しては第二義的のものにして、其奴婢となるべきものなり。此冷かなる知に熱を與ふる意欲こそ吾人の生活を幾久しく指導せし北斗なれ。されば人間は如何にするとも社會的生活を送らざるべからざるものにして、其爲めの必然の條件として普遍的功利の情熱の信仰なかるべからず。何となれば個人的利害得失の感情の如きは、單に其個人の幸福の格律とこそなれ、吾人の共同生活の爲めには寧ろ累を及ぼすものなればなり。而して此功利なる情意は吾人の衝動的に有する所のものにして之を社會統一の根本原理となすは吾人の思索の致す所なり。而して此根本原理たる情熱及び之に對する思索的能力の歴史は頓て人類進化の歴史を指導せる大要素なりと。此くの如きは已に一八三〇年―四〇年の間に於てミルがコムトに影響せられたる歴史觀なり。

更にミルはコムトに従つて科學を抽象的、具體的、規範的、記述的の四に分ちぬ。抽象的科學とは、自然の事實を支配する法則を、具體的科學とは事實そのものを取扱ふものなり。此別に従つてコムトは科學を縦列に數へたり。然れども此制たるや元來絶對的にあらず。何となれば人は何事をも個別的に學び得るものにあらず。必ずや社會的歴史的關係に於てせざるべからず。従つて具體的科學を抽象して規範を律せんとするの努力を生せざるべからず。その規範學は社會學なりとの見を抱きてコムトは社會學を規範學たらしめんと努めき。ミル亦此見に従へり。而してコムトは其目的實現の爲めに個々科學を記述すべき論理を重んじ、由りて以て精神作用を現はし、それを積極的科學となさんと力めたりしが、その企てるや遂に失敗に終りぬ。ミル之を遺憾としてコムトの遺志を繼承し、論理に力を盡しぬ。ミルに従へば、論理學は決して哲學的認識論にあらず。科學を論ずる科學としての論理とは空言のみ。コムトと同じく彼の努力せしは事實の論理、發達發見の論理を作らんとしたるにあり。されどもコムトの實證論は根本の心理作用を誤解し、精神的事實を誤信し、單に生理的に解し得るものとしたるやの觀ある

なり。然るにミルの哲學に於ては此コムトの誤見を改め、精神作用を全く獨立なるものとし、物質現象に對せしめたるは尤も注意すべき所なり。されば彼は社會學的考察の方法として論理を深く研究し、コムトが演繹的に解したるに對して彼は歸納法に重きを置き、事實を先にしたり。これ彼が歸納法大成者として英名を轟かしたる所以にして、其著を一八四〇年の精神科學の論理となす。要するにコムトとミルとの思想には著しき差あると共に又甚しき類似ある事を認めざるべからず。曾てエマーソンが世に天才なし、思想家なし、何となれば其才、其思想の依つて來る所を尋ぬれば又驚くに足らずと云へる言は、又ミルにも適用する事を得可し。され、ミルはコムト以上の思想系統を有し、精神科學の論理的假定を事實的に考察し、コムトより獨立に歴史的事實を更に明確ならしめ、共同生活の根據を確定せんが爲めに歴史的因果の概念を一層明かにし、以てコムトの實證論の根本精神に歸せしめんとせり。

五 收穫時代(一八四三年—七三年)

努力の人にして敏活なる觀察者ミルの生活を論じて、遂に其成果の如何なるかを見んとするに至れり。彼は生涯研學怠る所なく、又彼の盡したるは單に理論的方面のみにあらずして實際的方面に於ける功も仲々に僅少なからず。見よ、今日に於ても尙彼が眞理を好み、社會改良に盡したりし血と熱とは後人の間に生命あるにあらずや。ミル自らも實際的社會改良こそ我能事なれとの確信を抱きたりしなり。然るに一八四三年、論理學を、四八年、經濟原論を公にしたる後は彼も自ら安んずる所ありたるものゝ如し。爾來英國實證論派の驍將、精神界の指導者となれり。之より先き一八三一年以來、彼はテイラー(Taylor)夫人と親しくせしが、後年に至りて其交情は更に一層の密を加へ、同夫人の夫の死後より一八五一年、此夫人の死に至るまで、ミルはいとも幸福なる生活を此夫人と送りぬ。然り而してミルの社會的經濟的乃至社會的著述をなすに當りてや、テイラー夫人の貢獻せし所亦少なからず。されば吾人はミルに捧ぐる光榮の幾分を割きて同夫人を以下少しく顯彰せん。とす。

ミルはジェームス・ミル及びベンザムの客觀的價值評價の思想の影響を蒙りたれ

ば初めは客觀的傾向の著しかりし事勿論なりき。然るに彼の心情を動かして主觀的たらしめ、藝術的享樂を好ましめ、其氣質を一變せしめ、主客完備の碩學たらしめし者は誰なりしか。勿論ミル已に其素質を有したるや疑なき所なれども、又一方に於てはテイラー夫人の忠言其所縁となりたるなり。抽象的科學的の事は吾自らより、然れ共人間必須の事即ち實際的方面の事は吾此婦人より得たり。さればミルが哲學を人間社會に應用して其實功如何を問題とするに至りたるは蓋し此夫人の力と云ひつべきなり。さればテイラー夫人の死せし時、ミル暫し自失せりとぞ。但し當然ならんか。テイラーは吾思想の先驅なりと稱讃せるは宜なりと云ふべし。而して彼此婦人と交はる深ければ愈、社會的、政治的、倫理的、研究的強きを見る。爾後に論じたる所を見るに、主として經濟學の條下に屬すべきものなるを見ても、如何に此夫人によりて彼が實生活に重きを置くに至りたるかを知らるに足る。五九年、自由論及び議會改良論を、六一年、婦人の聽覺を著はしぬ。婦人の聽覺なる書は蓋し彼が婦人テイラーを追慕したる思出なるべし。又議會改良論と相連關して六一年、代議政體を、又六四年には、オーグスト・コムト及び其實證

論(August Comte and the Positivism)を著はしぬ。

ミルは又當時の政治界に大なる勢力を有したりしが、當時の議會は殆ど多數黨の左右する所なりければ、彼自ら議員となり、議會に立たんと望みを有したりしが、既述せし如く一八五八年までは印度會社長として事務多端、又其暇を得ざりき。後七年にして彼は遂にウエストミンスター州選出代議士となり、グラドストーンの統率せし自由黨に屬し、其急進思想を唱へたりしが、彼の急進の思想自由黨の思想に比しては左まで急進ならず、彼の温情誠實の心臓より溢出せし高遠の思想も容れられず。一八六八年、遂に其位地を失ひぬ。然れ共彼の代議士時代は無意味の時代にはあらずりき。議會に立てる餘暇を以て彼は哲學上の二大著述をなせり。即ち六一、年功利説(Utilitarianism)及び、ハミルトンの哲學の吟味を著し、彼の根本思想を明かにせり。吾人は又此二書に依りてよく彼の人格を窺ひ得らるゝなり。六六年にはプラトーンを論じぬ。

高遠なる彼の思想も時人の容るゝ所とならず、政治上に於ても其意を得ずして議會を去りたる後は獨り淋しき生活を送り、時に近郊に出で又はアビグノンに

其別荘を訪ひて彼の公生涯及び其科學的活動に助力して同地に歿したる夫人テイラーを追想し其餘生を送りぬ。而して其間に在りて著はしたる所の書に、七三年の「自叙傳」(Autobiography)、七四年の「宗教の研究及び七六年の「社會主義に就きて」(On Socialism)あり。而して是等の書を世に公にせん事に思ひを致したるは其義娘ヘレン・テイラー(Helen Taylor)嬢なりき。

年と共に彼の健康も衰へたりしが、彼は最も自然美を愛し、植物採集に唯一の慰藉を求め常に散策を取りて樂しめり、孤影蕭々として野に花を求むる彼と、新代の人々に影響して英名轟ける彼とを想像せよ、亦何等かの感なき能はず。一八七三年五月八日、彼は義娘ヘレン・テイラーの看護を受けながら莞爾として永眠せり。其斷末魔に際して娘ヘレンに微かなる聲もて語りて曰く「我事終れり」と。嗚呼此くの如くにして英國十九世紀の大思想家は逝きぬ。

六 結 論

ミルは所謂過渡期の哲學者に外ならず、寛大なる心、豊富精美の性はベンザム及

び父ジェームスにも増して、時代の傾向他人の思想にも耳傾くるを得しめたり。彼が玉の如き廉直と偏頗なる黨派心より自由なりしとは、彼をして其心の門戸を開放し、同情し得るあらゆる思想を取り容るゝを得しめたり。されども惜むらくはそを同化し彼の思想と鎔合せしむるの力を缺きぬ。されば時經るに従ひ、彼の身邊に照り輝ける光明は批評の暗に薄らぐを如何にせん。され共彼を水先案内者として思想の大海に艘ぎ出でんとするの徒は、彼を以て第一流の知識の大海の航海者なりとし、進行するに際しても彼が氣高く姿男々しく舵れる様の神々しきを嘆美せざるはなし。今日に在りてミルの思想に缺點を數へ來らん事いと容易なれども、若し吾人にしてミルを正しく理會せんに今日の知識を以てす可からず。必ずや彼の時代の知識を標準とせざるべからず。されば吾人はミルの當時の思想界に於ける影響如何を研めんが爲めには、先づ當時の英國思想界の大勢を窺はざるべからず。其爲めに吾人は當時の思想界を見るに、ミルの記したる所を引用せんとす。

嗚呼、我英國は嘗つて全歐哲學界の玉座に即きし事ありしは過ぎたる昔の夢な

りしか。見よ、英國の現状を如何せん。歐洲諸國の輿論にこれ與みし、何等獨創の新天地なし。其優秀と目せらるゝ所は唯船渠、運河、鐵道等の物質文明に外ならず。思想に於ては唯一種の眞面目なる良心と、過激を厭ひて中庸を尊ぶとに因りて、稍、他國と色を異にするのみ。されど、其れと同時に高遠なる憧憬の影だに認め得ざるにあらざるや。人生、生活の大問題に就きて興味を感ずる者幾何ぞ。更に一人たりとも實際的功果を伴ひ來る人類社會の文明哲學史乃至如何なる信仰に對しても些少の好奇心をも起さざるを見て、吾人默するに忍びんやと。

ミルは斯ゝる記事をなしたる時に當りて、哲學的代表者としてベンザムの存在する事を忘れたるにはあらず。されども彼等ベンザム一派は佛蘭西革命に次いで起りたる反動より進むこと幾何もなかりしを慨嘆したるなり。されば吾人がミルに多とする所は、彼が人類社會の究極問題に同情して、英國の思潮を高め、ベンザム及びジエームス・ミルの説に新しき哲學的根據を與へたる點に在り。ミルの著「サー・ウィリアム・ハミルトンの哲學」は大英國をして其久しき惰眠より覺醒せしむるの曉鐘となり、當時の思想界の一大動力となりぬ。

當時已に進化論の思想の芽萌さゞりしに非ざりしも、未だミルは之を同化する事能はざりしは惜む可き限りなり。後此新思潮は著しき勢力を以て全歐を風靡したりしかども、時已に遅く、ミルの能事終れる時なりければ、彼の如き心の寛大を以てしても亦如何ともする事能はざりき。されば彼ミルは知的探求の種をこそ蒔きたれ、未だ其實を收むる事能はざりき。然るに彼の蒔きたる種よりは未だ嘗つて見る事を得ざりし十九世紀末の思想の花の満開となり、進化論者は遂に其一部の實を收むるを得たり。吾人如何にミルの所説に缺點を認むるとも、彼が十九世紀の一大知的動因となり、指南車となり、北斗となり、思想の大海の渡航者に一道の光明を與へたる事實は人類のあらん限り抹殺する事能はざる所なり。嗚呼、彼も亦一大思想家たるに恥ぢず。誰か彼の功を多とせざるものあらん。

第三章 グリーン

一 小傳

英國に於ける新カント派又は新ヘーゲル派の哲學の代表者として其名高きトーマス・ヒル・グリーン (Thomas Hill Green) は一八三六年四月七日を以て英國ヨークシアなるウエスト・ライディングの一村パーキン (Billingham) に生れたり。父は村の牧師たりき。父側の系統に於て彼はオリヴァー・クロムウェルの子孫なり。彼が正直にして動かざる性格は思ふに此偉大なる祖先より遺傳せしものならん。グリーンは生村は全く都を離れし寒村にして學校の設もなかりければ、彼は幼時の教育を家庭に受け、一八五〇年、十四歳の時に至りて初めてラグビ (Rugby) の學校に入れり。彼ラグビにあること五年、其間特に他生に優る所ありとも見え、一八五五年、オクスフォードのバリオール・カレッジに入り、一八六〇年、同大學の評議員に選ばれたり。彼が此後の生涯はオクスフォード大學と緊密の關係を有し、初めはカレッジの講師たるに止まりしが、一八七八年よりは倫理學のホイット (Whitwell) 教授に任せられて、

その一八八二年三月二十六日を以て逝去するの時に及べり。彼が同大學にて講せし講義が骨子となりて、彼の重要な二著倫理學序論 (Prolegomena to Ethics) 及び政治上の責任の原理講義 (Lectures on the Principles of Political Obligation) が出でたり。二著共著者の死後に至りて初めて公刊せられたれども、彼の學説は二著の公にせらるゝ以前已に彼の「ヒューム入門」(Introduction to Hume) によりて間接に世間に知られき。此書の著出は一八七四年―七五年にあり。英國の經驗派哲學の學理は其中に悉されたり。

二 彼の人物性行

以上述ぶるが如くグリーンが一生涯は打ち見たる所平凡なるが實は哲學上の甚深なる思想を以て充實せられ、其特色は次第に大學の諸先輩の認むる所となり、又青年學生の間に偉大なる感化を及ぼすに至りたり。彼の容貌は著しく常人と異なる所ありたれば、彼を個人的に知らざる者までも其風采に注意せざるはなきほどなりき。其黒くして濃き頭髮、其黒味を帯ぶたる顔色、其眞黒の眉、一種特別

なる凝視をなすなる茶褐色なせる窪める雙眼は一度彼を見たる者をして忘るること能はざらしめたり。總じてグリーン風の采は飽くまでも眞面目にして嚴肅に其心の奥底には強硬にして破るべからざる勇猛心ありき。彼は世のなべての人の如くに徒に廣く人と交るを欲せざりければ其友人とし云へば僅に數人に止まりしも、而も是等の數人は何れが彼の親友心友に非ざるはなかりき。彼は又英國大學生の慣習なる各種の運動や遊戯にも亦更に何等の趣味をも感せざりき。故に人或は彼を以て交際嫌ひの圭角ある變人なりとなせしも、一度之と交りて親密の度を加へたるものは其眞面目なる遠慮勝なる表て向きの性癖の奥に燃ゆるが如く友誼の熱情の存せるを認めざるを得ざりき。否彼が友情の濃厚なるは殆ど想像以外なりき。彼の由來眞面目臭りて靜肅を好み、沈座を愛せしは決して其情の冷なる故ならずして、彼が其若齡に比しては餘計に哲學問題に興味を有し居常思案に耽れるの致す所に外ならざりき。彼が神學に其心を潜めしは小學校及び中學校にありし時よりなり。

此の如くに嚴肅なるグリーンは又時に戯言を以て人を喜ばせたり。これ恰もカ

ーライルが其清教徒的の嚴肅を有するにも拘らず、常に滑稽や諷刺を以て對話者をして其座談の面白きに恍惚たらしめしと同じ。而もグリーンの嚴肅にはカーライルの如き圭角も無愛嬌もなかりき。彼は温情に富み別して貧しき者憫れなる者に向つては自ら堪へ能はざるほどの熱烈なる同情を寄せたり。彼は是を以てオクスフォード學生の奢侈なる生活や浮華なる行爲は飽くまでも厭ひ、社會上の平等を好み、簡古單純の人間こそ最も愛すべき者なれとて好んで農商を事とする者と交れり。

彼は概して大衆の集會せる場所等にては沈黙勝なりしも、二三友人の會せる時には中々に能く語れり。これ彼が内氣の性の然らしめし所ならん。彼は談話の後如何なる場合にも明瞭に表明せられたり。彼は常に創始的にして苟も他に同せず。其頭腦の極めて鋭敏なりしにも拘らず、大學が與へんとする名譽とか競争試験とかには頗る冷淡無頓着なりき。

彼は至つて不精なりき。仕事に着手するが嫌ひにて簡易の業にても其愈着手せ

されば時を失ふと云ふ際とき所まで猶豫したる上ならずは中々に手を下して之に取掛ると云ふことをなさざりき。彼の遊びしパリオル校の習慣として、學生は必ず毎金曜日の夕方までに一論文を提出せざるべからざるの規定なりしが、グリーンは教師の迷惑にも拘らず、いつも土曜日に至らざれば其文を提出するに至らざりき。されと點檢の結果が彼のは常に最も思想に富みて價值ある者と評價せられたりき。此深思熟慮する風はグリーンの爲めには良果を齎して一般の學生が唯無暗と人の説を並べ立て、博渉を誇る俗ある間に、凡て問題を能く咀嚼して我物とし、善くも悪くも我自らの解決を與へて一の首尾一貫せる哲學系統を作らんと努めたり。

大學の學生時代及び大學を卒して學位を得たりし頃には、グリーンは大學の討論會に於て能く政治問題を論じたり。彼の辯舌は稍、學究的にして通俗ならずりしも其一八六三年、北米南北戦争の折、討論會に於ては非常の熱心を以てこの奴隸貿易に關する戦争を批評し聽衆に非常の感激を與へたり。大學々生間の集會にて實際問題を議論する時にも彼は常に其中の主なる論者なりき。

彼の性質の陰氣なりしにも拘らず交際の追々廣くなり來ると共に快活となり來れり。彼に於て最も尊むべかりしは其偉大なる言論の才を有せしにも拘らず、嘗つて論敵と戈を交へて之に打ち勝たんことを努めざりし事ありき。彼は議論の最中にも若し己れの説に誤あることに氣付きなば直ちに之を訂正して敵に降るに吝ならずりき。

グリーンの學生時代は學費に不足勝にして従つて卒業後の方針の如きも明瞭ならず。母校たるパリオル校の評議員に推されてよりは少しく収入を増して多少生活の憂を減するを得たれども、彼が將來を如何にせんてふ問題猶未だ決せられずして、彼は或は新聞記者とならんとし、又或時は文部省の官吏とならんともしたり。されと是等の志望の中にも僧侶とならんとするの念は最も強固なりき。母校の講師に推されて愈、教育に一生を委ねんことを決心するまでは彼は實に其不定の目標の間に漂ひたりしなり。已に母校の講師となりたる彼は尙又其専門の研究課目とすべき者に就いて迷惑し、歴史にすべきか神學にすべきか將た哲學にすべきかと思案せり。彼は別段に大なる記憶力を有せしに非ず、又考

證學上の力を有せし譯にもあらざりしかど、事實の真相を洞觀する事、出來事の因果の關係を捕捉する事に就いては人に優れる頭腦を有し、之に加ふるに史實をば戯曲の如くに吾人の眼前に活躍せしむること、カーライルの流の如きは最も多くの趣味を感じたりき。神學も亦彼が少年時代より其好む所として常に其腦裏を去らざりし者なり。されば彼のオクスフォードを卒するや直ちに獨逸のさる批評家の書を繕きて之が研究を始めた。彼のハイデルベルヒに在るやパウエル(Paull)の翻譯に着手したるが其例の不精よりならん、遷延遲疑終に之を完成せずして止みたり。彼は決してテーペンゲン派の神學說に滿幅の同意を寄せし譯にはあらざりしかど、パウルの初論の巧妙なると其獨創の見を有することには甚しく敬服しつゝありしが如し。

彼は此の如くに三つの岐路に彷徨したりしかど、終には哲學と倫理とを以て比較的短き一生涯の研究目的となすに至れり。グリーンの學生時代にはオクスフォード大學に二つの大なる感化が行はれつゝありき。一は宗教の領域にしてカーライル・ニューマンの勢力たり、一は哲學及び論理學の方面にしてジョン・ステューア

トミルの其れなりき。然るに此二偉人の感化はグリーンに向つては殆ど皆無なりき。彼は其信念よりして絶対にミル一輩の功利主義の倫理說を排撃し又當時哲學的の歴史家として一種獨得の唯物觀を史學に試み學生社會の欣仰する所たりしバグゲルの說をも嫌忌したり。彼はカーライルの影響を受けて何れかと言はゞ獨逸の影響を受くること大なりき。獨逸の學者の中、カント、ヘーゲルの感化最も大なりしも殊にカントのは著しかりき。彼は英國に新カント派の哲學を起し其清高の人格を以てオクスフォードの學生間に非常に大なる道德上の感化を及ぼしたり。唯奇なるは、グリーンの感化が單にカレッジの講師たりし時よりも大學の教授となりし後の方が少かりし事にてありき。これ大學の教授となりては聽講生も少く、又教授が學生に接するの機會が減ずればなりき。

三 經驗論の批評

經驗派の哲學は殆ど英國固有の哲學なりと言ふべし。殊に第十九世紀後半期の初めに當りて同國に行はれたる思想はヒュームの經驗論にハーバート・スペンサ

1 以來の生物進化論を加味せしものなり。此學説たるや之を其論理の窮極に進
 及せんには帝に一切の哲學をして無用の長物たらしむるのみならず、尙吾人の
 實際生活を破壊するに至らざれば止まざる者なり。吾人の心的作用をば互に關
 係なき原子の感覺に因由するものとして認識の可能を無にし、尙も進んで人間
 をば自然力の結果に過ぎすと云へるは吾人の行爲を無意義ならしむるなり。何
 となれば、元來人生なる者は其中必然に第一には何をなすべきかを認識し、第二
 には此認識を行ふべき力を有する人格的我的存在を含蓄すればなり。グリーン
 は理論上よりならで實際生活の必要上止むなく、人間對自然の大問題の研究を
 始めたり。彼は以爲らく吾人にして人間の抑、何物なるか、彼の其周圍に對する關
 係如何と云ふ問題を解き得たらんには彼が何をかなすべきてふ其職能を認識
 し得るに至るべし。此の認識の光に照して吾人は社會的諸制度の標準となるべ
 き道德律を形成するを得ん。而して是等の制度は必ずや道德的觀念の客觀的表
 示たるべく、道德的理想の最後に具體的の形をとるは、此社會的團衆の中に於て
 なるべきなりと。

人とは何ぞやの問は經驗とは何ぞやの問と同じ。何となれば經驗とは吾人の意
 識すと云ふことを意味すればなり。意識の事實とは吾人が當然其存在を確め得
 べき事實のみ。人に最も著大なる特色、即ち殊に人間を他の動物と區別する所の
 特色は自意識なり。吾人の心的作用を分析して得たる最も簡單なる精神作用は
 感覺なるが、こは單に物理的又は心理的の變化するに止まらず、亦其變化の意識
 なり。吾人の認識は單に感覺のみに依りて得らるゝ者にあらず、是等の感覺を綜
 合する所の心意にして吾人に之なくんば成立し得べき者にあらざるなり。神を
 以てすれば世界は其有るが儘なれども、人間を以てすれば世界は變化す。吾人の
 經驗は神の次第に吾人に體現せられたるなり。
 グリーンは同一の分析的方法を道德哲學にも推及して、倫理學なる者は此人間
 研究をば社會生活の特殊の狀態に適用したる者に外ならず、此際用ひられたる
 能力は別殊の道德力なる者にあらずして凡て吾人の知識の源泉たる理性其物
 なりと云へり。吾人は内省によりて吾人の能力、吾人の職能、及び吾人の責任を感
 ず。内省は吾人をして之を實現せば吾人に眞善を齎すべき所以の何等かの可能

の潜在せるを明に意識せしむ。此分析の結果、内容の可能性は次第に發展し來る。蓋し個人の善は斯くの如くにして得られたる概念を體達する事によりてのみ實現せられ得べきものなり。是等の概念にして若し不可能性たるに止まらんか、即ち一の理想に止まらんか、ては行爲の動機となる。動機とは之を體達せば自ら満足すべき何等かの目的の觀念なり、即ち之が實現に於て己れの眞我を發見すべき所の者なり。意志作用とは一定の仕方によりて自我を實現する決意是なり。こは決して無規律の者にも將た外よりして決定せらるゝ者にも非ず。何となれば其原因たる動機は人其物の裏にあり、而して斯かる動機と自我とを一にする事はこれ合理的にして自由の働なる自己決定にてあればなり。人の自由なる者は彼が何物にても選擇し得るの力を有するが爲めならずして、彼が理性が彼の眞善なりと指示せるものと己れを合致せしむる力あるが故なり。各人の品性の實現こそ此所謂善なり。故に吾人の道德上の理想たる最終善は人間社會に於て初めて實現せられ得べきものなり。社會にては各個人は其個性を失うことなく、否一層之を完全にすべく努め、即ちそれ自らに於て一の目的たりながら社會全

體の組織分子として相頼るなり。社會は個人が社會構成の爲めに必要なるが如くに亦個人を形成せんが爲めに必要なる者なり。社會的結合は各個人の特殊の能力を發揮するに必要缺くべからざる條件なり。人の自己完成と云ふことは決して孤立によりて成し遂げらるべき者にあらずして社會に於ける同胞市民との協力に須たざるべからざるなり。

これグリーンンの社會觀なり。彼は非常に社會的の事業に趣味を持てり。哲學者が實際の政治生活に適應せざること詩人と同じきは普通の事實なるに、グリーンンにありては斯かることなかりき。彼は甚しく政治に興味を感じ、常に其哲學を以て神學の基礎となせしのみならず、亦之を政治の基礎ともなせり。其政治に對する興味は晩年に至りて少しは薄らぎたれども、其第一の信念とせし自由主義又は急進主義は聊も其面目を改むることなかりき。即ち彼は飽くまでも、一切の制度を民主的とすること、平和を尊ぶこと、並に外國の政争に干渉せざること、を以て其主義となせり。彼が國民に對する理想は頗る大なる者にて所謂グレート・ブリテニズム (Greater-Britainism) に對する小英國主義とにても云はんか、海外に頗

土を擴張し其勢力を外に向つて伸張せんと云ふよりも寧ろ民衆の幸福を増進せんことを求めたり。曰く余は我英國の國旗の他國人の手によりて地に委せらるるよりも寧ろ貧者に増税せざらんことを望む者なり」と。

彼は當時の人物中最もナポレオン三世を嫌忌し以て佛國を誤る者、歐洲全局の平和を攪亂せる者とし、又内に於てはパーマストン卿 (Palmerston) を以て議院政治を紊る者となせり。彼の尊敬を得し者はジンズライトなりき。

グリーンは斯くの如くに實際政治にも其注意を怠らざりければ、彼はオクスフォード市の参事會員の候補者に擧げられしに、彼は研究と講義とに多忙なりしにも拘らず、進んで参事會員となれり。オクスフォード大學の教師にして市参事會員となれるはグリーンを以て嚆矢なりと云ふ。大學と市との關係は彼の力によりて大に圓滑となれり。彼にして若し國會議員たるを望みたりしならんには市より推選せらるゝことを得たるべきも彼は終に出でざりき。

第四章 シジウイク

一 ケムブリジの教授生活

ヘンリ・シジウイク (Henry Sidgwick) は一八三八年五月三十一日を以て英國ヨークシアのスキプトン (Skipton) に生れたり。父はスキプトンの古き小學校の教師たり。其家は代々此地に住せしものなりき。ヘンリ初めより智力早熟の氣味あり。想像力の發達大にして自ら御伽話を案出し又は新遊戯法を工夫したり。郷里の小學校に初等教育を卒へてよりラグビ (Rugby) の中學に入りて其業を承け、普通よりも遙に若年を以てケムブリジ大學のトリニティ高等學校に入りたるが、此所にての彼の學歴は實に著大なるものにして、一八五九年之を卒業するに際しては古典に於ては第一等、數學にても優等の成績を得、同年直ちに同校の評議員フェロシに選ばれ、次で間もなく古典の講師に推されたり。彼は當時最も神學に興味を有したれば、直ちに獨逸に留學して主としてゲッティンゲン大學に有名なる東洋學者エバルトに就いてヘブライ語と亞刺比亞語とを學ぶ。是等の東洋語か、さなくば

希臘羅典の古典か何れかを其専門の學科となさんとも思案しつゝありしかと、やがて自然神學の研究上より哲學を一生の業となさんと決するに至りたり。彼のケムブリジに初めて講師として就任せしは年僅に二十一歳の時なりしが、後十年にして一八六九年に至りて古典の講師よりして轉じて道德哲學の講師となり、一八七五年には進んで同學科及び政治學の助教授(Praelector)となれり。是より先、一八六九年、彼はツリニティ學校の評議員を辭せり。其理由とする所は彼が英國々教の教育を其正文通りに信仰すること能はずとせし點にあり。當時ケムブリジの各カレッジに於ける評議員の地位は英國々教會の信徒にあらずしては之を保つこと能はざる條件の存せしに由りしなり。シジウイクが此斷然たる行爲は大に世人を驚かしたり。何となれば此評議員資格の制限は即ち制限なれども眞に有名無實の者にして之が選に當れる人の信仰状態の如きは深く討査せられざりければなり。是までは英國々教外の人々、即ち他の教會に屬する者や蘇格蘭のプレスビテリアン教會に屬する青年にして、大學の名譽試験に登第するも猶且つ其信仰の異なるの故を以て評議員に推選せられざる場合が随分に多

く、而も是等選に洩れたる異信仰の青年の方が却つて評議員となれる人々よりも宗教上に於て保守的意見を藏するの有様なりければ、シジウイクの辭任を動機として、ケムブリジ大學は斷然一八七一年を以て此無意義の制限資格を撤するに至りたり。

一八八三年、シジウイクは倫理學のナイトブリジ教授(Knightbridge)に任せられ、居ること二年にして、一八八五年、彼は又もヤックニティカレッジの評議員に選ばれたり。此倫理學教授の位地は彼が一九〇〇年五月まで保持せし所にして、その死は一九〇〇年八月にあれば彼の教職に在ること前後實に四十有二年なり。

二 女子教育に關する彼の努力

シジウイクが教育上の事業に附加して特記せざるべからざる一の大事實あり。それは彼の女子教育に對する功勞なり。彼は女子の位地を高めんが爲めに彼等の爲めに高等試験を開設し、且つまた之が準備としては大學の講義をも女子の聽講生に開放せざるべからずと主張し、是に因りて一八六八年詩人アーサー・クロー

(Arthur Clough) の妹アー・ン・シェーン・クロウ嬢を動かしてケムブリッジに一の女生寮宿舎を建設し、又彼等の講義所たるべき一の建物をも設くるに至れり。これ今のニューナム女子大學の起源なり。ニューナム女子大學はガートン女子大學と共に英國に於ける最初の女子大學にして、恰も男子に於けるケムブリッジとオクスフォードの兩大學の如き位地を取り、その教師の如きもニューナムにてはケムブリッジの教授講師専ら教育の事に當れり。されば規則上は女子の大學は未だ許可せられたる譯にあらざるも、事實に於て女子も亦男子と同様大學の試験委員の手にて試験を受くることを得るなり。一八八〇年、ノース・ホール (North Hall) が新にニューナム大學に附加せられたれば、此より先、一八七六年に今の英國在野黨の首領バルフォアの妹なるエレノア・ミルドレッド・バルフォア (Eleanor Mildred Balfour) を娶りたるシジウィグは、妻を携へてニューナム大學に在ること二年、一八九二年、クロイ女史の死するに及び、シジウィグ夫人は女子大學長の後任者に推され、よりて一八八九年よりシジウィグの一家は全く女子大學の中に居を移して、我哲學者は其餘生を女子教育の振興に貢獻し、獨り其關係最も深きニューナム大學の爲めのみ

にあらす一般女子教育の爲めに努力して、女子をして、男子と同様公然男子の大學に入學するを得るに至らしめ、又女子大學の特權を得しむべく力を致したり。英國今日の女子教育の彼を徳とするもの宜なりと云ふべきなり。

三 彼の心象研究及び其著述

シジウィグが功勞の今一つとして見るべきは、彼が心象學會 (Society for Psychological Research) を興せし事績にあり。從來心象研究のこと、心理學者は殆ど之を老人又は小兒の痴話を以て目するに過ぎざりしが、シジウィグは堅く自ら確信する所ありて友人エドモンド・ガーネーやフレデリク・マイヤースと議りて此會を新設し、大に此方面の研究の趣味を一世に鼓吹したり。彼は必ずしも世に謂ふ心象の不可思議なる現象の多くを盲信せしにはあらざるも、兎も角之を學者の眞面目なる研究の對象となるの價值ありと確認したりしなり。彼はまた英國に於ける哲學會 (Metaphysical Society) の創立者の一人なり。

彼は以上述べたる如くに女子教育家としても亦心象研究に於ても大に努力し

たれども、其眞面目は却つて著述の事業に於て顯揚せられたり。左記は彼の著書なり。

- 「倫理學研究法」(Methods of Ethics) (一八七四年初版、一九〇一年第六版)
 「經濟學原論」(The Principles of Political Economy) (一八八三年初版、一九〇一年第三版)
 「倫理學史要」(Outlines of the History of Ethics for English Readers) (一八八六年)
 「政治學精髓」(The Elements of Politics) (一八八九年)
 「實際倫理」(Practical Ethics) (一八九八年)
 「哲學」(Philosophy, Its Scope and Relations) (一九〇二年)
 「グリーン、スペンサー及びマルテノアの倫理學講義」(Lectures on the Ethics of T. H. Green, H. Spencer and J. Martineau) (一九〇二年)
 「歐洲政治制度發達史」(The Development of European Polity) (一九〇三年)
 「論文及び講演集」(Miscellaneous Essays and Addresses) (一九〇四年)
 「カント哲學及び其他の哲學論文集」(Lectures on the Philosophy of Kant, and Other

Philosophical Lectures and Essays) (一九〇五年)

是等の中、前の「倫理學史要」は人類百科全書に寄せたりし倫理學の項を敷衍したるものなり。

四 彼の學風

シジウィックが著作中の傑作として見做すべきは、以上の中の「倫理學研究法」「經濟學原論」及び「政治學精髓」の三つのものにあり。三著は夫れ々々の學科を修むるもの、必讀の書を以て推重せられ、シジウィックが學風は遺憾なく之に披瀝せられをれり。彼の特有の學風は其微細なる考察力、豐富なる思想及び巧なる觀察力にあり。彼は直覺的に一の理論を立し、之を説明すると云ふが如き方法を探らずして、凡て所謂學究的に之を析解し分割し委細の事實を残りなく蒐集して、然る後に一定の系統組織をその上に立すると云ふの細心精緻の方法を好み、たれば其著書は天才的ならずして飽くまでも眞面目なる學者の研究の趣を有し、聽講の學生は従つてその講義の分析的にして綜合的ならず、理論の多岐にして齊一ならず

るに苦むの風ありしも眞面目に學理を究めんとするの學士は彼の智識の偉大にして、其講ずる所に依りて研究上に色々の暗示を與へらるゝことの多き爲め却つて彼を喜びたり。蓋し事實の研究を疎にして徒に想像を以て空漠たる理論を立てんとするは、兎角青年學士の陥り易き弊害なれば、何事も實際的に調査探討したる上にて細密に議論をすると云ふのシジウグが學風は確に學生社會を益する所ありしに相違なかるべし。

眞理を愛するの念及び義務の感情はこれシジウグが一生を通ずる其箴言なりき。彼は平生政治問題に非常の興味を有したりしにも拘らず、凡ての事實に對して彼の如くに黨派的偏頗心の少きはなかりき。さればとて彼は又市民の權利義務を輕んずるにもあらず、此種の權利義務を行はんが爲めには決して顧慮せざりき。或る年彼は瑞西の東端なるダボスと云へる避暑地に在りしに、折から本國にて國會議員選舉の事ありければ、彼は之が爲めに態々瑞西より歸國して己れの選舉權を果したりき。一八八二年乃至一八九九年、彼は即ち創立以來學務委員の一人に列し、又印度事務局評議員會員、地方試験及び講演理事會員並に倫理學

會長を兼ねたり。

五 彼の立脚地

シジウグは其學說に於て哲學の如何なる系統に屬すべきや。答へて云ふ、彼は功利主義派の一人なりと云ふを得べしと。彼は兩ミルに依りて代表せられたる思想を奉せしものなれども、其體系は必ずしもベンサムやジョン・ステュアート・ミルの唱道せしものと同一ならず。功利主義は彼の手に依りて却つて益、醇化せられたるなり。故にオクスフォード派の理想主義者が功利說に加へし駁論は盡く之を彼の說に加へて其可なるを見るにあらず。經濟學上の問題等に就いても亦然り。シジウグは金銀兩貨本位說に關しては大體に於て兩貨本位說を唱ふる人々の議論を是認するものなれども、同時に彼は又其說を今日の通貨の實際狀態に當て嵌めたらんには多くの困難の此に生ずるに至ることを指摘せり。故に彼は理論としては兩本位說を是認するものなれども、之を實地に應用することには賛成せざるものなり。自由貿易の問題に就いても彼の意見は亦之と同じく濫に一方

に偏傾せざりき。彼は種々なる場合又は條件の下に保護貿易の正當にして又利益あることを認められたれども、亦自由貿易の原理の眞理として最も健全なるものなることを信するに於て動かざりき。故に彼の經濟學上に於ける位置は乾燥無味なるリカルド一輩の學說と異ると同時に亦獨逸などに勢力ある所謂講壇社會黨とも異り、其態度の明確ならざるは聊か人をして慊らざらしむるも眞理を眞理として研究し立論せんとすなる其學風は、前にも云へる如く亦彼の特色をなせり。

彼の歐洲政治制度發達史は彼の死後出版せられたるものなるが、こはその名の示すが如くに歐洲に於ける古代より今日までの政治上の制度の發達に關する講究にして、中には著者の見が少からず披瀝せられ居れり。吾人は是に依りて著者が説明の簡明なるを見、又其非常に深遠なる歴史的知識を有するを喜ぶ。確にシジウグが傑作なり。

シジウグが經濟學上や倫理學上の著作は比較的自説を構成するよりも諸の學說を比較研究するを得意としたるが、されど彼が文學上の批評の價値は之の

るが爲めに累せられざりき。彼は元來非常なる讀書家にして、中にも詩と小説とを耽讀し其文學上の鑑賞力は中々に大なりき。

六 其人物

シジウグは其學風の然らしむる所、其本來の性情の餘義なくする所、著作をなすに當りては、決して達筆家にはあらざりき。されど彼の頭腦は人に優れて俊敏なりければ座談家としての彼の談話は事の要領を捕捉するに速にして之を分解すること極めて巧妙なりき。彼は又間々話の中に滑稽をも交へたり。論議の公平にして穩健を失はざりしは其温乎たる人格の表象なりき。此八面麗朗の人格は彼と交友との間に特に能く發揮せられ、友人の相談に與りては同情あり、又好んでケムブリジの學生に其身の上に就いての相談對手となれり。彼、寡慾恬淡、富貴名譽を見ると土芥の如く、其日常の生活に當りては朴純を専とし、劣惡の物慾を排して只管高尚なる精神上の樂を求め、仰ぐべき嚴肅なる道德的生活を以て始終したり。彼は倫理學を修めて眞に之を體現したる眞の學者なりしと云ふべし。

第三 丁抹哲學者

第五章 キールキガールド

一 小傳

丁抹の最も顯著なる思想家にして又特色ある散文家たるジョーレン・アービキールキガールド (Sören Aaby Kierkegaard) は一八一三年五月二日を以て丁抹のコペンハーゲンに生れ、一八五五年十一月十一日を以て此地に歿せり。正直律義なるユートランドの襪屋の第七子なり。彼は生來至つて身體虚弱に精神も病的に、而も知力早熟にして、幼より耶蘇教の嚴格なる隱遁主義に依りて教育せられたり。その母はキールキガールドが父の婢なりければ、母の死せし時、吾人の哲學者は齡已に二十二歳なりしにも拘らず、彼は其殘せる自傳様の小録の中に一言も其母に就いて記す所あるを見ず。キールキガールドが頗る奇矯なる性質を有せしものなること、是を以て其一端を測知すべし。彼はコペンハーゲンの大學にて神學

及び哲學を究め、之を卒業したる後、一八四一年より翌四二年に懸けて獨逸に遊學し、歸國するや、コペンハーゲンに隱居して其思想家及び文人としての一生を終りたり。彼の研究は主として宗教に向けられしが、彼は此際各宗の獨斷的論據を探討するの迂路を選ばずして、直ちに基督教の眞髓に突入して之を闡明したり。彼は神學を修めながら、一度も僧侶となりしことなく、一生の間憂鬱と病苦との下に呻吟し殆ど時人に知られざりしも、其思想は後世に大なる餘響を及ぼしたり。キールキガールドの著書の第一は、現存の某氏に就して (Papers of a Still Living Man) にあり。これハンス・アンデルセン (Hans Andersen) を月旦せんとせし者にして、その世に公にせられしは一八三八年にありき。越えて二年にして彼は「反語法論 (On Irony)」なる論文を提して學士の學位を得たり。これ彼が此後の思想の傾向を總束せしものなり。一九四〇年、彼は一婦人と約婚せしも、間もなく自ら之を破談せり。彼は之に多くの珍しき理由を附し居れり。一八四二年、彼は其最大の著作「手、手」 (Enten-Eller [EITHER-OR]) を完成し、次いで、人生の階段 (Stadier paa Livets Vej) を著せり。何れも基督教の立脚地に反對して美的及び倫理的立脚地を披瀝せるものな

り前者の上梓せられたるは一八四三年にあり。後者は又一八四五年を以て刊行せられたり。是等の書の諷刺人を刺すが如きは忽ちにして大評判となりて彼は多くの追従者を得たり。彼は爾來種々の匿名の下に己れの宗教上の立脚地を明かならしむる所以の諸著を公にしたり。左の如し。

「恐怖戰慄」(Frygt og Bøven)(一八四三年)

「操返し」(Gjentagelsen)(一八四三年)

「憂慮の觀念」(Begyret Angst)(一八四四年)

「非科學的論文」(Afslutende Videnskabelig Efterskrift)(一八四六年)

「基督教熟練論」(Indøvelse i Christendom)(一八五〇年)

「己れの試み」(Til Selvprøvelse)(一八五一年)

一八四九年より一八五四年までの彼は著作者としては沈黙なりしも、一八五四年に至りて彼は一書を著して、マルテンセン僧正(Bishop Martensen)を駁撃し、後死に至るまで専ら國教の神學其もの及び其宗義に反對したりしが、彼の健康は斯かる間に次第に險惡になり來りたれば、一八五五年十月彼は其住家をコペンハ

ーゲンの一大病院に定めて、此所にて歿したり。享年四十有二。彼の傳は丁抹の批評家ゲオルグ・ブランデス一八七七年に之を編作せり。大思想家の面目最も明かに其中に描出せらる。キールキガールドが生前に公にせし著作の數約三十あれども、彼は又死するに及びて、之と略齊しき數の手録を殘し居れり。是等の遺稿の解析に就いては、ブランデスのキールキガールド傳最も完備せり。

二 彼の哲學

近時イブセンを研究せんとするもの漸く多し。而もイブセンを知らんと欲せば、彼が人生觀の由來する所を明かにせざるべからず。吾人は此に至りて此思潮のキールキガールドの哲學と密接の關連の存するを見る。キールキガールドはニイチエの如くに哲學者たると共に詩人たりき。彼の思索の特色は、宇宙人生の事實をば其微を剖き細を解析して所謂學問的に一家の哲學系統を組み立て行くこと云ふにあらすして、寧ろ其優れたる直覺力に依りて躬親ら此活きたる大問題を洞破せんとするにありき。何事も大悟して底に徹すること彼の第一の希望なり

第一に彼が根本思想の一般哲學者と異りし所を擧げんに、一般に學者は世界觀人生觀に於て統一せる一大理法の存在を認め、如何に世には變あり、異あり、多ありとも、是等は雜然たる無關係の關係に止まるものにあらずして、其間に必ずや大なる法則の存するあるを説くに、キールキガールドは之に反對して變化や多様や不調和こそ、これ宇宙人生の實相なれとし、大なる宇宙や偉なる人生の事豈に夫れ區々たる調和を許さんや、矛盾は世の眞なりと云へり。彼は此根本思想よりして進化の思想にも反對し、宇宙間の事物は悉く關連を有し因果律や歴史的連續の法則に依りて繋ぎ合されたる者にして、無縁獨立の存在てふ者なしと云ふ議論を破し、實際世間には全く關係なき現象事實が相並んで存立することを指摘し、以て彼岸と此岸や靈界と俗界との之あるを示せり。吾人は此に至りて此奇怪なる思想家の宗教觀に到達す。彼は吾人凡夫の凡識凡知は以て此平凡界の相對現象を認識し得るに過ぎずして、如何にしても絶對の神とは交渉し得べき

にあらざるを説き、而も亦此神に對する知識のみが眞の所謂認識なりと謂ひて、多くの哲學者の神を以て認識し得べき對象なりとするものに大反對を試みたり。神の絶對界と人間の相對界とにして全然沒交渉なりとせば、吾人は如何にして客觀的に神の何ものたるを認識し得べきか。キールキガールドは此點に於て極めて大膽にして飽くまで明瞭なる答案を與へて曰く、無上の大法宗教上の眞理は客觀的方面は措いて之を問はず、主觀的に吾人が心の底よりしてこれ眞の人生なりと大悟するに在りて存す、故に眞理は主觀的なると共に主觀性はこれ眞理なりと。彼は人生に三つの階段ありと説く。そは美的生活道德的生活及び宗教的生活是なり。美的生活は快樂主義の生活なり。而して戀愛は此生活の中心たり。されど美的生活は人生の第一義にあらずして、此上には尙道德的生活なるものあり。彼の所謂道德とは、我人格の向上發展を企圖することにより、道德に於ては吾人は他人を顧慮するを須ひず、一に我の完成に努むべきのみ。此點に於て國民を云々し、人類と云ひ社會と云ふが如きものを目標とするは、甚しき誤なり。彼の此極端なる個人主義はニイチェやイブセンの個人主義の先驅なり。されどキール

ルキガールドの人生觀の極致は之に盡くるにあらず。彼は尙此上に幽玄なる宗教的生活なる者の存せるを説く。吾人は已に彼の二元論に就いて略説し、彼が世界に絶對界と相對界との相對立しつゝあることを唱ふる旨を述べたり。彼曰く、「此神の絶對絶妙の大世界は吾人の俗的相對界とは沒交渉なるものなり。されば人生の極致を窮め、此有限の吾人を以て無限の絶對界の中に生活するに至らんとせば、吾人は非常なる勇猛心を以て此兩界の間に横はるなる溝隙を跳越せざるべからず。宗教的生活とは現世を解脱するにあり。されば絶對界に入るとは世の常の人の思意せるが如くに、吾人の精神の慰を得るに至るものにはあらずして、却つて吾人をして一種の悲感を催さしむるものなり」と。キールキガールドの人生觀は此に至りて現代文明を貶斥す。彼は斯くの如き冷にして幽靜なる虚無的絶對世界を理想し、之に入らんことを以て人生の第一義となすものなれば、其現代基督教を見て其甚しく俗化したるを罵倒せし所以のもの、蓋し止むを得ざるなり。

第四 獨逸哲學者

第六章 ショーペンハウエル

一 近世文明とショーペンハウエル

近世期は史上ルネッサンスと呼ばれし第十五世紀を中心とせる古希臘文化の復興を以て始りぬ。抑希臘文明の精神は一切の超人間、超自然を排して偏に現實の底を極め、其處に精化せられたる世間的、人間的、自然的悅樂を求むるに在りき。近世文明は斯かる希臘精神の興起によりて、其幕を揚げぬ。全歐の空に響き渡れるルネッサンスの曉鐘に、法王宮の磐石の扇を叩いて、只管天の祝福に慄れし中世は終を告げて、若き近世の子は長夜の夢より醒めたる人の如くに、己が現實に覺め來れり。時代精神の大潮は凡て超自然的の權威傳習の壓迫に抗して、偏に現實界に於て個人を解放するの一路に向へり。凡そ醒めたるもの、態度は自から理的なり。理知の燈を揚げて一切の事象に向ふが常なり。近世文明が凡ゆる方面に

於て理知至上の色彩を帯び、其數百年に亙る長き間、様々の思想に導かれ、國所時代に從ひて文運に多少波瀾起伏ありきと雖、而も其全體に亙るの精神が理知に頼りて個人を解放し、知識に依りて一切を解明し、開拓し、克服せんとするに在りしは争ふべからざる事實なり。而して斯かるルネッサンスが齎らしたる近世精神は、文學哲學の方面に於ては十七世紀の所謂啓蒙時代に至りて爛熟し、更に十九世紀初頭の獨逸理想派哲學によりて其高調の絶頂に達せり。當時一生を風靡したるヘーゲル哲學の如きは、萬有の運行、歴史の發展より宇宙人生に至るまで悉く人間理知の圏内に收め、物として不可解のものなく、事として不明のものなきが如く、宇宙人生を秩序あり調和ある一大體系となし、絶對原理の高峰に立ちて一切を看下し、以て個人の理智の勝利を誇るに至れり。更に他の一面に於て、斯かる理知本位の近世精神の自然界開拓に向ひ、此處に特殊の發達を遂げたるものを近世自然科學なりとす。自然科學は十九世紀に入るに及んで急速の進歩を遂げ、其成果によりて燦然たる物質的文明を導き出せり。斯くの如くにして近世精神は中世が教へたる一切の超自然超人間を排し、凡ゆる神祕奇怪を照破して、茲

に勝利の成果を擧げたるが如し。

然れども斯かる理知の勝利と其築き上げたる自然的、世間的、物質的文明とは、果して其曾つて豫期せられたるが如き幸福を人生に齎らせるか。此勝利によつて其初め個人理知の力を頼んで立ちし時、近世人が豫想せし個人の解放は成就せられ、其自由は保證せらるゝに至りしか。己が力を頼み、獨り翼を張りて大空に翺け出でし荒鷲は、無限の空を睨みし時、己が身の今更に重きを感じ、哀愁の眼を己が脚下に向けざるを得ざるに至れり。個人の自由解放を叫び、而も偏に己が理知にのみ頼りて文明開拓の途に上りし近世人は、勝利の高峰に立ちて更に行手を望みし時、茲に初めて大なる矛盾の其前に横はり、身は己が築き上げし文明の高塔に我と我を囚へつゝあるに驚かさるゝに至れり。勝利の悲哀は此處にもあり。見よ、文明は益々進みて、生活の苦痛は益々加はり來れるにあらずや。近世人が早計にも自然を克服したる成果なりと誇るその自然科學の結論は、人間も遂に自然的生物の人類に過ぎずといふにあらずや。人類の勞力を省き、其幸福を増進するが爲めに企てられたる諸種の發明工夫は、却つて多數の食を奪うて少數者の貪慾

の犠牲となすの所縁となれるにあらすや。これ實に人間が自然を克服せんとし、却つて自然を大にし、遂に其機械的規範の下に囚はるゝに至りしことを示すものにあらすや。

抑自由とは何ぞ、個人がその主観最深の要求のまゝに行動することならずや。所謂人間一切の努力は其自覺せると否とに拘らず、我の全人格が矛盾なき態度を以て發動するにあらざるか、更に換言すれば、人が其自我の本體たる情意の最深の要求の儘に行動し行くことに、人間究竟の目的はあらざるか。此一義を外にして一切の努力は空なり。此一義を措きて自由の意義はなきなり。知識も要するに斯かる主観情意の要求の實現の手段としてののみ人間の自由を進むるに與れるならずや。我を阻み、我の發展を抑ふる傳來の教義權威習慣より己れを解放したりとも、此一義の要求、此人生究竟の目的を離れて、徒に知識の爲めに知識を追ふが如きは畢竟知識てふ偶像を築いて主観要求の發露を掩ひ、知らず識らずの中に己れ自らを縛るの盡力のみ。主観の深所に内省することを忘れ、本來手段たり第二義たるべき知識塔を目がけて走れる近世人が、自由を求めて束縛を得、幸福

を豫期して苦痛を見るの矛盾に陥れるは怪むに足らざるなり。斯かる矛盾せる文明にありて、自然的生存の危急は益々人間の精神生活を小きものとなし、物質文明の光輝は人間の本能的欲求を刺戟して、意志の統一的自發の發動は殆ど影もなきに至れり。されど人間は到底斯かる機械的生活に満足すべきものにあらず。偏に智識を求むるの精神すらも、纏て幸福と自由とを求むる深き情意の要求に根ざせるものならざらんや。主観の獨立情意の自發的要求は如何にするも之を殺す能はざるなり。是に於てか誤られたる主観の悶は生の呪咀となり、生存の苦痛を訴ふるの聲となり、懷疑否定の思想の種々なる相を探りて現れ來り、一道の暗流は實に十九世紀後半より現代にかけて所謂近代の一期に漲るに至れり。誠に最近の思想界は斯かる生存の矛盾不安に達着して底知れぬ疑惑憂愁に陥り、深く己が内生活に反省し、生存の意義を求めて暗中に摸索しつゝあるなり。吾等茲に傳せんとするシューペンハウエルは、かの理想派哲學者が斯かる遺溺なき現實の事實に接觸せず、徒に思索空想の影を追うて纏て慘憺たる結果を現すべき時代の矛盾に氣付かず、偏に人生を樂觀せし時に出で、單騎理想派哲學の壘に迫

り、思索の空想を罵り、現實の苦痛を高調し、早くも時代の缺陷を看破し、人間の生活は本來情意に根ざせるもの、知識も元來情意に仕へんが爲めに生れ出でたるものなることを示し、以て時代の當に向ふべき所を暗示したり。彼は生の矛盾より來る苦痛を餘に痛切に感じたるが爲め、時代が知識を過重して吾人の本質たる情意の自覺的要求を省みざりし不覺を指摘しながらも、更に進んで情意の吾人の本質を實在にし、知識は此情意に仕ふる爲めに生れたる者なればこそ情意最深の要求を本意とし、此處に知識を取り入れて統一ある自我の實現を進むべけれど、否極的態度を教ふる能はず、意志は偏に盲動するのみ、知識は意志に仕ふる爲めに生れたるものなれど、今は唯意志の盲動を益増長せしむるに過ぎず、意志の盲動これ實に人生の争鬭苦痛の因なり、眞の幸福は斯かる意志を否定し、生きんとすの意欲を斷絶するの一路あるのみと斷じて、厭世、隱遁、禁慾の消極的生活を説けり。此點に於て彼は近代の生活に生々たる新方面を指示したるの勇者にあらざるも、而も其所謂意志本位、詳しくは情意本位の思想は近代實驗心理學の主情意説の先驅をなせるものにして、之に依りて彼は近代思想の當に反省考

察すべき人生の一義積極的生活の出發すべき自我の本質を教へたる時代の先覺として、思想史上に不朽の地位を保つべきなり。

二 略 傳

厭世哲學者アルツォール・シーペンハウエル(Arthur Schopenhauer)は一七八八年二月二十二日獨逸の自由市ダンチヒ(Dantzig)に生る。父は富裕なる商人にして、故市の自由の爲めに盡瘁せる志士の一人なりき。一七九三年、市が普魯西王國に併せらるゝに及び、一家を擧げてハムブルグに移れり。母はヨハンナ(Johanna)とて文藻に富める婦人なりき。

少年アルツォールも父の業を繼ぎ、商人として教育を受けん爲めに九歳にして佛國に送られ、父の取引先の某商家に寄寓すること二年、此間能く佛語に熟達せり。ハムブルグに歸るや、特に商家の子弟の爲めに設けられたる一私立學校に入れり。思想家としての本能は早くより若きアルツォールをして商業に興味を覺えしめず、學問に對して醫し難き渴望を感せしめたり。されど彼の父は其子をして學

窓の人たらしむるを好まず、商用の爲め諸國を周遊する時は必ず彼を伴ひたり。されば普通の青年が學窓の狭き平和なる生活の中に讀書に耽れる十五歳より十七歳に至るまで、アルツールは父に従ひて諸國を遍歴し、具に人情を察し風俗を知り、其多感の資性に深き印象を残しつゝありしなり。斯かる學窓に遠かりたる不幸なる青年時代は、シューペンハウエルの思想發展の上に最も大なる素地を作りしものにして、彼の哲學の根本的素材たる實人生の觀察は多く此時代に得來りたるものゝ如し。十七歳にして彼は商業見習として一大商店に勤めしが、此店に於ける生活は彼をして益々商業を嫌厭せしむるに至れり。此處に勤むること數月、偶父の死に會し、彼の母は一家を携へてかの有名なる詩人ゲーテ等によつて當時獨逸文學の中心となされたるワイマールに移住せり。父の死はシューペンハウエルの生涯の一發展の機となれり。即ち文藻ある思想に對して同情ある彼の母は、其子が太く商業を嫌へるを見、長く其意志に反せる道に止まらしむるの益なきを見、遂に學問研究に身を委ぬることを許す旨を其子に書き送れり。シューペンハウエルの喜び譬ふに物なく、母の手紙を讀んで泣き、直ちに結束して家に

歸り、ゴータ及びワイマールに於て古典語の研究を始めたり。彼は非常の渴望と勉強とを以て約二箇年にして古典語の研究を終れり。以て彼が如何に學に熱心なりしかを知るべきなり。

彼の悲觀的厭世的傾向は已に其少年時代に萌せり。其父に従うて諸國を遍歴せる頃の日記並に當時母に寄せたる彼の手紙は、諸國の名所古蹟都市等を訪うて心に起り來りし人生の無常生活の厭ふべきことを語るものにして、惻々心を動かす悲しき感想を以て充されたり。彼自らも後年當時の感慨を回顧して、余は當時正式の學校教育も受けざる青年にてありながら、かの老病死の三苦を見て人生の無常を悟りし佛陀の如くに人生の悲哀を感じたりと言へり。

彼は古典語研究の後、ゲッティンゲン大學に進み、初め醫科に入りしが、六箇月の後更に哲學科に轉じ、此處に學ぶこと二年、更に伯林大學に轉じて哲學、自然科學の研究に専心せり。ゲッティンゲン大學にありて後年彼の思想發展の上に多大の影響を與へしは、彼がエルスト・シュルテの勸示によりてなせしカント及びプラトンの研究なり。伯林に移りてよりは、専心カント研究を續けたり。彼が如何に熱心にカン

トを研究せしかは、之が爲めに作りし浩卷の研究録によりて窺ふことを得、彼の伯林に赴きしは、當時眞哲學者大思想家として盛名隆々たりしフイテの講筵に參せん爲めに、多大の期待と希望とを抱いて出發したりき。されどフイテの如き剛健なる哲學者、健闘的思想家は、厭世的消極的なる青年哲學者に満足を與ふべくもあらざりき。期待は失望となり、失望は憤怒となれり。彼が如何に嘲笑的態度を保持してフイテの講義に出席せしかは、其講義筆記の端書きの文句にても案せらる。彼は哲學者としてはカント及びプラトリーの外、ロクを稍注意して研究せし外、其他の學者には餘り注意せざりしが如し。彼の最も潜心せしは自然科学の研究なりき。

シューベンハウエルの生涯に在りて最も不幸なる出來事は、彼と其母との不和なり。母子の性格は根本的に異れり。シューベンハウエルは猜疑憂鬱の消極的の性向を有し、常に白眼を以て世に對せしに反し、母ヨハンナは快活にして交遊華奢の生活を喜び、世と共に調和し推移する婦人なりければ、特別の原因なくとも二人が共に在りて樂しき生活を送らんことは、到底望むべくもあらざりしなり。され

ばシューベンハウエルが早くゴータのギムナジウムにて古典語の研究をなせし頃ワイマールに轉學せんとするや、彼の母は彼の來るは彼女の平和の生活を攪亂するものなりとして、痛く之に反對せり。久しく離れたりし母子が相見んとするに當りて、母が子に對する態度已に斯くの如し。以て彼等の間の如何に冷かなりしかを察知すべし。シューベンハウエルが書の初めて世に出でし時、先づ第一に非難の聲を揚げし者は彼の母なりき。彼女に取りては彼が人生に對する全體の否定的悲觀的態度、其者が全然同情の價すらなき者なりしなり。兩者の關係斯かる有様なりしかば、衝突は遂に母の生活に對するシューベンハウエルの非難によりて生まれり。彼は彼女が華奢なる生活をなして父の遺産を少からず消耗したるを難じ、且つ彼女が父の死後、一八一三年來己れよりも十四歳も年下なるフリドリヒ・フォン・グステンベルグとふ者と同棲せるを責め、これ亡夫の名譽を汚すものなりとなし、速に此青年を追ふべしと迫れり。ヨハンナ夫人は大に怒り、遂に其子と絶交し、爾來彼女の死に至るまで二十四年、此不幸なる母子は再び相見ざりき。尤も後年に至りては兩者の感情多少和らぎ、文通は互になし居たりき。シュー

ベンハウエルが口を極めて罵倒せしは、蓋し此悲惨なる家庭の波瀾に於ける母に對する反感に起因せしものなりといふ。

シーベンハウエルの思想は早くより熟せり。彼の認識論の根柢をなせる認識理由律の四つの根元の論文の如きは、既に伯林在學中に起稿せるものにして、此論文後彼の思想は多少の動搖を経て遠からず成熟し、一八一四年彼の哲學體系は全く出來上れり。即ち此頃は其首著意志及び表象としての世界の稿を起せり。此書は一八一八年五月に至りて脱稿せり。即ち彼の哲學は其三十歳前に已に固まりしなり。シーベンハウエルがワイマールに在りて詩聖ゲーテ等と交遊し多大の感化を受けたるは、此首著の起稿頃にして、彼がゲーテと共に色彩の研究をなし、は有名なる事實として傳へらる。首著世に出でしより後、彼の思想は大體に於て變化なかりき。後年彼自ら記して曰く、ドレスデンにては一八一四年より一八一八年までに書き上げたる首著は、朝霧を破りて現れし景色の如くに余が全哲學思想の醱酵圓熟し來れる過程を示せるものにして、余が哲學體系の凡ての規範は實に一八一四年、即ち余が二十七歳の時早く既に出來上り居たるなりと。

此首著を公にして以後の彼の事業は、此書の根本思想を諸方面に應用し徹底せしめて、其眞理を確證するに在りき。

彼の志は早くより勿論大學の講座にありき。一八一九年、奔走の結果遂に伯林大學の私講師となり、其年の夏半期、毎週六時間、一般哲學に就きて講義せり。此講筵は聽講者を得る能はずして全く失敗に終れり。これ實に彼が大學の講堂に於ける最初にして又最終の講演なりき。爾來彼は終生再び大學の講座に現るゝことなかりしも、猶私講師として大學との關係を絶たず、多年講座を中止したる後、一八二六年より翌年に互る冬半期、再び講義を開始する旨を告示しながら、更に開講することなく、一八三一年より翌年に互る冬半期まで頑として此公告を撤回せざりしのみならず、殊に講義の時間をかのカント後の大哲として當時盛名隆隆たりしヘーゲルの講義時間と同一時刻を選びたり。蓋しシーベンハウエルは之によりてヘーゲルの講義時間と同一時刻を選びたり。蓋しシーベンハウエルは之によりてヘーゲルに對する公然の挑戦を意味せしなり。彼の哲學は其明快にして研究の至れる點に於ても、將た其獨創的にして知見の徹底せる點に於て

も、優に第一流の哲學として認めらるべかりしなり。而も其講義の失敗に終りしは、一は彼が當時全獨逸の學界を風靡せしめしヘーゲルの講義時間を選びしが爲め聽衆を集むること能はざりしと、一は彼がヘーゲルを初め當時盛名ありし諸學者を一々口を極めて罵倒せし主角ある暴慢の態度が、少からず學生の反應嫌厭を買ひしとに原因せしもの、如し。最初の講義の不成功によりて、シューペンハウエルの大學に地位と名望とを得るの望は全く絶えたり。之より彼の反世的態度は益々其極端に走り、且つ聲を大にし口を極めて大學の教授連を漫罵するに至れり。シューペンハウエルの首著意志及び表象としての世界に對する學界の反應は極めて弱く、時人は此意味ある著書に對して何等の注意を向けざりき。由來獨逸の學問は大學の學問なり。此點に於て英國の學問と全く異れり。獨逸にありては如何に有爲の學者と雖、一度大學教授の椅子に就くにあらずんば、學界の顧眄を受くる能はざるなり。シューペンハウエルの如き大學の講座に失敗せし失意の學者が、容易に學界の注意を惹く能はざりしは敢て怪むに足らざるなり。學界の斯かる冷遇にも拘らず、彼は自己の學說に對して強き自信を有せり。彼は彼の

學の早晩の勝利を信じ、種々の方面に其思想を推し擴めて研究を進め、研究の結果をば一々美しき寫本となしたり。此寫本の初めの八卷は彼が其哲學を經驗科學により實證せるものにして、一八三六年、自然界に於ける意志てふ表題にて上梓せり。此書に對しても社會の反應は依然として薄かりき。蓋し當時獨逸の學界はヘーゲル哲學の分争反動の始まりたる時にして、かの有名なるストラウスの「基督傳及びホイエルバッハの宗教哲學」出で、一世を驚かし、學界の注意は全く此方面に傾倒され居たりしかば、全く當時の學界一般の問題と没交渉なる方面を取扱へるシューペンハウエルの書の顧られざりしは、又已むを得ざりしなり。斯かる世間の沈黙にも拘らず、彼は益々其研究を續けたり。偶、彼が思想を發表すべき好機會到來せり。即ち當時ドロンタイムの學會は、意思自由に就いての論題にて、コペンハーゲンの學會は、道德の基礎に就いての論題にて、各懸賞論文を求めき。シューペンハウエルは直ちに論文を作製して之に應じ、意志自由に就いての論文に當選せり。一八四〇年、彼は此二論文を、倫理の二根本問題なる單行本として出版したり。

彼は久しく其青年時代の首著意志及び表象としての世界の補足布疋を目論見たりしが、一八四四年其第二版と共に同一表題にて第二卷としての補足の新著を公にせり。

一八四〇年頃よりしてヘーゲル哲學に對する失望は漸時高まり來り、學界の注意は漸く宗教哲學より轉じて倫理問題に傾き來るに至り、ショーペンハウエルの著書は漸次に世の注意を惹くに至れり。一八五一年彼の最後の著書なる "Parerga und Paralipomena" 出でぬ。この書は一部は狹義の哲學の對象を論じたるもの、一部は文明、人生の種々なる實際問題を論じたるものなり。偶一八四八年、ヘーゲル哲學全く瓦解し、其空想的樂天的思想に對する反動一時に起り、時人は自己生活の肅然たる事實に覺醒し來り、哲學に於て再びカントに歸らんとするの時なりければ、強き實人生の經驗に立脚し、且つ特に聲を大にしてカントを稱へ、カントを繼承すと聲言し、力強き比類なき美しき文章にて書かれたるショーペンハウエルの書は學界の全注意を惹くに至り、彼は多年の失望より一躍して盛名の中心となれり。

一八三一年、ショーペンハウエルはマイン河畔のフランクフルトに居をトし、孤獨隱遁的生活を送り來りしが、世間の彼に對する稱讚の喧々囂々たるに及び、彼は喜んで盛名を迎へ、愉快なる生活の中に彼が多年苦み來りし本能的慾望の苛責も衰へ、平和なる老人として一八六〇年九月二十一日、七十二歳の高齡を以て逝けり。彼竟に娶らず。

三 ショーペンハウエルの學說

一 認識論 大哲カント一度現象と眞實在の兩界を峻別し、吾人の知識は現象界の認識に限らるゝものにして、現象の背後に横はる眞實在の界は道德意志の掲ぐる信仰のみ能く窺ひ得るものにして、知識の與る境にあらずと斷せしより、信仰と知識乃至道德と科學とは超ゆべからざる溝渠に隔てられたる全然互に沒交渉の分内のことゝなれり。これ到底吾人の意識生活の事實の承認する能はざる所なり。誠にカントの所謂眞實界が果して知識の達する能はざる境なりとせば、斯かる境地の存在せることを立言することすら能はざるべきにあらずや。

已に眞實界の存在することを立言する以上、之を知識の分内より追ふは矛盾なり。是に於て知識と信仰との界乃至科學と道德との界、更に換言すれば、カントの所謂現象と眞實在の界とは更に高き原理によりて相結ばれざるべからずとは、カント後の所謂理想派哲學の出發點なり。其代表者フヒテ、シェリング、ヘーゲル等、各皆唯心的乃至理性的絶對實在の一元を立て、以てカントがなしたる現象と眞實在との區別を擲てり。されど彼等の哲學は餘りに思索的にして、宇宙人生を整理的たる體系となし、人生を以て矛盾も背理もなき相に示せる餘りに空想的樂天的にして、人生の事實を去る遠かりき。ショーペンハウエルは即ち是等理想派哲學に反抗し、深く實生活を洞見し、カントがなしたる現象と眞實在との區別の上に立脚し、カントの眞の相續人なりと呼號して、更に自家獨特の學說を進めたり。ショーペンハウエル以爲らく、吾人に直接に與へらるゝものは感覺のみなり。客觀世界即ち外界は所詮我表象なり、觀念なり、感覺が我知力のアプリアリの形式即ち時空因果の形式によりて、配列せられて初めて生せるものなり。而も吾人が直觀によりて直ちに世界が我外にありと思ふは、已に感覺そのものに悟性が即し

居て、時空上之を我以外の原因に關係せしめて示すが爲めなり。斯かる感覺に即せる悟性の作用は無意識的に行はるゝものにして、決して吾人の意識に上り來るものにあらず。カントは直觀の形式を單に時空のみに限れど因果の形式が已に直觀に即せるにあらずんば、如何にして初めより外界てお觀念は成立し得るぞ。或は言はん、吾人が感覺觀念を客觀的に我より押し離して見るは、經驗乃至聯想作用によりて爾か思ふに至りしにはあらざるかと。然れども思へ、經驗なるものは感覺を我が斯かるアプリアリの直觀の形式に纏むる所に成立つものにあらずや。所詮經驗は斯かる直觀の形式に先つて存するものにあらずして、斯かる直觀作用こそ經驗を可能ならしむるものなれ。而して斯かる直觀作用たる知力は胃が消化し肝臓が胆汁を分泌するが如く、腦の必至的所産なり。さて世界は吾人の表象觀念なりとせば、それは假現の外何等の意味を有せざる空、中樓閣の如きものなるか。否、これ必至的經驗的存在なり。吾人の經驗は如上の知力の制約によつてのみ初めて可能なるなり。經驗界は唯假現にあらず無意味の空虚にあらず。こはこれ自身にて因果の法則に従ひて發動回轉し行く必至の物

質界なり。而も斯かる物質世界は如實の眞實在にはあらず、認識する我主觀に對して觀念としての存在たるなり。

斯く一方に於て知力は腦の所産なり。換言すれば觀念は物質の所産なりと云ひながら、更に又物質は觀念としての存在なりと云はゞ、循環論法に陥れるが如きも、時空因果の形式は眞實在に關して制約力を有せるものにあらずして、知識は唯現象界の立言に限らるゝものなることを思はゞ、これは實に止むを得ざるなり。觀念として現象界に於て相連り、認識知力の律に制約せられて吾人に現るゝもの、眞實在は抑、何ぞやと問はゞ、認識律は之に對して何等の解答を與ふる事能はざるなり。現象圏外に出づる能はざる知識の立言に、斯かる困難は到底避く能はざるなりと、斯かる辯解あるに拘らず、ショーペンハウエルの數多き矛盾の中、此點ほと非難多き矛盾はあらず。彼は大膽に吾人の身體も吾人の表象なりと言ひながら、直ちに知力觀念は身體の一部たる腦髓の所産なりと説けるなり。要するにショーペンハウエルに従へば、知力に制約せらるゝ觀念としての物質界は實在の外側の一面なり。然らば斯く知力の法則に制約せられて現象の列とし

て吾人に現るゝもの、眞實在は如何にして知らるゝぞ。以爲らく、吾人にして單に知力を有し、觀念するのみならば、これは決して知らるべからざるものなり。外的なる知識經驗に内的直觀の經驗を結合せしめて、初めて此問題の解決は可能たるなり。

吾人に外的知識的に我身體として表象せらるゝものは、内的には直ちに意志として直觀さる。意志こそは我本質我實在なれ。我は意志なり。然らば世界宇宙の本質實在は何ぞ。ショーペンハウエルは一切の現象が同一本質實在を有することを信せり。以爲らく、彼此甲乙の區別は空間時間の上の事なり。是等知力形式の制約なき所には、一切は一に歸すべきなり。世界の本質實在は實に一にして一切なり。我本質にして意志ならば、世界の本質も亦意志ならざるべからずと。ショーペンハウエルは流石に此内的直觀を全く知力作用と全然別様のものとなす能はざりき。若し内的直觀にして知力の限界を全然超ゆる能はざるものなれば、之に依つて直觀せられたる世界の本質實在なる意志も亦多少知力の形式に制約せらるゝにあらずるか。換言すれば意志なるものは如實の眞實在にあらずして、一種

の現實にはあらざるか。これ實に當然起るべき疑問なり。ショーペンハウエルも意志を以て如實の眞實在なりと直下に斷ずる能はざりき。以爲らく、吾人は如何にして吾人の意志と名づくるものが、吾人が深奥の主觀、吾人の眞實在に最も近く、殆ど宛らの眞實在を示せる根本現象(Urphänomen)と考へざるを得ず。吾人は是に依りて初めて一切の現象を説明し得るなりと、斯く意志に對して制約を置くことによりて、ショーペンハウエルは彼が如實の眞實在の何なるかを徹底的に明かにする能はざることと告白せるものと云ふべし。即ち彼は吾人主觀の最も深奥なるもの、吾人自身の眞實自我の本質に迫れるものを以て、世界の眞實在に代ふるの根本的假定を脱する能はざりき。實に此假定を追究し行く事によりて彼の認識論は更に新なる方面に向つて發展すべき餘地を有す。此點も彼の認識論にありて重大なる難點なり。何となれば謂ふ所の意志なるものは倫理上に謂ふ知識を取り入れ、動機を考量選擇する意味の意志にあらずして、衝動的欲求乃至一切の感情をも含める一向に自己を主張せんとする非理性的盲目的の意慾、即ち所謂生活意志(Wille zum Leben)を指せるなるが故に、若し意志にして果して眞實

在なりせば、之が知力の制約を受けざる盲目的のものなりとの彼の主張は是認せらるゝも、之に反して如何なる意味に於てか現象なりとせば、之は多少知力の制約を受くべきものにして、盲目的のものなりとは斷すべからざるなり。

ショーペンハウエルは其內的直觀なるものを哲學者藝術家に特有なるものとなし、更に天才的直觀とも名づけ、之によりて哲學藝術の天才は自己の本質が意志なることを直觀すると同時に、世界の本質實在の亦意志なることを直觀するなりと説けり。此點に於て彼の思想は尙彼が攻撃して止まざりし當時の理想派哲學のローマンティックの色彩を帯べるを見るべし。さて前に述べたる如く、彼に従へば、知識と意志とは全く別種のものとなれり。意志は全然盲目的にして、何等の制約を受けざるも、知識は主なる所、時空、因果の形式に制せられて動くものなり。前者は永遠不變のもの、後者は起因あり、發展あり、變化あるものなり。否寧ろ意志は知識を使役するものなり。意志は知らず識らずの間に吾人の觀念を導くものにして、知識は初めより意志の手段に過ぎず。生活意志を満足せしめんには、人は其他物他者に對する關係を辨へざるべからず。吾人の知識は斯かる關係の總和な

り。ショーペンハウエルが意志本位を高調し、知識も畢竟意志の手段にして、之に操らるゝものとなせるは、近代の實驗心理學の主情意識の前驅をなし、之より出て來る哲學思想の新なる傾向に對して豫想的暗示を與へたるものと云ふべく、彼の思想史上に於ける功績は此點に在り。

二 自然哲學實在論 認識論に於て已に論じたるが如く、吾人の外的經驗に肉體として現るゝものは、吾人の内的經驗即ち自意識に對しては意志として現る。これ自明の事實なり。此身體と意志との間には何等因果的關係あるなし。知力に對して肉體として與へらるゝものと、内的直觀に對して意志として與へらるるものとは、全く同一物なり。要するに肉體と意志とは一物を兩面より觀たるに過ぎず。故に筋肉の活動は意志活動の結果にあらで、意志の感官的表現なり。吾人の身體も血液も一切吾人の意志の表現にして、吾人の肉體の各部分諸機官は種種なる意志衝動の相に應合するものなり。

斯く論じ來りてショーペンハウエルは直ちに類推によりて直下に論を進めて世界の本質も亦意志なりと斷せり。以爲らく、吾人が自然力として認むるものは、吾

人の身體に現るゝ感官的活動と同じく、意志の現象に過ぎず。物質其ものは意志表現なり。自然力と吾人の肉體の活動とは唯程度の差を以て現象界に限らるゝものにして、其本質に至りては一にして一切なる盲目なる世界意志なり。自然界に於て生物の活動發育より、磁鐵の相引き、水の堅岩を穿つに至るまで、此世界意志の種々なる階級に於ける表現と見てこそ、初めて其由來を解することを得るなれ。

斯くの如き世界の本質なる意志は、最下より最上に至るまで整然たる階段をなしつつ、定まりたる永恒の相を取りて發展し行くものなり。斯くの如くにして意志は階段より階段へと上りて自己を實現し現象とならんとするものなりと。ショーペンハウエルは此永恒の定相原型をプラトーンに倣ひてイデーと名づけたり。以爲らく、イデーは無機界にありては自然、有機界にありては動植物の種屬、人類にありては個人として顯現す。高等なるイデーは常に劣等なるイデーと争闘して之を征服し、最高の現象となりて現れんとするものなりと。ショーペンハウエルは意思が歴史的に新なる種相を作ること否定し、イデーは恒久の相として定

まれる起原なりとせり。此點に於て彼の自然論中には進化論的思想はあるも、
ダーウィン等の夫れとは異なるものなるを見るべし。

動物の相は植物の相を食み、植物の相は更に無機物の相を食み、斯くて至る所に
争闘あり、悲痛あるなり。此意志の自己を實現して現象とならんとする奮闘に際
して、意識が漸次に現れ來り、愈進むにつれて茲に突如として觀念としての世界
は現れ來るなり。即ち動物に至りては意志は斯く生れ來れる知識を燈火として
存在の争闘を導き行くなり。吾人が此争闘と悲痛に満てる生活をも善しとして
之を保存し發展せしめんとするは、これ世界意志が吾人に影響を及ぼせる結果
なり。即ち人間は其本質に於て本來世界意志と同一なるが故に、亦世界意志につ
れて生活を主張せざるべからず。生活せざるべからざるが故に斯く生活するを
善なりと思ふに至りしなり。吾人は絶えず自由の選擇をなしつゝも、實は此世界
意志につれられて必至の運命に推し進められつゝあるなり。

樂天家は世界意志に欺かれて人生宇宙を樂觀すれども、厭世的思想家は能く此
人生の實相を明察し、能く其絶えざる争闘の慘狀を見て、生活の價値なきことを

悟るなり。意志の努力は畢竟缺乏の感より生ず。而して缺乏の感は苦感なり。斯く
苦感の状態より起りたる此意志の努力は偏に盲目的に涯もなく動き行きて、何
等満足の状態に達することなく、従つて苦感は永劫終るの時なし。所詮世界は苦
界なり。人生にありて積極的なる感情は唯苦痛の感のみなり。安康は消極的のも
のなり。恒久の安康を説くが如きは空想のみ。然り、斯かる苦のみの世界はなきに
若かず。斯かる世界は實に最悪の世界なり。凡俗の輩は此世界の惨しき實相を悟
らずと雖、天才のみは能く之を悟るなり。これ其精神力盛にして慾求も大なるが
爲め失望悲痛に遇ふことも従つて大なるに因る。斯かる苦は素と生活意志が何
等の思慮分別もなく己れを主張し個體的存在に入りしより來るものにして、世
界の苦痛は實に個性に附着せる刑罰なり。されば斯かる苦痛よりの解脱は個性
の破壊、個性的生活意志の否定中止によりてのみ到達せらる。シ、イベンハウエ
ルの自然哲學乃至實在論は斯くの如く極めて汎神論的の傾向に向へり。

三 藝術論利那解脱論 人生は各個人が己れを主張して相争ひ相闘ぐ修羅の
巷なり。悲痛と苦悶は其實相なり。所詮生は苦痛の連鎖なり。歴史上の進歩なるも

のは、要するに單に理知の進歩のみ實にや人知は日に月に進んで人間の慾求は却つて益増大せられ、従つて生存の競争より来る生活の苦痛は益加はり来るにあらずや。抑知識の出で来るや、本來存在の勝利を容易ならしむる爲めに意志に仕ふるにありしも、是は偶意志を動かして更に大なる盲動、更に激しき争闘に導くの所縁となれり。斯くの如く知識は實に意志の慾求を刺激して人生の苦痛を更に大にし行くものなれども、一方に在つては此知識は吾人をして時に意志の羈絆を脱して、少時個性を離れたる没我觀照の態度に入らしむることを得。これ實に吾人が藝術の境に三昧せる時に、經驗する所にして、此境にありては吾人は個的意志は全く其影を潜めて純なる知覺のみ動けるを見るなり。茲に吾人は世界人生に對して全く觀照的態度を取り、少時は吾人自身が之に屬せるものなることを忘れ得るなり。これ實に少時の没我解脫の境地にして、知識は茲に意志を離れて働き、事物の永遠の姿を示すなり。斯かる少時の解脫の境地を與へ、事物永遠の姿を示す點に藝術の職能は存するなり。而して藝術の中最も高きものは音樂なり。音樂は實に世界意志の永遠靜止の姿を示すものなり。凡そ藝術的觀照に

耽れる主觀は時空個性を超越せるイデー其儘の相に恍惚れ、意慾を沒却せる認識主體たるなり。實在に對して斯かる藝術的態度を採るには多大の聽力を要す。これ天才のみ能く達し得る所なり。

シューペンハウエルは藝術的觀照三昧に入るにも精力の必要なることを説けり。これ生活意志を脱する爲めに他に一つの意力を假定せるものといふべく、此處にも彼の説の徹底せざるものあるを見るべし。

四 倫理説(恒久解脫論) シューペンハウエル以爲らく、天才に取りても藝術的觀照によりての解脫は瞬間的のものたるを免れず。恒久完全の解脫は藝術によりては達せられざるなり。そは吾人に完全なる休息、絶對の満足を供するものにあらず。そは唯少時にして過ぎ行く假の休息を齎らすのみ、各個人は依然として各自獨り全世界意志を抱けるかの如くに自己を主張し、互に争ひ互に闘ぎ行くなり。所詮敵も味方も一なる世界を分有し、此大意志に與れるものなることを自覺するに非ずんば、人類の利己心及び之より来る争闘の苦痛は除かるべくもあらず。然り、眞に吾人をして平安の境に導く道德生活は人が個性の迷妄なることを

自覺し各人が一なる意志に與れることを覺るにあらざれば現れ來らざるなり。愛なるものは特に凡ての人の一なりとの考より生れ來る人と人との間の道德生活の鎖なり。凡そ快樂は苦痛を除くより來る消極的の狀態なるが故に、愛の職能は只管寛容にあり。されば愛は同情の相ならざるべからず。同情は實に倫理の根本をなすものにして、これ實に凡ての人が一體なりてふ自覺によりてのみ初めて生るゝものなり。

絶對の平安は個性の迷妄を自覺し、隱遁禁慾の生活により全く生活意志を否定することによりて得らる。大なる禁慾者又は聖人の生涯は此生活意志の働かざる狀態なり。されば禁慾主義は未來世の祝福を享けんが爲めの苦行にあらで自己保存の争鬪個人、若くは種族の生を續けんとの慾望の止みし狀態なり。佛教徒並に初代基督教徒の生涯は此禁慾の好例なり。個性の迷妄を離れて生存の主張を擲ちたるものには平和は當然臨み來るなり。

斯かる禁慾の生活によりて、吾人は此苦の世界より脱し、涅槃寂滅の境地に入るなり。此寂滅の狀態に入る事が最後の解脱救濟なるを知るは獨り哲學者のみ。

れと聖者たらば必ずしも哲學者たるを要せず、何となれば哲學者の目的は要するに禁慾を實行したる聖者たるにあればなりと。

此處にも亦前と同じくシーベンハウエルは生活意志より解脱する爲めに禁慾の生活を送る努力の何たるかを説明することを省けり。且つ又、何故に一にして二ならざる世界意思中に反對と分争とは起りたるぞ、何の爲めに現象界の雜多は起りたるぞと問はゞ、彼は唯其原因は眞實在の根柢にありと獨斷するの外答ふる能はざるなり。

四 小 評

前にも屢指摘せるが如く、シーベンハウエルの哲學は多くの矛盾と自家撞着とに滿つ。彼は意志の偏に盲目的なるを主張し、平安幸福に至るには、唯斯かる生活意志を否定し、之より解脱するの一路あるを説く。試に問はん、斯かる解脱に到達するの願望努力は何處より來るぞ。これ彼が盲目的なりと謂ふ意志そのものより來るにあらずして何ぞ。彼は吾人に精進努力の禁慾的生活を勸めて、決して吾

人を意志そのものより離脱せしむる能はざるなり。欲求の斷絶の努力も畢竟意志に在りとせば、道德生活の心理は欲求の斷絶といふよりも、意欲の統一的推進にあらざるか。シーペンハウエルに私淑せるニーチェは彼のこの點に於ける否定的消極的態度に慄らずして、更に一步を進めて、宇宙人間の本質眞實在が意志なりといふは可し。然り、意志なるが故に積極的に此意志を主張し行く所に生の意義は存するなりと説き、彼の意志説に出發して彼と正反對なる意志旨定の積極的倫理説を立てたり。又シーペンハウエルが意志と知識の起原的關係を説き、知識を以て意志に仕へんが爲めに生れ出でたるも、意志の實現を導く燈火なりとなすは可し。而も知識は偶々意志の盲動を刺激し、以て人生の苦痛を増すの具のみなれりと斷せるは、如何に時代の缺陷に憾激せる絶叫なりとするも、到底獨斷たるを免れず。吾人が理知意欲との杆格に苦むは心理的事實なり。されど斯かる杆格不調和の苦悶其ものは、纏て意志が理知と相即不離の關係を有し、是によりて斷えず其發動の目的方途を考量するを示すものならずや。シーペンハウエルの禁慾的精進の努力も、畢竟本來盲目的なる意志が理知を取り入れて統一ある

一路に向ふべく教ふる者に外ならざるべし。所詮意志を以て毫末も理知に導かれざる盲動力のみとなすは、情意理知相即して一元の混體をなせる吾人の意識の心理的事實に對して、餘りに抽象に馳せたる空想なりといふべし。次に彼は生を以て全然物慾の盲動に導かるゝ最醜最惡にして、寧ろなきに如かざる世界なりと説く。これ前代理想派が事實を無視して極端なる樂天觀に赴ける正反對の極端に足れるものといふべし。人生は果して苦痛のみの世界なるか。これ理義の問題にあらずして事實の問題なり。吾人は人生を最惡にして苦痛のみの世界なりと斷ずるに當りては、少くとも人生の事實の總和を得て然る後之が價值を測定せざるべからず。假令斯かる總和を得たりとするも、之が價值を定むる標準は何ぞや。凡そ生の價值といふが如き問題は主觀的評價によること最も多く、従つてそれは比較相對的に爾か定めらるゝものにあらず。苦痛が快感よりも吾人に強き印象を與ふることは事實なれど、さればとて人生に於て積極的なるものは快感のみなりとなすは、餘りに事實を無視せる妄斷なり。吾人の經驗は明かに快感の積極的なることを示すなり。

斯くシーベンハウエルの哲學を仔細に檢し來れば斯くの如き獨斷矛盾は一再にして止まらずと雖、而も其能く一世を風靡せしは、其哲學全體が特に近世文明の缺陷に接觸して、是より來る時代の苦悶憂愁を反響したる一個深刻の色を帯びたる眞氣に満てる一大文學なるが爲めなり。彼の哲學の力は其全體の精神に在り。こは實に理知の所産としてのみ見るべきものあらず、實に哲學者が實驗の告白なり。勃發し來る物質的文明を前にして、一面物慾に耽溺する激しき感性を具へながら、一面には斯かる感性的生活に満足する能はず、中心の抑へ難き精進向上の宗教的氣分を有せる近世的天才が、其人格分裂の苦を嘗め、生の難きを味へる實驗を表白せる血ある實感の哲學なり。一世を動かしたる力は實に此點に存す。

シーベンハウエルの一生は實に矛盾多き生涯にて、近世彼の如く毀譽褒貶の區區たる思想家はその比を見ず。彼は實にオーガステン、ルソー、ワグネル、トルストイ等一連の人々と同じく、二個の我に苦める人格なり。彼は一方に於て強き感性的慾求に燃えたるの人なり。彼の衷には彼自らの如何ともする能はざる猛獸潜

みて不斷に其猛威を逞うし、彼をして激し易く、溺れ易き人たらしめ、生來の陰鬱性に加へて更に事物を常に其暗黒消極の一面に於て見るの人たらしめぬ。斯くて彼は絶えず漫罵怒號し、一事一物に不平世を白眼視し、暴慢自ら處り、猜疑人を容れず、同情の徳を稱へながらも、自らは人の心事に同情する能はず、終生我一人てふ淋しき感に自らを囚へて孤獨の生を送れり。彼の名譽心の旺なる、其晚年學界の漸く彼の哲學を認め、尊敬を表するに及び、其門下をして密に彼に關する世間の批評を悉く集めしめ、得意自ら喜びきといふ。彼は同情を説きて同情の人たらず、禁慾を勸めて終生禁慾を實行したる形趣なく、其私行の如き屢々非難の的となれり。

然れども彼は斯かる感性的生活に何等の不安を感せず、之に満足するが如き凡俗にあらず。彼は能く斯かる感性的生活の空虚を自覺し、中心癒し難き苦痛を感じ、一面明徹なる理知と一種ロマンテックなる宗教的氣分とを有し、寧ろ自家中心の平和、本來の面目を哲學的文藝的思索冥想の生活に求めたり。彼は所詮二元的人格の人なり。斯かる人格に於て吾人は其生涯に幾多の非難すべき點あるに

拘らず、其中心の誠實、其言説の眞氣を疑ふ能はず。彼は實に衷心此二元性格の衝突に苦みたり。彼の厭世哲學は此苦悶を廣き人生に投感して一大組織となしたるものと見るべきなり。

彼の哲學が實感の哲學、人格の哲學なりといふ。試に彼の哲學を取りて之を検せよ。其一面唯物的現實生活の殆ど人生の全部なるが如く説きて、前代理想派の哲學を罵りながら、一面萬有を以て現象なりして眞實在を示し、更に天才的直觀を説き、涅槃解脱の境地を教ふる所に、如何に彼の二元的人格を反映せるかを見るべし。彼は現實に利己を見て理想に同情の徳を呼び求め、現實に意慾の盲動を経験して理想に於て禁慾を教へたり。要するに彼の實在論は彼の實生活の告白にして其倫理解脱論の彼の宗教的理想の表白と見るべきなり。而して彼の人格、彼の生涯の示せる矛盾苦悶は又實に近代に於ける著しき時代の特徴なり。此點に於て彼は代表的時代の兒たりしなり。彼の哲學が時代の大なる反響を齎らしたるはまた故あるなり。若し夫れシーベンハウエルの唱へたる意志本位の説に至りては、十七世紀の昔に於て已にルソーによりて絶叫せられたり。されど彼に在

りては其思想餘に反動的文學的にして粗笨なるを免れざりき。更に又カントは實踐理性を説き、意志の權威を主張せり。されど彼に在りては意志は倫理的意志にして、認識能力の分野に於て知識と對立せられたるのみ。シーベンハウエルに至りては論證的に實驗的に意志、詳しくは情意を以て吾人の本質主觀自我の本體となし、認識起源に於て知識も畢竟情意に仕ふる爲めに後に生れ出でたるものなりとなしたり。これ明かに近代實驗心理學の主情意説の前驅をなし、且つ之より出で來りし一般思想界の主情意的傾向の一流起源をなし、以て明かに時代を劃したるものといふべし。

第七章 ニーチェ

一 其生涯及び著作

一八七二年、悲劇の出生と題する奇書現れたり。而して是こそは吾等が此處に傳せんとするニーチェが處女作にてありき。當時彼の名は少數の知己を除きては未だ知られざりし所、安んぞ知らん、かれ猛獸の獅子吼が時ならずして全歐洲に殷然たる咆哮の轟を傳へんとは、安んぞ知らん、その餘韻が今尙吾等の心耳に山彦を傳へんとは。

フリードリヒ・ニーチェ(Friedrich Nietzsche)は一八四四年秋十月十五日、普魯西サクソニー州の一小邑レツケンに生れぬ。父はカール・ルドウヒ(Karl Ludwig Nietzsche)と云ひ、新教々會の牧師にして敬虔の念淺からざる人なりき。母の名はフランチスカ(Franziska)と云ひて亦牧師の家に生れたり。ニーチェは其第一子なり。弟ヨセフは幼にして死し、妹なるエリザベツのみ、ニーチェが淋しき獨身の生涯を優しくも慰撫して侍したる人なり。彼女は又彼が死後、細かなる彼の傳をものしたる人なり。

り。

ニーチェ五歳の折、父は圖らずも馬より落ちて遂に復た起たざりしかば、母は一家を携へてナウンブルヒに移りぬ。ナウンブルヒに於ける一家は宛ら尼寺の如き信仰の空氣に包まれたる平和敬虔の生活にてありき。晨は祈禱の聲に東明し、夕は祈禱の聲に暮るゝ家に育ち、愛に溺るゝ女人の手にのみ養はれたるニーチェは友を好まず、好んで家内に止まりき。彼は未だ十歳ならずして既に詩を作り、又音樂をも能くしたり。思へば後年筆を極め聲を啞らして宗教を罵り不淨を唱道せる彼が、牧師の家に生れ、信仰の家に育ち、静けきナウンブルヒの夕にピアノの音を響かせて母や祖母や妹の團欒を慰めたる姿こそ實に奇しき對比なるかな。されど彼が小學校を卒へて中學校に轉ずるや、周圍は茲に一變せり。而して彼は既に文明を論じ、宗教を疑ふの青年となりき。されど彼が郷里を去つて笈をボン大學に負ふの時、敬虔の念篤き寵兒ニーチェの面影は今昔の夢と消えて、事毎に其真相を看破し徹底せざるば止まざるの人となりぬ。

ニーチェは二十歳にしてボン大學に入り、此處にリッツルに就いて言語學を學ぶ、師

のボンを去つてライプチヒ大學に赴くや彼亦師に伴ひぬ。後數年一度は兵役に従ひたれども、幾許ならずして馬より落ちて病を得、再びライプチヒに歸り、又リ、チルに師事したり。

此時しも彼が其生涯の流を規定し色づけたる一事實こそ起りたれ。即ちショーペンハウエルが厭世哲學の發見是なり。當時ショーペンハウエルの哲學は未だ人に識られざりしが、偶、ニーチエが一日其著意志と觀念としての宇宙 (Die Welt als Wille und Vorstellung) の古本を手にするや、突如として一新生面は彼の眼前に展開せられぬ。彼は吾を忘れて食るが如く此書に讀耽りぬ。而して如何ばかり此二哲人の世を隔てたる心と心との共鳴がニーチエに影響し、更に彼をして彼獨特の人生觀に進ましめたるかは吾等をして後に説く所あらしめよ。兎もあれ彼はショーペンハウエルの著しき影響を荷ひて後二十五歳にして瑞西なるバーゼル大學の古典言語講師となり、枯淡なる死語の研究の中にすら、將に燃え昇らんとする猛烈なる人生觀の火花を仄めかしたりき。

彼は生來強壯の人にてはあらざりしが、偶、普佛戰爭に従軍して病を得てしより

以來彼の全生涯は不斷に疾病と苦闘せざるを得ざるに至りぬ。而も其病は主として重き眼病と神經衰弱及び慢性胃加答兒なりしかば、眠り難き夜の苦さに耐へ兼ねて常に痲醉劑を服したりき。さはあれ此間に在りても猶彼は事業を廢する事なく、一八七二年には彼が第一著悲劇の出生 (Die Geburt der Tragödie) を著したり。これ蓋し彼が世に向つて發したる挑戰の第一聲たり。其意味する所は古代希臘に於ける悲劇を以て思念、瞑想の神アポロと努力精神の魔神ディオニソスとの矛盾争闘換言すれば理想と現實、靈と肉との格闘に基因すとなせる所に在り。此書一度現るゝや幾多の論難、誹謗矢の如くに放たれたれども、ニーチエは之を意とせず、交を甜言、偽禮の學者流と結ばずして、獨り孤獨暗鬱の生活を送り、偏に偽り多き當代思潮の真相を看破して、以て健固なる新人生觀を建設せんと勉めたり。此に於て彼は先づ在來の人生觀、因襲に囚はれたる没批判的、道德を打破せんが爲めに、非時勢的考案 (Unzeitgemässe Betrachtungen) を著はさんと企て、その第一痛棒を輕浮なる幻滅主義者ストラウスの頭上に喰はしたり。曰く、自認者、著者ストラウス (David Strauss, der Bekenner und der Schriftsteller) 是なり。而して其皮肉嘲罵の火

花を散らし、意氣生命に満ちたる表白は大に當代青年の心を魅するに足りき。更に翌年に至り、彼は當時流行せる歴史研究を罵詈して、人生に於ける歴史の利害 (Von Nutzen und Nachtheit der Historie für das Leben) を著し、當時の學校教育者に中りて人生と離れたる如き歴史研究法が畢竟無益有害に終ること、歴史の意義は社會民衆にあらすして係つて偉人のみに存することを極論せり。又同じ一八七四年に出版せる、導者シューベンハウエル (Schopenhauer als Erzieher) は遙に時代思潮を超越して、獨り自由の天地に人生の真相を看破せる一大哲人シューベンハウエルが祭壇に推賞讃嘆の辭を呈せるものなり。次に彼は「非時勢的觀察の最後の巻」としてワグナーを推讃せる、バイロイツなるワグナー (Richard Wagner in Bayreuth) を著し、彼を以て不羈高踏の人生傲放歡喜の生活を唱へし偉人なりとせり。斯くて彼が耶蘇教を呪ひ、在年の既成道德を咀ひ、一切の因襲的價值標準を破らすんば止まざるの火焰が將に炎々として天を焦さんとする時、彼の病は漸く重りぬ。彼は幾度か累はしき教職を擲つて靜養思念の時を得んと願ひたれど、身に餘財なくして果さず、夏の休暇のみを幾多の溫泉場に過したりしが、其間に在り

て彼は時を選ばず書き留めし格言體の控を整へて、「人間的徹底人間的 (Menschliches Allzu Menschliches)」と題し、三回に亘りて之を世に問ひたりき。而してこれ等の書は彼が懷疑的破壊的思想の最も高潮に達したるものにして、將に來らんとする電光に先立つ亂雲疾風の姿と見るべし。されば親友ワグナーさへ、彼を崇敬して措かざりし妹さへ、此書を視て驚駭の眼を開き、獨逸社會は一般に之に罵詈の矢を放ちたれど、而も怪獸ニイチエは冷然として満足の笑を洩らしたりき。さもあれ彼の恐るべき敵は社會にあらすして自己心内に在りき。日に迫り來る人生の疑惑と苛責とに苦められて病は愈々重きを加へしかば、一八九七年、遂に斷然教職を辭し、ナウンブルトの故郷に一冬を過して、只管療養に心を專にしたれど、更にその甲斐なかりき。越えて一八八〇年以後、彼は誠に憐むべき放浪の生活を送り、冬は伊太利の海邊に孤影淋しき一日々々を暮し、夏は瑞西の谿谷に獨り寂寥と病苦とに悩みぬ。されど頭痛の怠れる折々を盗みては、或は旅宿の縁に凭れ、或は森を彷徨ひて襲ひ來る疑惑を獨り靜に解決せんとしたり。彼が好んで短き格言體の文章を用ひたるも、病に壊滅せんとする彼に取つては一に止むを得

ざるものありしなり。

恰も當時彼に自然科学の知識を與へたる事少からざりし知友リー氏は、ニーチェに勸めてサロメなる婦人と婚約せしめしが、幾何もなくして彼は約を破りたり。元來感覺的なる諸慾望の薄かりし彼は一生娶らず、氣むづかしき彼が生涯を通じて、妻に代りて看護者となりしものは彼の愛妹エリザベツツありしのみ。

斯かりし程に一八八一年の春、彼は更に「曙光」(Morgenröthe)を公にせり。此書は前の「人間的、徹底人間的」に現れたる破壊思想の連続と見らるべし。繼ぎて著はせる「悦ばしき科學」(Die Fröhliche Wissenschaft)の一部もまた然り。要するに此までのニーチェの思想は一切舊來の價值標準を打破せんと努力せるものにして、之を消極的な破壊時代なりとすれば、斯くして破壊せる舊人生觀に代ふるに全く新しき價值標準新人生觀を打ち建てんとせるもの、即ち彼が超人を説ける「ツァツトースト」(Also Sprach Zarathustra)なりとす。故に此書は彼の思想の最高峰を示すものにして、彼が青年期より懷抱せる種々なる思想は、此書に於て渾然たる一體を示せりとも謂はるべし。越えて一八八六年、更に「超善惡」(Jenseits von Gut und Böse)

を著はし、翌年には又「道德の系譜」(Zur Genealogie der Moral)を著はして、從來道德を批判せる思想を更に組織的に發表し、以て當代文明を咒咀せり。その後彼は曩には譏嘆措かざりしワグナーを誹謗せる「ワグナー事件」(Der Fall Wagner)、「偶像の殘暉」(Götzendämmerung)及び「ニーチェ對ワグナー」(Nietzsche contra Wagner)を著はせり。

されど彼の健康は益々衰頽の徴を來し、正に狂亂の縁に接しつゝありき。されど彼は猶業を捨てず、自己の思想を大成綜合せんとして「非基督教主義」(Der Antichrist)を著はし、更に他の著述に就かんとせる折しも、遂に復た起つ能はざる狂人となり。一八八九年、チューリンなる私立養育院に送られたり。されど幾何ならずして病稍癒えたる時、ナウンブルヒの故郷に歸る事を容され、一八九七年、母の歿後はワイマールに移り、妹エリザベツツが兄の爲めに購ひたる郊外の一別墅に生くるに甲斐なき餘生を送りぬ。

想へば全歐洲の思想の野に物恐しき霹靂の音を轟かし、閃々なる電光を浴びせたる雷神ニーチェが、今は近郊の山霞み、イルムムの河の緩く流るゝ處、往年の氣力盡きて可憐なる幼兒の如く妹に慰撫せられ愛護せらるゝ姿こそ、實に傷心の限り

なれありし昔の猛き傲放の心は碎け果て、殘るは優しくも馴れくしき情のみ。見よ、彼は憔悴せる手を延べ親しく妹の手を握りて斯く言ふにあらすや、妹よ、吾等は幸福なりと。一九〇〇年八月二十五日、静けき曉鐘の聲を聞きつゝ、ニーチェは遂に永眠せり。

二 彼の人格

ニーチェは哲學者なりや。此問題を解釋するに勢ひ哲學者とは果して如何なるものを意味するかを問はざるべからず。若し一切科學の眞理を綜合して此處に一大系統を組織するものを以て哲學者と言はんか、ニーチェは決して斯かる意味の哲學者にてはあらざりき。されど哲學の全職能は果して斯く科學の奴隸たるに止まるものなりや。否寧ろ哲學をして哲學たらしむる所以の眞意義は徹底せる人生觀を立て、人生の目的を示し、一切事物の價値を規定する所に存す。ニーチェは實に此意味に於て哲學者なりき。而してこの意味に於ける哲學者は又必ずしも組織的系統を立つるの要あらざるべし。大哲ソクラテースは一の系統を有せざ

りき。而も彼の哲學は彼が心生活の統一、燃ゆるが如き情念、偉大なる人格の力に依つて精神生命を有するにあらずや。たゞにソクラテースのみにあらず、凡そ力ある全人活躍の思索をなすの哲人にして其思想の中に偉大なる人格の方を潜めざるはあらず。ニーチェが斷片的なる思想も亦何等組織的系統を有せざるの觀あり。其思想の跡を辿れば、一見幾多の矛盾せる論議を含むが如し。されど若し一度是等の思想の裏に隠れたる彼が人格を窺へば、其處に彼の思想の由つて來れる所以を知るべく、彼の思想が彼の人格を外にしては到底解すべきにあらざるを知るべきなり。吾等をして暫らく彼の人格を探らしめよ。

讀者よ、一度巻頭に掲げたるニーチェの肖像を熟視せよ。廣き額に現れたる幾條の血脈は熱したる血潮の漲れるを示し、眼も蔽はんばかりに迫りたる濃き眉宇の下には荒鷲の如き鋭々たる眼光の射るあり、鼻は高く、頬には苦闘の皺を現じ、ナイヤガラナイヤガラの如き長髯は固く結べる口を隠す。而して延ぶるに委せたる長髪は獅子の頭さながらに亂れたり。熱情の人氣むづかしき勝氣の人、これ彼が面容に接して直ちに想起する印象にあらずや。誠に彼は幼少の砌よりして氣むづかしき

人なりき。彼が小學時代より友と交るを嫌ひたる性癖は、長ずるに及びても親しく人に接するを好まず、獨り寂しき生涯を送りたるも亦大に是に因する所あり。所詮彼は熱烈なる覇氣の人にして、堂々たる王者にてはあらざりき。由來覇者は極端に走る。ニーチェ亦是に洩れず。此故に一度彼が眞理と認め理想を示すや、之が爲めには口を極め全力を致して争ひ、熱烈なる宗教的憧憬の心を以て之を崇敬して止まず。然れども一面彼は幻に酔ふには餘りに心醒めたりき。夢破れて靜に其幻を批判し來る時、彼は更に惡魔の如くに之を打破し壞滅し罵詈して措かず。熱心なる崇敬と極端なる非難と、彼は常に其何れかに在りき。嘗つてワグナーを賞讃するや、ワグナーは直ちに彼の理想の人となり、偶像となり、言を盡して彼を讚嘆せりき。彼は人類の爲めに生活を充實し、人生の價値の絲を結合する此上なき偉人となれり。然れども一朝彼の短所を看破するや、直ちに彼は人生を陥れ、人生の價値を破る大敵となれるにあらずや。思へばニーチェが生涯を通じたる思想變遷の急激にして極端なる誠に時計の振子の如き觀なくんばあらず。此故に彼が感情の動く所熱する所主張にまれ、非難にまれ、實に疾風雷電の壯

觀を呈す。彼の文章の燃ゆるが如き高調の情熱を有するも、一に彼が感情の熱火を表現せるものに外ならず。

されば彼が安佚惰眠を訓ふる、罌粟粒的的人生觀に鐵槌を喰はして、強者道德を主張し、力に生きん事を號叫せる姿には雄々しき強者の風はあり、彼が情熱の火焰を吐いて因襲に囚はれたる民衆を叱咤し、キリスト教道德を殄し、而して超人を主張せる姿には歐洲の野を焼き盡さずんば止まざるの慨はあり。されど靜に想へば、彼に強者の觀あり、偉人の裝あるは畢竟情熱の現れに過ぎずして、底に無盡の意力を含み中に無限の魔力を藏して、而も猶猥りに號叫せざる沈黙の怒號に至りては、到底之を彼に求むる能はざるなり。聞くが如くんば獅子の一度傷を受けて死なんとするや、何等痛苦の叫びを發せず、默然として深林に隠れ、默然として林中に斃ると。而してニーチェは遂に獅子にあらざるなり。之を金剛意志の人イブセンに比すれば、ニーチェは岩を碎き岸を嚼むの怒濤にして、イブセンは底知らぬ海の面は穩かなれど底に無盡の力を藏せるにも譬へつべし。此點に於てはニーチェは寧ろルソーに酷似すとや言はん。

彼が感情の人たるは、痛苦を抱いて轉々地を變へたるの時、如何に孤獨を悲み寂寥に嘆きたるかを見るも明かならん。彼が友ローデに與へたる書簡の一節に曰く、噫君よ、何たる寂しき生活ぞや。唯獨り、あゝ唯獨り」と。又サロメに與へる書簡には、余は今や寂寥に堪へず。再び人と生るゝに堪へず」と。更にサイドリツに送りたるものには、余は孤獨なり、恐しき孤獨なり——幾春秋を何の慰安、何の友もなく、何の愛情もなくして送れることよ」と嘆けり。而して彼の著書の多くは斯かる寂寥を慰めんとて生みたる愛兒にてありしなり。

已に情熱の人なり、常に極端より極端に走れる人なり。此故に其論ずる所が往々にして矛盾を含み、缺點を有するは理の當然なり。ルソーも亦然りしにあらざるや。さもあれ彼が言を極めて、力を得んとする意志を説き、偏に強者たらざるべからざるを主張せるは、一見彼が人格と矛盾するの觀あれど、そは單に表面の事實にして、深く考察を廻らせば直ちに消え失すべし。彼が、道德の系譜に曰く、藝術家が自ら表自主張する所を以て、直ちに其人の力を示せるものなりと惑はざる、勿れとニーデが標榜せる人生の理想、人間の目的は決して彼自身が有する本性を

示せるものにあらずして、寧ろ彼が缺如するが故に憧憬せる彼自身の理想たりしなり。而して彼が理想と目的とは纏て自己を非難し自己を苛責する筈たらざらんばあらず。思ふに吾等の缺點は以て理想を觀るの眼にあらずや。

彼の一生は常に痛苦に悩まされ、偶病愈る時のみ痛苦を忘れて快癒の情に酔ひ健康の悦樂を味得せり。而も病者のみ克く健康の價値を知り、克く生活の意義を知る。此故に彼は生活の充溢を説いて止まざりき。然れども彼は又一面に強く生活の苦痛を感じたり。常に病苦のみにはあらず、命運の冷酷、人生の空虚、自己の心に於ける疑惑と矛盾と格闘と、如何に是等が多感なる彼が胸を壓したるかは、病篤き枯坐の折々、彼が發したる絶望の聲に聞け、曰く、克己と忍耐と、これ畢竟何するものぞ」と。又曰く、余は生を呪ふ」と。已に彼は人生を避け、生活を否定せんとする傾を有したりき。故に能ふ限り此傾を非難し、能ふ限り人生を肯定し、生活を主張したるは纏て彼自身に對する譴責の答たりしなり。如何なる苦痛と雖、斷じて生活を否定するが如き迷路に導くべからざるなり。

彼が幻想を難じ、多感を誹り、同情の念を罵詈せるも亦此所以に外ならざるなり。

凡て是等は自ら彼自身の缺點として認めたるもの、此際彼の罵詈は臆て自己の性癖の克服を意味したるなり。彼が多感にして幻想を事としたるは、幼時より深く音樂的詩歌的嗜好を有したるにても明かなる所にして、彼は常に自らこの缺點を嘆じ、冷靜なる理知の眼を昏まざるゝを悲めり、又彼が同情の念厚かりしは、其妹が彼が同情を非難せるは決して自ら同情心なきが爲めにはあらずして、反つて餘りに同情心多きが爲めに種々なる困難に陥り易かりしを以てなると言へるにて知らる。今之を唯々己が事のみ思ひ煩ふ利己心の權化シ、ペンハウエルが、その倫理説に於て同情を以て最高の徳なりとしたるに比すれば、此處に一個の意味深き對比を見る。

所詮彼の思想は彼自身の批評苛責に根柢す。即ち彼は生活を肯定し充實せん事を極論し、人類の發展向上を夢み、超人を夢想とし、以て苦惱多き自己の生活を維持せんと勉めたり。而も情熱の人彼が如き一度理想を立つるや、強烈なる宗教的熱情を以て其爲めに奮闘し、其爲めに懸命して敢て餘力を遺さず。されば彼は宗教を誹謗したれども、而も高調の宗教的情感に至りては之を彼の書の隨所に窺

ふべし、さもあれ彼が果敢なき氣力と健康とは長く斯かる苦惱と情感の熱火に堪へざりき。時代を諷り、道徳を呪ひ、而して自己を責むること深かりし、彼が熱情は遂に自らを焼き盡して終焉を告げぬ。彼曰く、天才の周囲は凡て悲劇なりと。彼は天才なりき。熱情の人なりき。されど意志の人、知力の人にてはあらずき。偉人にてはあらずき。

三 彼の思想發達の三大區分

吾等は既に彼が情熱の人なることを見たり。而して彼の著書は自から此熱火の調子を表顯せるものにして、其文の生命あり力ある、實に獨逸文學中の第一傑作として推すべし、その文體は連絡ある組織的推論の形式を採らずして、殆ど凡て格言的文體を採れり。これ畢竟彼が疾病に惱みて長く筆を執ること能はざりしに基因するも、亦彼の主張の根柢が主として情熱に在りて、理知にあらずしを以てなり。而してこれ亦臆て彼の説に人を魅するの力ある所以なり。已に格言的なり、加ふるに抒情詩的、象徴的なる彼が文體は、其主張の内容を組織的に言表す

る事を難からしむ。兎もあれ先づ彼の根本思想の發達を概観し、然る後稍詳細に涉りて彼が消極的破壊的思想を述べ、併せて積極的建設的方面に及ばん。
ニーチェの思想は大體に於てシューペンハウエルの厭世哲學に出發し、更に進化論的思想を取入れて、之を積極的に改造せるものなり。此故に吾等は先づニーチェとシューペンハウエルとの關係を知らざるべからず。

彼の厭世的思想は強ちシューペンハウエルが意志と觀念としての宇宙を手にし、る時に始まれるものにあらずして、寧ろこれ彼が幼時よりの心的傾向なりき。されば一朝彼が此書を繙くや、其處に微妙なる共鳴の響を傳へ、此著の説く所を以て直ちに宇宙人生の大眞理を表白せるものなりとしたり。此故に彼の思想の第一期は主としてシューペンハウエル式なる厭世主義を以て其根據とす。悲劇の出生、非時勢的觀察は此期の思想を現す。即ち宇宙は意思と觀念とに分たれ、欲望を求めて飽く事なき盲目的意思が人生一切の悲痛の根源にして、唯人類は美的觀念即ち藝術的作品に依つてのみ如是苦惱の旋渦より解脱するを得と説きたり。されば現實の懊惱を離脱せしめ、人生の最深意味に參せしむる藝術家は、彼の理

想となり、彼は之を劇詩家ワグナーに見出しぬ。是に於て彼はストラウスの如き無神經にして度し難き樂天家を以て、到底人生の實相を解せざるものとし、獨り沈思向上の念に満ちたる厭世哲人シューペンハウエルの如き者のみ能く人類の導者たるべく、獨り因襲を破りて社會の惰眠を警醒する厭世詩人ワグナーの如き者のみ能く人類の苦悶を解脱せしむる眞藝術家たるべしと論せり。

然れども彼は事實と理想とを辨ふるには餘りに空想家なりき。彼の思ひ做したるワグナーは遂に眞のワグナーにてはあらざりき。是に於て彼が一度ワグナーがものせる「バイジファール」の劇を観るや、俄然彼の抱けるワグナー的藝術の理想は破られたり。蓋し「バイジファール」に於ては、藝術は遂に舊宗教の祭壇に跪き、教會の膝下に屈服したり。然るにニーチェ思へらく、苟くも無意義なる生活を打破し、新しき人生の意義を拓いて人類を救ふべき藝術家が、偏に現實を厭離せしむる宗教に屈服するは斷じて赦すべからざる所なりと。乃ち彼は昨の理想的偉人ワグナーを捨て、極力之に誹謗の毒矢を放てり。ニーチェが夢一時の空想が斯くも無殘に破れたるは、實に憧憬の心深き彼が思想に大鐵槌を喰はしたるものにして、此

に彼が全思想の一轉機は生まれ、彼は理想的藝術家を失へる時、同時に又彼を欺きたる藝術を放擲し、直ちに隱家を科學に見出すに至れり。斯くて彼は人類を救ひ、人生に意義を作るものは、主觀的空想を事とする藝術家にあらずして、客觀的思考を根據とする科學者なりと主張し、こゝに全くショーペンハウエルの虛無的厭世觀を捨て、經驗を重んじ實證を尊ぶ科學の地盤に立ち、在來の道德、從來の眞理とせられたる思想の根柢を覆さんとせり。これ彼の思想の第二期にして、疑惑期又は破壊期とすべし。人間の徹底人間的「曙光」及び「悦しき科學」の一部は此期に屬す。

此時期に於て彼の思想に著しき影響を及ぼせるものは進化論的思想にして、彼は物質現象のみならず、心的現象も亦此見地よりして論せんとし、結局深き疑惑の淵に陥れり。即ち彼は知識を以て感覺を離れたる絶對的妥當性を有するものにあらずと見て、一面認識論上の懷疑説に陥り、道德習慣の如きも決して客觀的權威を有するものにあらずして、畢竟轉々流れて止まぬ價值の上に築かれたるもの、所詮は流轉し變遷すべきものなりとし、之を極端に論及して道德上の虛無

主義に陥れり。斯くして彼は深き疑惑の底に沈み、暴れ狂ふ雄獅子の如くに在來の人生觀を噛んで裂き、打つて碎かんとして、此に猛烈なる破壊的色調を現じたり。

されど眞面目なる破壊の背後には、又自から建設的傾向を孕ますんばあらず。加ふるに彼が如き宗教的熱情に燃ゆるものに在りては、何等か積極的崇敬物なくしては止むべからざるなり。是に於て彼の思想の第三期に入る。この期の著作に屬するものは「悦ばしき科學」の一部「ツァラーストラー如是説」「超善惡」「道德の系譜」「偶像の殘暉」及び「非基督教主義」等なり。

此期に至りては、主意説を主張する限りに於て、彼は再びショーペンハウエルに歸りたれど、而も盲目的意志を以て一切苦惱の本源と觀るが如き虛無的厭世觀に至りては、既に第二期に於て之を擲ちたり。されば第三期に於ける彼が意志の解釋は寧ろ剛健にして生活を悦ぶ力を得んとする意志となせり。即ちショーペンハウエルが盲目的なる「生きんとする意志」は、此處に於て更に積極的に價值あるものとなり、是を以て一切生物の本能的根本衝動となし、生活の意義は懸つて此力

を得んとする意志を伸張する所に在りとせり。然れども斯かる多くの根本的衝動は勢ひ互に矛盾し相争闘せざるを得ず。今シローペンハウエルは此矛盾あるが故に人生は到底悲痛なりと斷じたれども、ニーチェは此矛盾と争闘あればこそ人生に向上發展ありと主張して、此にダーウソンの進化論を探り、生存競争はやがて力を向上し、強者をして勝利の冠を戴かしむるもの、弱者を壓服して滅亡に終らしむるもの、此處にこそ人生の意義はあれ斯くしてのみ生活を肯定する強者の道徳は生れ斯くしてのみ人間の理想超人來るにあらずやと極論せり。

所詮彼は熱烈なる現實生活の肯定者なり。能ふ限り人生の意義を深め、生活の價値を耀き出さんが爲めに奮闘努力せるデオオニスなり。されば苟くも人生の意義を否定し、生活の價値を鈍らすが如き思想に對しては、彼が情熱の火花を散らし、彼が憤怒の熱火を浴びせて、之を脚下に粉碎せしむれば止まず。この故に彼が思想の積極的、建設的方面と雖、又自から一面に強く破壊的思想を現すは當然なり。否寧ろ吾等をして嚴密に言はしめば、彼の主張は主として舊思想の破壊に止まり、之に更るべき堅固にして徹底せる新人生觀は之を彼に見る能はず。唯第二期

に於ける破壊は疑惑の爲めの破壊なれども、第三期に現れたるものは生活を肯定せんとする強き信仰の下に行はれたる破壊なりしなり。而して斯かる信仰がニーチェ自身に實現せられたりや否やは、更に結論に於て述ぶる所あらんとす。更もあれ以下久しく彼が思想を述べしめよ。

四 七非主義と七主張

一、非厭世主義現實主義 既に人生を肯定せんとせる彼が先づ破壊せざるべからざる者は厭世主義なり。即ち彼の説に依れば人生を肯定し、現實生活の價値を轉覆して、此處に新なる生活の眞價値を生み、人生の意義を促進するは獨り強者のみ之を能くするが故に、宜しく現存する所の蠢々たる弱者を絶滅し、勉めて力を得んとする意志を發展せしめて以て人道を完成し、生活を向上せしめざるべからず。勿論斯くするが爲めに其處に大なる格闘は生ずべし。強烈なる争闘は起るべし。従つて之よりして惹起さるゝ悲惨なる苦惱はあるべし。然れども斯かる意力と意力との争闘は臆て弱者をして倒れしめ、強者をして克たしむる所以に

して、畢竟これ現生活を向上する上の唯一手段なるが故に、此處に生ずる一切の苦痛害悪は之を忍ばざるべからず。

然るに厭世主義は所詮斯かる争闘の痛苦と悲惨とに胸を傷むるものにして、何れは憐れなる弱者の聲に外ならず。憂愁と慟哭は之を優柔なる弱者に與へよ。吾等は須らく苦悶に堪へ、懊惱を殘し、生活に、然りと云はざるべからざるなり。幾多の傷ましき悲惨と苦悶と、これ畢竟強者に取つて何ものぞ剛健なる意力は大笑しつゝ嬉々として争闘せざるべからず。争闘なき所そこに向上なく、苦悶なき所そこに争闘あるべからず。否、苦悶は強者をして益強からしめ、弱者をして愈弱からしむる所以、斯くして弱者は遂に亡滅し、強者は益高きに昇る。

此點に於けるニーチェの主張は明かにショーペンハウエルの厭世觀を非難せるものにして、ショーペンハウエルが人生は争闘と悲痛との旋渦なるが故に、而して斯かる悲痛の源は盲目的意志なるが故に、吾等は意志を絶滅する事に由つて生活を解脱し、悲痛を厭難せざるべからずと言ひしに反して、ニーチェは飽くまで、人生に對する信仰を固執し、生活の勝利を唱道せり。而も生活を充實し、人生を肯定す

る所の者は意志其者に外ならず。されば彼は徒に意志を滅し生活を否定する厭世觀は極力之を罵倒せり。有名なる死の説教者の如きは明かに此思想を表す。此故に彼の非厭世主義は決してかの幼稚なる盲目的樂天觀乃至在來の超越的樂天觀にはあらずして、一面に劇しき争闘と傷ましき悲痛とを認めながら、而も猶人生を超越せずして生活の意義を主張するの點に於て、古代希臘のヘーラクリトス哲學に類す。故に彼は自ら呼んでディオニソスの厭世觀と言ひぬ。謂ふ意は、惱み多き人生を遁れて意志を抑壓し、平靜なる無欲の生活を以て最後の理想とする隠者的人生觀を排して惱めるに係らず、吾等は猶宜しく意志を刺戟し、現實生活を肯定せざるべからずと言ふに在り。而も剛健なる意力を有する強者に取りては苦痛だに猶且つ不可言の悅樂を伴ふにあらずや。蓋し彼は苦痛と闘ふ事に由りて、更に益己が意力を強ひるを得ればなり。深夜の歌は此思想を現はす。

彼が「道德の系譜」に曰く、從未の理想を粉碎し、呪はしくも無を欲する虛無主義を脚下に蹂躪すべき未來人……再び意志に自由を與へ、再び現實を目的とし、再び人間に希望を與ふべき未來人……彼は何時かは來らざるべからずと、彼は來れ

り、而して豈にニイチエこそ其人にあらずとせんや。

二、非基督教主義(向上主義) 彼が非厭世主義を主張する以上、又彼をして非基督教主義者たらしめたるは當然なり。彼は、人間的、徹底人間的に於て既に其攻撃の端を開き、非基督教主義に於ては最も明かに、而して最も強烈に之を攻撃せり。其末章は有名なる痛罵の論にして、吾は罪を基督教に宣すなる語を以て始まる。其文の力ありて豪放なる讀む者をして自から聲を揚げ、自から腕を動かさしめずんばあらず、而して其攻撃の旗印は基督教の教理を以て全然没理性的のものとし、更に進んでは之を以て人類の现实生活を萎靡廢頽せしむるものなりとするに在り。今彼が如何に基督教の教理を以て理性に矛盾する虚偽なりとなし、かは事新しく此處に陳ぶるの要あらず。凡そ近代の經驗的哲學者は殆ど皆之を論じたり。ヴアルテール、ヒューム、エンサイクロピディスト、ベーン、ダーウイン、ハクスレー、ストラウス、パウエル、マイアー、リッテル、フイエールバッハ、及び其他幾多の人は皆基督教が少くとも没理性的超理的なる事を主張したるにあらずや。此故にニイチエが基督教を非難せる特長は、宗教を以て甚しく生活を害するものとなりと論

じたる點に存す。而して其論旨は略前に論じたる非厭世主義に於けると同じ。

彼曰く、基督教は世に最も危険なる奴隷道德なり。何となればそは、力を得んとする意志、本能を抑壓し、之を以て悪なりと宣するにあらずや。剛健にして人生の意義を生ずべき強者を以て無賴漢と云ふにあらずや。生存を向上せしむる最高意志を以て罪惡と宣し、誘惑と言ふにあらずや。基督教は弱者を救ふにあらずや。而も腐れる林檎の風に揺られて尙落ちざるは見苦し。非基督教主義と。凡そ強者たらんとする本能を失ひ、自己の實在に害惡なるものを選ぶものは、個人にあれ社會にあれ、體ては衰頽を招くを免れず。何となれば現實生活は向上せんとする本能、力を得んとする意志に外ならずして、此本能を弱め、意志を抑壓する所、其處に生活の衰亡を來すや必せり。

即ち彼は基督教が教ふる罪惡觀念、愛情及び厭世觀を以て凡て皆生活に害あるものなりとして之を非難せり。蓋し彼に取つては基督教の所謂罪惡觀念は生活の歡喜、現實の意義を拉し去る所の人類の敵なりき。何となれば基督教は自然的、本能的なる意志力の發現を以て罪惡なりとなし、怯懦、無氣力乃至慾望を殺すを

以て有徳とし、結局全人活躍の生活に更ふるに色を失へる生活の影を以てせり。然るに斯く現實を厭離する人生觀は即ちニイチエが最も敵として戰へる所にならず。

愛情乃至同情に於ても亦同じ。愛とは畢竟他の爲めに自己の情を削ぐ事にあらずや。然るに人生の實相は全く之に反し、猛烈なる争闘あればこそ此處に向上あり、此處に發展あり。この故に争闘を以て罪惡とするが如き基督教の同情、他の爲めには自己を犠牲とする事を訓ふる基督教の愛は、畢竟人生の向上を阻碍し、懺て現實の價値を奪ふものに外ならず。況してや現實を厭離し、人生を忌避して只管未來世に憧憬するが如き宗教思想に至つては、現實の權威を無視し、生活の價値を等閑にするものにして、これ彼が斷じて赦さざる所なり。彼曰く、所詮基督教は悲痛を集め之を保存する所のもの、人生の萎靡凋殘を促進する所のものなり。人生の根柢たる一切の自然力を拒否し、人類を空寂虛無に導き去る所のものなり。……唯人は之を虛無と言はずして、他界と言ひ天國と言ふ。……されど畢竟これ生活の譬にあらずして何ぞやと。

三、非民主々義貴族主義 強者を以て人生の意義を作り、生活を向上せしむるものとなせる彼は、勢ひ又民衆を罵倒し、民主々義を排斥せざるを得ざりき。以爲らく、社會の大多數は凡庸の民衆なり。然れども是等は決して人類を向上せしむるものにあらずして、唯少數の強者のみ克く此大任を成就す。此故に民衆に權威を與へて少數の貴族を抑壓するは斷じて生活の意義を深大ならしむる所以にあらずと。此處に彼が意味する貴族とは決して舊來の傳習的、形式的貴族を指すにはあらず。斯くの如きは彼が寧ろ嘲笑し罵詈したる所なり。即ち彼が所謂貴族は心力に於て民衆を抜ける偉人を指せるものにして、此意味の貴族は因襲を蹂躪し更に人類を向上せしむるもの、民衆の耐へ難き難事をも敢て愉快なる遊戯として之を遂行するものなり。

此意味に於ける貴族主義を主張して彼は、餘りに多き衆愚の權威を排し、平和を唱へ萬人平等を標榜する民主々義と敵へり。さればかの佛國革命の際、凡庸の群に媚び民衆の心を奪ひたる萬人平等の旗印はニイチエに取りては現實生活の發展を呪へる言に外ならざりき。人間は本來平等にあらず、同等の價値を有するも

のにあらず。されば民主々義が人權を平等にし、衆愚の力を以て少數の偉人を壓せんとするは所詮自然の大法に戻り、人類の本性に反したるものなりとし、ツァラツーストヲ如是説にては民主々義を毒蜘蛛に比して之を嘲罵せり。蓋し自然は人類を平等に造らずして、其處に弱者と強者、民衆と貴族との相異を設けたり。此故に若し吾人にして強ひて、人類を平等化せんと力むれば忽ち自然に反し、此處に生活の向上を妨げ、人生の價値を絶滅する恐るべき結果を生ずるや必せり。人類の平等化は臆て人類の凡庸化にして、人類の凡庸化は臆て向上の阻碍なり。彼が「偶像の殘暉」に曰く、世に平等の説ほど怖るべき毒はあらじ。彼等は公正を楯にして宣告すれど、而もこれ實に公正の最期なり。……何となれば權利の平等は權利なきものゝ平等をも意味す。然るに凡ての權利は特權なるを如何せん。……平等なる民衆には平等を與へよ。平等ならざる強者には不等の特權を與へよ。斯くてこそ眞に公正とは言ふべけれ。不等のものは斷じて平等化すべからざるなり。……人類は平等にあらず、又平等たるべからず。……一切の意志を平等化せんとするはこれ生活の敵なり」と。所詮優秀者有力者、剛健なる者は主たるべし。意力な

き弱者、民衆は従たるべし。凡庸なる民衆を以て主たらしめんとする民主々義は到底主客を轉倒せる主張に外ならざるなり。

彼が貴族主義、偉人主義を唱道せるは、かの聲を揚げて英雄の崇拜を叫べるカーライルの主張と類を同するものにして、共に民衆を賤しめ、共に人類の意志が少數の偉人に存する事を極論せるものなり。故に一ケーザーは凡ゆる羅馬の民衆よりも尊く、一ナポレオンは全佛國の民衆よりも意義あり。而して民衆の天職は單に斯かる偉人の犠牲となり、斯かる英雄の奴隸となる所にのみ存するなり。ニーチェは更に以爲らく、斯かる偉人は常に因襲を破り過去の價値標準を粉碎して、更に生活の意義を高きに進ましむるが故に、社會は彼を目するに必ず罪人を以てす。曙光に曰く、誠や斯かる偉人を人呼んで罪人となす。現存の法規を覆すもの、凡て初めは罪人と罵らる。……安んぞ知らん、一切の進化は斯かる惡罪の結果ならんとは」と。

四、非社會主義個人主義 彼が貴族的個人主義は又自から鐵槌を社會主義の頭上に喰はさずんばあらず。蓋し社會主義は個人を以て社會の一員たる以外に何

等の價值をも有せずと思惟し、偏に個人の尊嚴をも社會の下に壓服せんとす。個人の意義と目的とを抑壓して、只管社會民衆の安寧を立せんとす。個人の權威を犠牲にして、専ら社會の幸福を願はんとす。これ最も雷神ニイチエが主張に反するものにあらずや。試に斯かる社會を思ひ見よ。何處に力を得んとする意志あるか。何處に個人の意力あるか。生活を向上せしむべき争闘は此處に終焉を告げて、法規に束縛せられ、惰眠を貪る社會之に代るべし。個人は不羈剛健なる力を失ひて、詭譎を事とする奸策之に代るべし。實に社會主義は奔放なる生存競争に代ふるに社會の平和安秩を以てし、弱者を尊び強者を貶せんとす。

斯くてニイチエは、人間的徹底人間的に於て社會主義を罵つて曰く、社會主義が夢想する所の安寧の郷、完全の社會をして到達せしめんか。然らば直ちに地上は荒廢し、大なる意力は爲めに零滅すべし。人類は天才を生むには餘りに空竭なるべし。抑吾等は剛健なる人物を望むべからざるか。更に新に放逸なる人物の生まるるを希ふべからざるか。又彼が遺稿には、個人の逸樂を捨て、人道の爲めに圖れと言ふか。然らば敢て問はん、果してかの社會主義が求むる秩序整然たる状態

に於ては、無秩序なる昔日の社會が生じたるが如き効果を、人道の爲めに收め得るか。誠に偉人と大業は粗魯なる自由の産物なり。而して人類の目的は他にあらざり、曰く、偉人、曰く大業と呼號せり。

彼が如上の非社會主義的思想は近代思潮に大なる影響を及ぼせり。蓋し近世に於ける科學熱の勃興と共に、時代は漸く物質文明を讚嘆し、一切のもの凡て數量の多寡に由つてのみ其價值を高下せられんとするに際し、ニイチエが獅子吼は人間の價值生活を主張し、個人の權威を以て數量以上のものなりと極論するや、其反響は廣く歐洲全般の思想界に渡りて喚起せられたり。さればアロアリアルル如きも亦ニイチエを讚して曰く、現代の思潮は團體を基本として、個人の根本價值を等閑に付するの嫌あり。而して此妄を啓き、盲目的平等化を非難せるは、これニイチエの効績なりと。

ニイチエが非社會主義的思想は偶彼をして非政治主義を採るに至らしめたり。蓋し現代の國家は多く省局政治と國家社會主義との結合にして、亦個人の權威を認めず、個人の自由を束縛すること甚しければなり。されば彼の思想は一面に於

て國家社會の萬能を主張する現代の風潮に大なる反對の聲を擧げたるものとも見らるべし。今文明を促進し生活を向上せしむるものは少數の偉人なり。然るに現代の民主々義社會主義乃至省局政治は各異なる方面よりして一齊に個人力を抑制し滅殺し、凡庸なる民衆の社會に屈從せしめんとする者にして、これ人文の發達を衰微せしむるものに外ならず。昔に人文のみにてはあらず、凡そ個人の權威を無視し個人生存の意義を壓抑するが如きは、夫れ自身に於て既に大なる罪惡にあらずや。近代文明はルネッサンスに東辰したりと云ふ。而も畢竟これ個人の尊嚴を大聲疾呼したるのみ。今や既に幾世紀を隔てたるニーチェの怒號も豈に亦之に外ならんや。

五、非女性主義男性主義　ニーチェの愛妹エリザベツは女らしき憎惡の情を以て、ニーチェが若くしてシローペンハウエルの婦人論を讀み、之に惡感化を及ぼされたる事を悲めり。彼がシローペンハウエルに著しき影響を受けたるは事實なり。然れども彼の女性觀が全然シローペンハウエルの婦人論を藉りたるものにして、シローペンハウエル微つせば彼が女流に對する見解も亦從つて變りしならんと言ふ

に至つては首肯すべからず。否、寧ろ彼が婦人觀は其思想の必然の結果たらざるばあらず。蓋しニーチェに取りては、人類の發展現實の價値の向上は唯不羈剛健なる強者が猛烈なる意力を以て蠢々たる弱者を壓倒する所に存す。雄々しき力を得んとする意志本能が自由奔放なる活躍をなし、千萬の弱者にだに阻碍せられざる所に存す。さればこそ彼は民衆の力を非難し社會主義を罵りたりき。而して此意味に於て彼は又婦人の解放に反對して止まず。

婦人は本來弱者なり。而も弱者たる事が纏て婦人の唯一武器にして、是によつて男子の意力を害すること少からず。蓋し婦人は性來平靜和樂の生活、換言すればニーチェの所謂奴隸道德を好むの傾あるが故に、男子の不羈剛健の精神を鈍らすこと屢なり。人間的徹底人間的に曰く、婦人は不知不識にして鑛物學者の途上に横はる岩石を撤去せんとす。頭かん事を恐るればなり。されど此岩石こそ其夫が拾はんとするものなる事を知らず。……婦人は常に其夫の不撓の精神を密かに裏がゝんとす。彼等は平和安靜なる現在の爲めに未來を犠牲にせん事を欲するなりと。要するに女性は皆向上を捨て、安逸を貪らんとするものなるが故に、之

に大任を委ぬるは、臆て人類の發展を妨止する所以にして、婦人の解放を主張するが如きは、斷じて容すべからず。

所詮自然は婦人と男子との區別を造つて、一を以て弱者とし、一を以て強者とせり。男子は自然の本能に依つて強者たらんとし、女子は自然の本能に依つて奮闘を嫌ひ屈服を甘んじて以て弱者に止まらん事を願ふ。されば婦人に男子と同一の權を與ふるが如きは、自然の大法に反するものにして、此處に結果するものは、人類の凋殘萎靡たらずんば、あらず。此意味に於て、ニーチェは非女性主義なりき。

然れども彼は、シーペンハウエルの如く婦人を以て人類の敵なりとし、男子は能く限り其蹄中に陥る事を警戒すべしとは論せず。否、斯かる思想は雷神ニーチェが最も好まざる所、彼は決して遁亡を教へず、傲然として人生の一切事に、然りと云へり。彼は忍従を訓へずして反抗を教へ、忌避を訓へずして挑戦を教へたり。されば婦人に闘しても亦彼は之を壓服せん事を主張して曰く、冒險と遊戯と、これ眞の男兒の要件なり。されば男兒は女子を以て最も危険なる玩具として之を尊重す。……汝女人に赴かんとするか、よしさらば汝の鞭を忘るゝ勿れ、ツァラトゥスト

ヲ如是説と。

此故に彼は婦人が男子と同權ならん事を主張する婦人解放説に反對せる限りに於ては、非女性主義なれど、男子の意志を向上せしむべき障礙となり、縁となる限りに於ては、寧ろ婦人の價値を認めたるは、同様の意味に於て、民衆の價値を認めたると同じ。即ち女性は飽くまで其職分内に在りて、男子の爲めに盡し、剛健なる子孫を儲くる事に意を注げば可なり。彼の有名なる女性の心情を看破せる言に曰く、男子の幸福は吾自らが意欲するに在り、女子の幸福は男子の意欲を見るに在りと。されば又結婚の如きも敢て排斥せず、未來の強者を生む爲めには、大に女子を選択して之を舉行すべしと言へり。即ちツァラトゥストは曰く、汝は唯自己の填充のみを企つること勿れ。自己を更に向上せしむべし。而して結婚は更に偉大なるものを生まんとする二つの意志たるべきなりと。

六、非主知主義(主情意主義) 婦人解放論に反對する他の説は、婦人の知力が到底男子の知力に及ばざる事を以て其根據とす。然れどもニーチェは餘りに此點に於ける反對の聲を揚げず。蓋し彼が男子を尊重せるは、専ら其意力、力を得んとする